遺跡発掘調査報告書

利尻富士町役場

1995年度

北海道利尻富士町教育委員会

『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書』正誤表

ページ	位置	誤	正
序	上から16行目	大学大学院熊木俊郎氏と	大学大学院熊木俊朗氏と
35	上から28行目	326・333はＯＩの、329は０Ｉの	326・333はＯＩの、329はＩＯの
36	上から24行目	14点しかない（表　参照）。	14点しかない（第２表参照）。
37	上から13行目	、Ｒ｛ＲＬの	、Ｒ{ R / L
48	第16図170	断面図が折れ曲がっています	
117	図版18説明文	３～９は同一個体。	４～９は同一個体。
118	図版19説明文	1.アシカ♂頭蓋骨矢状隆部分、	1.アシカ♂頭蓋骨矢状稜部分、

序

北海道最北端の宗谷岬より南西62粁の海をへだてた日本海の離島、利尻島の北東部を占める利尻富士町は、利尻島の表玄関としての役割を担いつつ、基幹産業である水産業と観光等を中心とした、明るく豊かな21世紀を目指した町づくりを進めております。

交通網の発達により利尻島も年々交通量が増加しており、幹線道路（道道）の整備は、地域住民にとっても大変重要な問題となっております。

今回、発掘調査が実施された『役場遺跡』もこうした道路整備事業（防雪工事）の一環であり、地域住民及び来島者の交通安全を確保する上でも、その受ける利益は図り知れないものがあると思います。

この工事過程におきまして関係機関と協議を重ねた結果、北海道の委託事業により発掘して記録・保存することになりました。

遺跡より出土した各種資料は当町の古代の姿を明瞭に物語るものであり、特に、鈴谷式土器とオホーツク式土器の関連から、古代史の新たな１ページが開かれたものと確信いたします。

また、この発掘調査にあたりまして、北海道教育委員会生涯学習部文化課のご指導を頂くと共に、利尻町教育委員会学芸係長西谷栄治氏と稚内市教育委員会学芸員内山真澄氏に調査員をお願いし、東京大学大学院熊木俊郎氏と東京大学文学部助手新美倫子女史のご協力を得て、当事業を無事終了することが出来ました。

北海道教育委員会生涯学習部文化課をはじめとして、利尻町・稚内市教育委員会の深いご理解と町内外の多くの方々のご尽力の賜と深く感謝の意を表すると共に、発刊にあたり関係各位に心からお礼を申し上げる次第であります。

平成７年３月

利尻富士町教育委員会
教育長　吉　田　　勤

例　言

1. 本書は、利尻郡利尻富士町鴛泊字港町の道道沓形仙法志鴛泊線防雪工事用地内に所在する、利尻富士町役場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の所在地
   利尻郡利尻富士町鴛泊字港町124～137番地（H－10－7）
3. 調査期間
   平成6年5月9日～平成6年6月6日
4. 調査体制
   調査主体者　利尻富士町教育委員会
   教　育　長　吉田　勤
   次　長　田村　祥三
   社会教育係長　山田　潔
   調査担当者　稚内市教育委員会　内山　真澄
   利尻町立博物館　西谷　榮治
   調査員　東京大学文学部　新美　倫子
   東京大学大学院生　熊木　俊朗
5. 本書は、第1章・第2章・まとめを西谷榮治、第3章・遺構・石器を内山真澄、骨角器・動物遺体を新美倫子、土器を熊木俊朗が担当した。
6. 第7章の種子分析については北海道立開拓記念館の山田悟郎氏にお願いし玉稿を賜った。
7. 土器整理　青野　友哉、瀧川　渉、馬場伸一郎（明治大学学生）
   石器実測　内山久美子
8. 本書の編集等の作業は内山真澄がおこなった。したがって各執筆者の意を誤って伝えていたならば、その責は編集者にある。
9. 発掘調査、資料整理において、下記の機関、人々より御指導、御協力をいただき記して感謝の意を表す。
   北海道教育庁文化課、札幌市埋蔵文化財センター、東京大学文学部付属北海文化研究常呂実習施設、種市幸生、畑宏明、加藤邦雄、上野秀一、羽賀憲二、西本豊弘、前田潮、宇田川洋、大貫静夫、武田修、菊池徹夫、阿部義平、小野裕子、右代啓視、山浦清、大沼忠春、菊池俊彦

目　　次

序 …… 利尻富士町教育長 吉田　勤

例言

第1章 発掘調査に至る経過 …… 1

第2章 遺跡の位置と環境 …… 2

第3章 発掘調査の方法と層序 …… 5

第1節 発掘調査の方法 …… 5

第2節 層序 …… 5

第4章 遺構 …… 9

第5章 発掘区出土遺物 …… 17

第1節 土器 …… 17

第2節 石器 …… 57

第3節 骨角器・土製品 …… 69

第6章 動物遺体 …… 73

第1節 魚類 …… 73

第2節 鳥類 …… 74

第3節 哺乳類 …… 74

第7章 魚骨層から出土した植物遺体 …… 85

まとめ …… 88

報告書抄録 …… 121

挿図目次

第1図　遺跡の位置……4
第2図　遺跡付近地形図……6
第3図　発掘区配置図……7
第4図　発掘区セクション図……8
第5図　遺構関連図(1)……13
第6図　遺構関連図(2)……14
第7図　遺構実測図(1)……15
第8図　遺構実測図(2)……16
第9図　発掘区出土土器(1)……41
第10図　発掘区出土土器(2)……42
第11図　発掘区出土土器(3)……43
第12図　発掘区出土土器(4)……44
第13図　発掘区出土土器(5)……45
第14図　発掘区出土土器(6)……46
第15図　発掘区出土土器(7)……47
第16図　発掘区出土土器(8)……48
第17図　発掘区出土土器(9)……49
第18図　発掘区出土土器(10)……50
第19図　発掘区出土土器(11)……51
第20図　発掘区出土土器(12)……52
第21図　発掘区出土土器(13)……53
第22図　発掘区出土土器(14)……54
第23図　発掘区出土土器(15)・遺構出土土器…55
第24図　発掘区出土土器(16)……56
第25図　遺構出土石器……64
第26図　発掘区出土石器(1)……65
第27図　発掘区出土石器(2)……66
第28図　発掘区出土石器(3)……67
第29図　発掘区出土石器(4)……68
第30図　発掘区出土骨角器(1)……71
第31図　発掘区出土骨角器(2)……72

挿表目次

第1表　遺構一覧表……90
第2表　土器口縁部資料出土数量集計表
　（表土・撹乱層以外）……38
第3表　利尻富士町役場遺跡の上器群
　（口縁部資料）の構成……39
第4表　利尻富士町役場遺跡の上器群
　（口縁部資料）の構成比率……40
第5表　器種・層位別石器出土一覧表……91
第6表　遺構出土石器計測一覧表……92
第7表　発掘区出土石器計測一覧表……92
第8表　遺跡別石器組成……98
第9表　骨角器属性表……99
第10表　土製品属性表……99
第11表　出土動物種名……78
第12表　水洗選別魚類出土数量（椎骨）……78
第13表　水洗選別魚類出土数量（椎骨以外）79
第14表　発掘時取り上げ魚類出土量……80
第15表　鳥類出土量……80
第16表　イヌ出土量……81
第17表　陸獣類出土量（イヌ以外）……82
第18表　遺構内海獣類出土量……82
第19表　遺構外海獣類出土量……83
第20表　イヌ頭蓋骨・上顎骨計測値……84
第21表　イヌ下顎骨計測値……84

図版目次

図版1　遺跡遠景……101
　遺物出土状況1……101
図版2　遺物出土状況2……102
図版3　遺物出土状況3……103
　遺構1……103
図版4　遺構2……104
図版5　出土土器1……105
図版6　出土土器2……106
図版7　出土土器3……107
図版8　出土土器4……108
図版9　出土土器5……109
図版10　出土土器6……110
図版11　出土土器7……111
図版12　出土土器8……112
図版13　出土石器1……113
図版14　出土石器2……114
図版15　骨角器・土製品……115
図版16　動物遺体1……116
図版17　動物遺体2……117
図版18　動物遺体3……118
図版19　動物遺体4……119
図版20　植物遺体……120

第1章　発掘調査に至る経過

稚内土木現業所利尻出張所では、平成5年度において沓形仙法志鴛泊線防雪工事（ロードヒーティング）工事を計画した。これは利尻島における近年の離島観光ブームによって年々来島者が増加し、島内景勝地を巡る交通手段としてバス、自家用車、レンタカー、レンタバイク、レンタサイクル、徒歩など島内交通量が増加することとなったため、景勝地の一つである利尻島北部の鴛泊市街から北に向かって海岸に突き出ているペシ岬への観光客もあわせて増加するなど、道路拡幅整備が緊急の課題としてあった。また、このペシ岬の付け根を通る道々沓形仙法志鴛泊線の鴛泊字港町地区の道路195mは道路の縦断勾配がきついため、冬期間において車線を逸脱する車輌が見られることなどから、交通安全からも早期の安全対策が求められていた。

稚内土木現業所利尻出張所では、こういった必然性から歩道改修と冬期間の交通安全のためロードヒーティング工事を計画することとなった。

しかし、それら工事が計画された地点には、周知の埋蔵文化財包蔵地である利尻富士町役場遺跡が存在していたため、稚内土木現業所利尻出張所から平成5年8月23日、利尻富士町教育委員会に事前協議書が提出された。

事前協議書の届け出を受けた利尻富士町教育委員会では北海道教育庁との協議のもとに、稚内市教育委員会文化振興課内山真澄氏に遺跡範囲確認調査（B調査）を依頼し、平成5年9月7日調査を行った。

遺跡範囲確認調査は工事予定区域内に1m四方のテストピットを5ケ所設け、人力による試掘を行った。その結果、いずれのテストピットからも土器片や動物骨が出土し、特に、工事予定区域中央付近に設けたテストピットでは、遺物包含層が他のテストピットよりも厚く、しかも遺物量が多かったことから住居址の可能性があると判断されたため、途中で試掘を打ち切った。5カ所のテストピットから出土した主な遺物は続縄文時代の鈴谷式土器片、刻文・浮文系のオホーツク式土器片、獣骨であった。

このことから、利尻富士町役場遺跡は続縄文時代からオホーツク文化にかけての遺跡があり、しかも貝塚の確実な存在と竪穴住居址が存在する可能性を持つ遺跡であると認められた。

この調査結果をもって、北海道教育庁、稚内土木現業所利尻出張所、利尻富士町教育委員会の三者による遺跡の保護、保存についての協議が重ねられた。その結果、工事予定区域にかかわる遺跡50㎡について工事計画の変更が出来ず遺跡の現状保存は無理であるとの判断から記録保存のための発掘調査が必要であるとの結論が出された。

それを受けて利尻富士町教育委員会では発掘調査体制を整えるとともに、調査時期を平成6年5月から取りかかることに決められた。発掘調査は利尻富士町に調査員がいないため、利尻町立博物館西谷榮治、稚内市教育委員会文化振興課内山真澄、東京大学大学院生熊木俊朗の3名に依頼され、平成6年5月9日から発掘調査が開始された。また、発掘調査中から動物遺体の出土が予想外に増えたため、新たに東京大学常呂研究室新美倫子が発掘調査に加わった。

（西谷榮治）

第2章　遺跡の位置と環境

日本列島日本海側の北にある利尻島は周囲63.3kmのほぼ円形をした火山体であり、その中心に利尻火山、利尻富士とも呼ばれる成層火山（1,721m）が位置している。利尻島を構成する基盤岩は第三系中新統の港町層、鴛泊層、新鮮－更新統の貫入岩体に区分されている（松井ほか1967；小林1987）。

従って、利尻火山は海底から生長した火山ではなく、これら基盤岩上に形成されたものとされている。

利尻富士町（旧東利尻町　1990年町名改正）は利尻島のほぼ東部に位置し、面積107.89㎢、海岸延長40.0kmの町である。利尻富士町役場は利尻島北部の集落鴛泊にあり東経141°13′48″、北緯45°14′29″の位置にある。

利尻富士町役場遺跡は、この鴛泊市街地にある。遺跡は鴛泊港の背後に新第三紀中新世の鴛泊層からなる段丘面の先端部にある。段丘面は北川に緩やかに傾斜し鴛泊港を北川から抱くように突き出ているペシ岬の基部に繋がっている。そこを削り取って利尻島を周回する道々が敷設されている。

鴛泊はアイヌ語でウシトマリと表され、湾・入り江にちなむ地名と解されている。現在、ペシ岬と呼ばれている岬は、かつてはシペシと呼ばれ、「大きい道・崖」の意味となる。このシペシの付け根、北西側にかつてはモペシ「小さい・崖」があった。これは大正期に始まった稚内港築設のため削り取られてしまい、現在に残っていない。

鴛泊地区には多くの遺跡が存在する。荒屋型彫器が採集されている旧石器時代の栄町キャンプ場遺跡、縄文時代の栄町遺跡、港町１遺跡、港町２遺跡、利尻富士町役場遺跡、続縄文時代からオホーツク文化にかけてのペシ岬遺跡、鴛泊港遺跡、ペシ岬燈台遺跡など８遺跡が集中する。島内の他地域ではみられないこれら遺跡の集中は、旧石器時代からオホーツク文化にかけて生活に適した地域であったということをうかがい知ることができる。

しかし、これら遺跡の調査がほとんどおこなわれていないことから、その実態を知ることは難しい。このように先史文化が展開されていた鴛泊において、その後、同地区に関する資料が再び現れるようになったのは17世紀後半頃からである。寛政９年に編まれた『松前地並東西蝦夷地明細記』には『ヲチノトマリ　此処大舩ノ澗アリ』とあり、ペシ岬に囲まれた湾が船掛かりに適していたことがわかる。文化４年の田草川伝次郎による『西蝦夷地日記』には『ヲツチトマリ　番屋茅蔵壹軒』とある。両者の記録から鴛泊には比較的早くから漁場が置かれ、船入り澗として利用されていたことがわかる。さらに、松浦武四郎の『再航蝦夷日誌』には「船澗島中二カ所有。一ケ所は運上屋前、一ケ所は是より二カ斗南の方ウシトマリ番屋前也。此処の方か風当りなきよし聞り」とあり、船澗としては運上屋が置かれていた本泊より鴛泊の方が適していたとしている。さらに松浦武四郎はウシトマリから船に乗ってハツカイ（抜海）へ渡っている。

その後においても近世の利尻島に関する文献や絵図類には鴛泊地区に「漁番屋」が設けられていることから漁場が営まれていたことが明らかである。従って当地では近世において比較的早い時期から連続して生業が営まれていたと思われる。また、これら近世の文献に記されている利尻島の産物には鯡、鱈、煎海鼠、干鮑、昆布などがあった。利尻島で産出される豊富な海産物の生産の一翼をこの鴛泊「漁番屋」も担っていたのであろう。鴛泊地区は海の生態系の恵みを得るのに適していた地と考えられる。

鴛泊地区の遺跡解明の歴史は古い。1889年４月『東京人類学会雑誌』に「北見国利尻郡鴛泊」の名前が紹介された（石川1889）。その後、昭和７年名取武光等によって調査され、鴛泊地区では５地点

で遺物採集したことを報告した（名取1933）。報告にはペシ岬の写真が掲載され、ペシ岬C点は「道路開鑿の際多數人骨と土器を出す」と写真解説し、さらに「税関附近の表面採集及断層発掘に於て得たものは、薄手で無紋、擦紋、刻紋の土器片及角岩製の石槍一個である。尚、此の税関下の道路開鑿の際、多數の土器、頭蓋骨等を出したと云はれてゐる」と注目される記述を行っている。

さらに、ペシ岬の他の遺跡についても次のように触れている。

「ペシ岬の突角は天嶮を利用した砦址であって、現在の燈台附近にも遺物を出す。岬の中腹には二間に三間位の竪穴様の窪地を存し、土石器片を出」し、さらに「ペシ岬に於ては厚手薄手両様の土器片を得たが、薄手多く無紋、押紐紋及浮紋等であった。尚ペシ岬の海に面する渚の部分（俗に又一番屋）に、シジミ貝を主とする貝塚があったと云ふも現在は地ならしの為存しない。此処から当地の高瀬清七氏の採集した土器片を見るに、厚手は無紋、薄手は舟形刻紋を有する」。

これら採集された土器片総てが図示されていないが、押紐紋は縄線文をもつ鈴谷式土器をさし、浮紋や舟形刻紋はオホーツク式土器の浮紋系土器や刻文系土器をさすものと思われる。以上のことから、ペシ岬のこれら遺跡は少なくとも鈴谷式土器やオホーツク式土器を出土するものであると理解される。

利尻富士町役場遺跡として分布域が確認されている範囲には利尻富士町役場があるが、かつては海上保安部鴛泊分室や稚内開発建設部の鴛泊監督員詰所、警察官駐在所などの建物があった。今回の発掘調査区域内にも、かつて建物の基礎や排水施設が包含層を貫いて地山に達するまで深く掘り込まれていた。さらに、道々の改修工事も拡幅や勾配を緩めるなど幾度となく行われてきたようである。

このようなことから、利尻富士町役場遺跡は道路掘削や公共建築物の設置などによって、相当古い時期から人為的な影響を強く受けていたことがわかる。

利尻富士町役場遺跡が位置する段丘面には本遺跡の他に港町１遺跡、港町２遺跡があり、ペシ岬にはペシ岬遺跡、鴛泊港遺跡、ペシ岬燈台遺跡が存在する。利尻富士町役場遺跡より標高が高い段丘面にある港町１遺跡、港町２遺跡は縄文後期頃の遺跡と思われ、ペシ岬に立地する３遺跡は鈴谷式土器とオホーツク式土器を出土する遺跡であり、時代によって住み分けられていたことがわかる。

昭和51年の利尻富士町教育委員会による一般分布調査では、利尻富士町役場庁舎より標高が高い地点で縄文土器と黒曜石の剝片が採集され、ペシ岬遺跡からは円形刺突と縄線文を有する鈴谷式土器と沈線文と貼付文が施されオホーツク式土器が採集された。このことから、ペシ岬遺跡は道々を挟んで、今回調査した地点あたりまで広がり、利尻富士町役場遺跡とは採集される遺物から時代や立地において両者は区別されるものであるとしていた（利尻富士町教育委員会1977）。

しかし、その後、昭和57年６月に行われた北海道教育委員会による一般分布調査で、発掘調査地点は利尻富士町役場遺跡に連続するものとしてペシ岬遺跡とは道々を挟んで区分され、利尻富士町役場遺跡は縄文期の遺跡であるとされた。

しかしながら今回の発掘調査で得られたたくさんの鈴谷式土器やオホーツク式土器、それらに伴う動物遺体などの遺物から、本発掘調査地点はやはりペシ岬遺跡の連続としてとらえることが妥当であろう。むしろこれまで採集されている遺物やそれらの時代において今回の発掘調査地点は、ペシ岬一帯に分布するペシ岬遺跡、ペシ岬燈台遺跡、鴛泊港遺跡との関連において理解されなければならないであろう。

（西谷榮治）

第１図　遺跡位置図

第３章　発掘調査の方法と層序

第１節　発掘調査の方法

本遺跡の調査は利尻富士町鴛泊を通る道々沓形仙法志鴛泊線の防雪工事予定地内に所在する遺跡部分を対象としている。遺跡の主体部は調査区より南側の現役場庁舎方向一帯の地域であるが、工事計画によれば現道々に沿って３～４ｍの拡幅となっている。

調査区は現道々沿いに３ｍ程の幅で細長く延びており、複数列のグリットを設定するには無理と考えた。したがって、調査は工事計画の側線を基線として利用する４ｍ×４ｍグリットを１単位とした、１列延長の発掘区を設定し行った。

グリットの名称は、長軸方向をＡ～Ｇ区、短軸方向をＩ区とした。

調査区は、かつてこの地を利用して立てられていた建物の基礎撹乱やゴミ穴等の攪乱が多数検出され、層序の連続性が失われている部分も多く認められた。

このように調査区内における層位の状態が悪いにもかかわらず獣骨や魚骨層が認められ、更にはピット内にも獣骨や魚骨が充填されている例があった。土壌の取り扱いについては、ピット内土壌の全量収納、獣骨・魚骨層も出来る限り取り上げて水洗処理を行うこととして作業を進めた。

第２節　遺跡の層序

発掘における層序については前項でも触れているごとく、多数の攪乱を受けており層位の連続性が失われている部分も多いが、調査区境における層位状態について記す。

第１層　表土及び撹乱層。住宅等の基礎撹乱、水道、下水施設の埋設撹乱、ゴミ穴等が著しく、特にＣ・Ｄ・Ｅ区においては地山層にまで達しているため層位の連続性が失われている。

第２層　黒色土１層。ポソポソして顆粒状の黒色土（調査中、黒２と呼んでいた層）。

第３層　黒色土２層。包含層の主体を成す層で、第２層に比べると全体にしまっておりネバリがある（調査中、黒３及び黒１と呼んでいいた層）。第３層全体を通して分層することは難しいが短軸のＥ区をあらわすセクションで見るならば、破線で表わされる上層では遺跡が少なく、下層では遺物量が増すとともに、セクションベルトを残して作業を行っていたＤ区側では獣骨層・土器レベル・魚骨レベルに分層することが可能であった。

第４層　地山層。全般的には褐色であるが、Ｄ区などの低位部では黒の色調を呈しており、第３層との識別に苦労した部分もある（調査中、一部黒４と呼んでいた黒色無遺物層）。

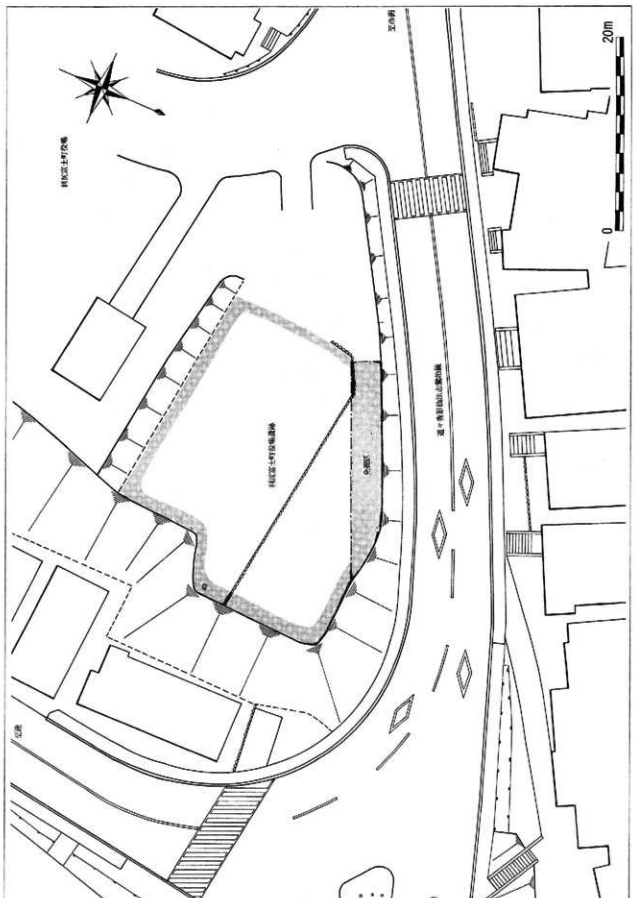
以上、４層が本調査区の基本層位であるが幾つかの間層と遺構の断面が観察される。

第５層　Ｄ区セクションに見られる魚骨ブロック、第２層と第３層にはさまれている。

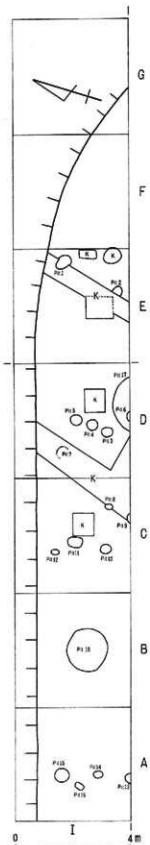
第６層　Ｃ区セクションに見られる黄白色粘土、第２層と第３層にはさまれている。

Ａ区セクションには第13号ピット、Ｄ区では第９号・第17号・第６号ピットが認められる。

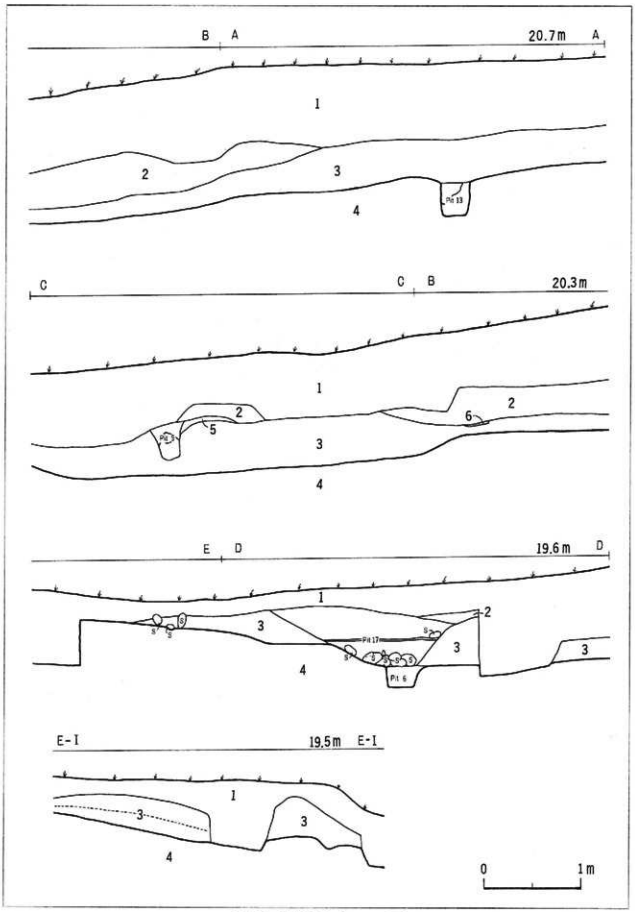
（内山真澄）



第２図　遺跡附近地形図



第３図　発掘区配置図



第4図　発掘区セクション図

第4章　遺　　構

本調査によって検出された遺構は獣骨や魚骨の充塡が見られる小遺構16基、皿状のくぼみに礫の見られる配石遺構2基である。

小遺構の存在確認は第3層の下位に多い。第3層は層序において記したごとく、上層と下層において遺物出土の差異を認めることができるが全体を通して分層することはできなかった。又、C区・D区においては、下位の層は魚骨ブロックや獣骨ブロック、明瞭なブロックや広がりとしては線引きしにくいが魚骨混じり、あるいは炭化物混じりの小範囲で薄い層が互層となり地山近くまで続いていた。このような第3層下位にあって、各小遺構は厚さ数センチ単位で第3層を下げて行く過程で、数センチ違いのレベルで一基二基と確認されており、薄い層によってパックされていたと言える。したがって、C区・D区における小遺構は第2層やそれより上の層から掘りこまれた遺構ではなく、明らかに3層の堆積期間中に構築されたものである。このような傾向は、3層下位で確認されたA区・B区の小遺構についても同じことが言える。C区セクションにおいて確認されている第9号ピットは第2層より掘り込まれていると思われる。E区においては、第2層が消失しているため掘り込み面を断定できない。配石遺構の第17号ピットはセクション面より見て第2層中より掘り込まれている。

ピット内土壌を水洗処理して得られた動物遺体の内容分析については第6章、土器については第5章第1節においてまとめて取り扱う。

第1号ピット（第7図）

略長円形の平面、断面は垂直に近い立ち上がりを示す。遺構西側の一部を建物基礎により消失している。埋土1は魚骨を多く含む黒色土である。遺構上層の東側に剝片類が集中していた。

鈴谷式土器9片、不明土器片1、石鏃1、両面加工のナイフ4、ナイフ3、Uフレーク5、フレーク33、チップ260gの遺物が出土している。

石器（第25図1～8）

第1次剝離面を表裏に残す有茎の石鏃で先端部を欠失する(1)、両面加工のナイフで入念な両面加工の見られる（3・4）、第1次剝離面を大きく残す(2)、切断された刃部（この形状で完形品の可能性もある）(5)、鋭い刃部を作り出し形状不定のナイフ（6～8）。

第2号ピット（第7図）

長円形の平面、深いボール状の断面形を示し、西側は建物基礎により消失している。埋土1は炭化物を多く含む黒色土（骨片を含む）。出土遺物はない。

第3号ピット（第7図）

長円形の平面、擂鉢状の断面形を示し、北側開口部に礫が見られる。埋土1の色調は第3層と同じ黒色だが、しまりがなく魚骨を多量に、獣骨を小量含む。壁は埋土に比べやや硬く魚骨は止まる。

オホーツク式土器片1、形式不明土器1、ナイフ1、フレーク9、チップ7g。

石器（第25図9）

2側縁に鋭角な刃部を作り出しているナイフの先端部。

第４号ピット（第７図）

略円形の平面、ボール状の断面形を示す。埋土１の色調は第３層と同じ黒色だが、しまりがなく魚骨や獣骨を含む。壁は埋土に比べやや硬く、魚骨は止まる。

オホーツク式土器片１、形式不明土器片１、フレーク４、チップ９ｇ。

第５号ピット（第７図）

略円形の平面、摺鉢状の断面形を示す。ピット上面は第３層の黒色土に覆われているが、第３層を取り除くと黒色で色調は同じだが魚骨や獣骨を含むやや軟らかい埋土１となる。壁は埋土に比べやや硬く魚骨は止まる。

鈴谷式土器片３、オホーツク式土器片１、フレーク12、チップ９ｇ。

第６号ピット（第７図）

第17号ピット壙底面と発掘区境セクション面に現われた遺構である。断面は摺鉢状を示すであろうと思われるが、平面形は未調査部分が多く不明である。埋土１は汚れた暗黄褐色土。

フレーク２点が出土している。

第７号ピット（第７図）

D区の建物基礎による撹乱部底面において、壙底面のごく一部がかろうじて確認されたにすぎない。したがって遺構の平面形及び断面形は不明である。遺物もなんら検出されていない。

第８号ピット（第７図）

一部基礎による撹乱を受け、第３層中位の獣骨ブロックレベルより掘り込まれている。長円形の平面、クサビ状の断面形を示す。獣骨レベルの作業中はブロックの一部と考えていたが周囲の獣骨等の遺物を取り上げると、小ピットに獣骨が突き刺さるように充塡していることが確認された。ピット内はほとんどが焼けた獣骨だが、小量の埋土も見られる。埋土の色調は第３層にほぼ同じだが、しまりが悪く、手の感触にて壁面を確認し、壁面にて遺物は止まる。

第９号ピット（第７図）

C区のセクション面において確認することができる。第２層の黒色土下位から掘り込まれ、魚骨ブロックを切り、第３層中に構築されている。大部分が発掘区外にあるため平面形は不明、断面は摺鉢状を示す。埋土１は暗黒褐色土、Bは獣骨ブロック、２はボソボソしてしまりが悪い暗黒色土。

人工遺物は検出されていない。

第10号ピット（第７図）

略円形の平面、摺鉢状の断面形を示す。埋土１の色調は第３層と同じ黒色土であるが、しまりが悪く、手の感触により壁面を確認し遺物は止まる。ピット中央に図示される獣骨はピット内上位に位置する。

鈴谷式土器片３、オホーツク式土器片１、スクレーパー１、フレーク５、チップ６ｇ。

石器（第25図10）

縦長の剝片を利用し図の下端部に背の高い刃部を作り出している。

第11号ピット（第７図）

略長円形の平面、摺鉢状の断面形を示す。埋土１の色調は第３層とほぼ同じ黒色土で、しまりが悪くボソボソしている。図示される獣骨はピットより上層。

鈴谷式土器片３、オホーツク式土器片２、石鏃２、フレーク20。

石器（第25図11）

２点の石鏃が出土しているが１点は破片である。11は非常に薄い剥片を利用し、表裏に第一次剥離面を残しているが、入念な加工により細身の二等辺三角形に仕上げられている。

第12号ピット（第７図）

長円形の平面、摺鉢状の断面形を示す。埋土１の色調は第３層とほぼ同じ黒色土であるが軟らかくボソボソしている。

鈴谷式土器片１。

第13号ピット（第８図）

A区のセクションにおいて確認することができる。調査区には半円状の平面、ほぼ垂直に立ち上がる断面形を示す。埋土１の色調は第３層とほぼ同じ黒色土であるがやや軟らかい、２は黄褐色砂である。遺構内に砂の見られる例は他にない。遺物は検出されていない。

第14号ピット（第８図）

長円形の平面、摺鉢状の断面形を示す。埋土１の色調は黒褐色土で第３層に近似する。

オホーツク式土器片１。

第15号ピット（第８図）

長円形の平面、摺鉢状の断面形を示す。埋土１の色調は黒褐色土で第３層に近似する。

遺物は検出されていない。

第16号ピット（第８図）

略円形の平面、摺鉢状の断面形を示す。埋土１は第３層に近似する黒褐色土、２は１の黒褐色土に地山の褐色土が混入したもの。遺物は検出されていない。

第17号ピット（第８図）

D区のセクションにおいて確認することができる。調査区には半円状の平面、ボール状の断面形を示している。当初ピット内の礫について、建物基礎撹乱中に多量に含まれていた礫と誤認していたため遺構との認識に欠けていた。したがって、ピット内出土遺物の取り扱いをすることができなかった。埋土は第２層の黒色土層の下に、１魚骨を含む黒褐色土、２炭層、３地山の小ブロックを含む黒褐色土と礫。本ピットの下位には第６号ピットが構築されている。

第18号ピット（第８図）

円形の平面、浅鉢状の断面形を示す。ピット全体に数10個の礫を配し、掘り込みの浅い遺構である。埋土は、第３層の黒色土そのものであるが、図上に破線で示される範囲に炭化物の混入が多く見られ

た。

フレーク17点が検出されている。

以上、検出されたピットについて記述した。

本調査区において検出されたピットには、2種類のタイプが見られる。一つは配石を伴う大型のピットであり、もう一方は径数10センチの小さなピットである。

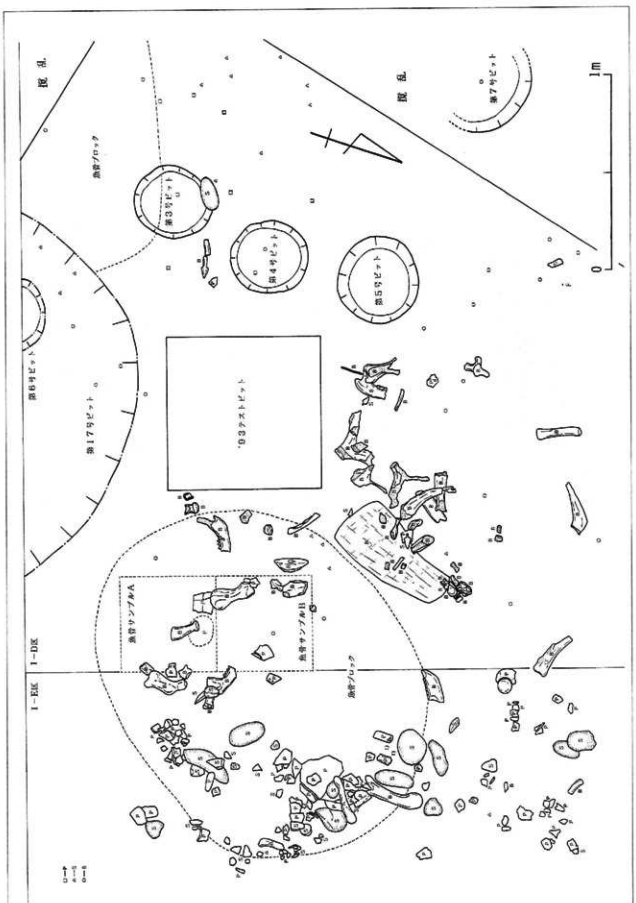
配石を伴う大型のピットの性格については、礫群に火を受けていることが多いことから、獲物を大量に捕獲できる季節に作られ、その間の食料調理・保存食料作り等に利用された施設ではなかろうかとの説がある。しかし、本調査ではこの説を直接支持するような遺物を伴って検出されているわけではない。又、礫だけしか出土しない配石ピットは、それ自体が情報量の少ないピットといわねばならない。2基の配石ピットについてここで想像力の論を進めるのではなく、次項で石器組成を検討しながら本調査区内で配石ピットの持てるであろう性格の可能性について考えてみたい。

小さなピット群については、ピット内の総ての土壌を採取して水洗処理して得られた動物遺体の分析から、一つ一つのピットは小さなゴミ穴であろうと考えられる。つまり、魚類をある程度の量を処理して残された残骸を本調査区に持ち込み、小ピットを掘って埋めたものと推測される。この種のピットはそこここに無秩序に掘り、一方では小さな魚骨ブロックの堆積が見られるように、ピットを掘らずに直接投げ棄てる行為とが繰り返されたものと観察できる。このような行為は、魚類だけではなく、第8号ピットを好例とするように獣骨のピット内への廃棄。あるいは、C区D区に見られた獣骨のように直接廃棄も同時に行われていたのであろう。

本調査区の性格を考えるとき、全体的には本遺跡を営んでいた人々の生活残滓の廃棄場所である。そこには、魚類残骸や獣骨類を埋めた小ピットが残され、直接投げ棄てたであろう魚骨などの小ブロックと獣骨のまばらな堆積が認められた。ピットの構築時期について、多くは第3層中に求められ、短い時間差でピットの掘り込みや直接廃棄が繰り返されていたことが発掘中の層処理やセクションから見て取れる。

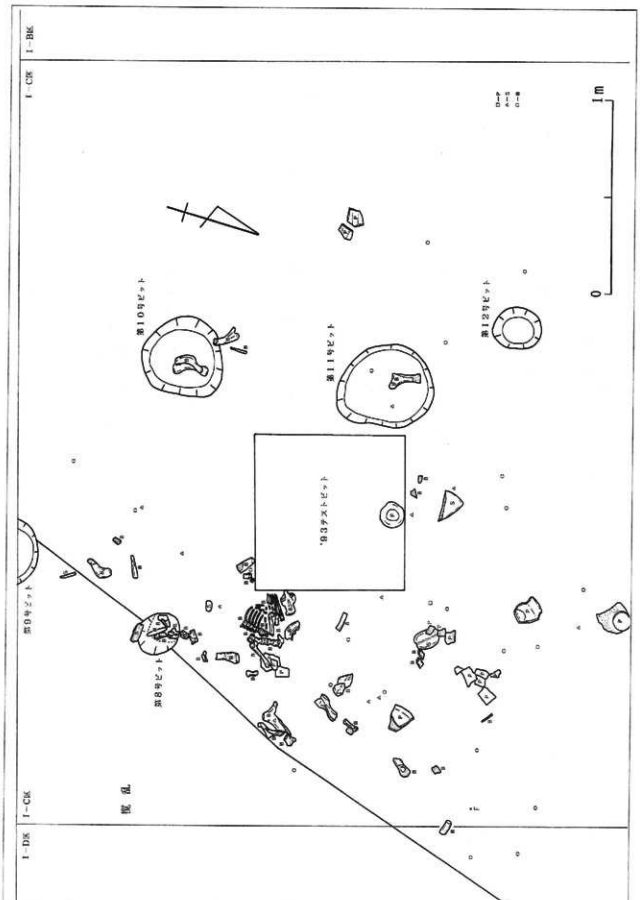
遺跡の調査中に、無遺物ピットなどと呼ばれ数点の土器片かフレークしか出土しない用途のよくわからない小ピットが多数検出されることは、縄文時代の遺跡をはじめ、どの時代の遺跡においてもよく知られている。その性格について多くの説があるが、一つの説によって総てを納得させることのできるものはない。数多くある、可能性の説の中に本遺跡検出のピットのようにゴミ穴として使われたピットも存在することをつけ加えておきたい。

（内山真澄）

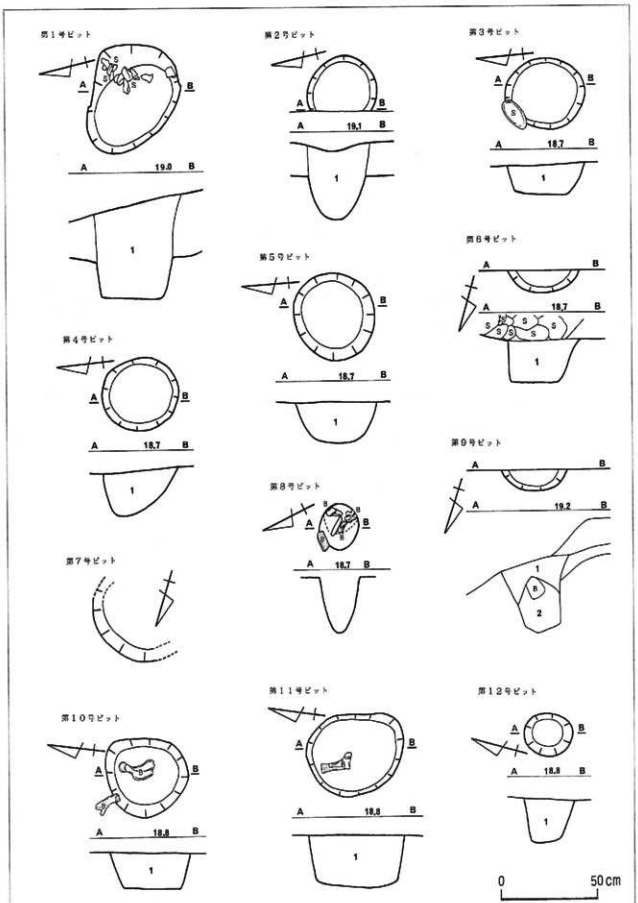


I-EK
I-DK
第6号ピット
第17号ピット
第3号ピット
第4号ピット
第5号ピット
第7号ピット
D3テストピット
魚骨サンプルA
魚骨サンプルB
魚骨ブロック
1m

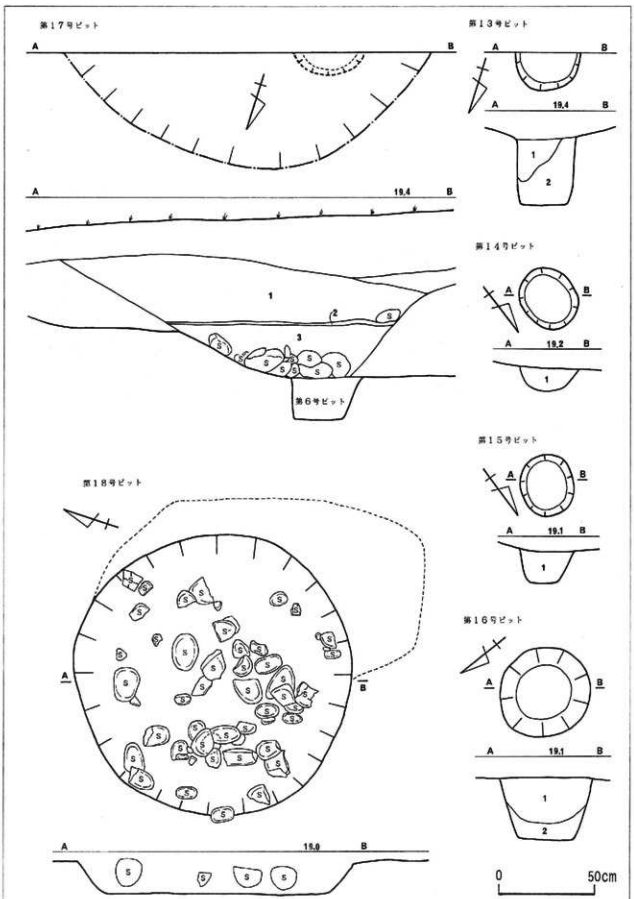
第5図　遺構関連図(1)


I-BK
I-CK
I-DK
第10ヤビット
第11ヤビット
第12ヤビット
第9ヤビット
第8ヤビット
'93テストピット
0
1m

第6図　遺構関連図(2)


第1号ピット
A
B
S
19.0
1
第2号ピット
A
B
19.1
1
第3号ピット
A
B
S
18.7
1
第4号ピット
A
B
18.7
1
第5号ピット
A
B
18.7
1
第6号ピット
A
B
S
18.7
1
第7号ピット
第8号ピット
A
B
18.7
第9号ピット
A
B
19.2
1
2
第10号ピット
A
B
18.8
1
第11号ピット
A
B
18.8
1
第12号ピット
A
B
18.8
1
0
50cm

第７図　遺構実測図(1)


第17号ピット
第13号ピット
第14号ピット
第15号ピット
第16号ピット
第18号ピット
第6号ピット
A
B
19.4
19.2
19.1
19.0
1
2
3
S
0
50cm

第8図　遺構実測図(2)

第5章　発掘区出土遺物

遺物の取り上げについては発掘調査の方法、層序において記述したごとく、出来る限り分層してとりあげ、獣骨・魚骨層はブロック状の範囲で層位ごと取り上げるように心掛けて作業を進めた。
したがって、水洗処理して検出された遺物には微小のものが多い。

第1節　土　　器

Ⅰ　資料の取り扱いについて

1.　資料の集計

資料数の集計は、口縁部が遺存している資料を対象に行った。集計に際しては、接合する・しないを問わず、同一個体と思われるものを1としてまとめ、完形資料と破片資料の区別をせず数えた。異なる層位間で資料が接合した場合には、最も下位の層位に属するものとして集計している。胴部・底部資料については、無文、あるいは縄文のみ施された資料が多数を占め、同一個体の認定が困難であったため、集計しなかった。また、撹乱の著しい表土・撹乱層の資料は、集計しなかった。
集計結果は第2表～第4表のとおりである。

2.　記載にあたっての選択

完形、あるいは全体の形が知りうる資料は全て実測図を掲載した。破片については、口縁部・胴部・底部とも、その部位の全周のほぼ⅓以上復元できたものは実測図・拓本によって図示した。それより小さい破片については、以下のように選択を行った。

a．口縁部については、同一層内で文様等が著しく類似する土器は省略している場合がある。特に表土・撹乱層内では省略したものが多い。
b．胴部については、無文・縄文のみの資料については基本的に図示していない。その他の文様がある土器については、口縁部と同じ要領で選択を行っている。
c．底部については、上に記したもの、すなわち底径が復元できたもののみを図示し、それ以外の資料は省略した。

3.　記載にあたっての分類

第Ⅰ群　オホーツク式土器

大井晴男氏の分類〔大井　1976、1982〕を基本として、4種に区分した。

a．沈線文系文様をもつもの
b．刻文系文様をもつもの
c．刺突文系文様をもつもの
d．無文のもの

無文のものはごく少数である。

第Ⅱ群　いわゆる鈴谷式土器

鈴谷式土器の定義をめぐってはさまざまな見解があり、「恵須取式」、「遠淵式」、「メクマ式」などの型式設定と関連して、どこまでを鈴谷式に含めるかという点で各氏の主張は一致していない〔岡田　1967、新岡　1970、菊池　1981、山浦　1985など〕。本遺跡で鈴谷式と分類した土器群では、口唇以外のいずれかの部分に縄文を有する土器、すなわち香深井B遺跡の第Ⅲ群土器〔菊池　1981〕に相当するものが多数を占める。香深井B遺跡の報告者である菊池俊彦氏が述べるように、伊東信雄氏が最初に設定した「鈴谷式土器」〔伊東　1942〕には縄文を有する土器、中でも特に縄線文（撚糸圧痕文）を欠き縄文を有する土器は含まれていない。しかし、本遺跡の縄線文と縄文を有する土器は、筆者の実見によると、底部形態を除けば、オンコロマナイ遺跡出土土器と同じ特徴を有しているものを多数含んでいる。オンコロマナイ遺跡の報告のなかで岡田宏明氏が述べているように、これらの土器は鈴谷式土器に含めることが可能であろう。また、縄文のみを有する土器も、胎土・口縁部形態・円形刺突文の特徴・口唇部の文様については縄線文を有する土器とは遜ぶところがなく、本遺跡の土器に限っていえば、当面のところ鈴谷式に含めて考えるのが妥当であると判断した。少なくとも、「遠淵式」、「メクマ式」などの、鈴谷式以外の既存の別型式に包括するに足る根拠はないと考えた。

このようにして「いわゆる鈴谷式土器」として一括した土器群を、今回は文様の特徴によって以下のように分類した。

a．口縁部に縄線文（撚糸圧痕文）を施すもの

このa類は、胴部に縄文を持つものと持たないものに二分するべきであると考えたが、小さい破片では縄文の有無が確認できず、集計の際には縄文を基準にした区分は行わなかった。

よって、a類は以下の基準のみで細分を行った。

a－0　貫通する円形刺突文を有するもの

a－1　貫通する円形刺突文を有さないもの

a類の中では、a－1類はごく少数である。

b．口縁部に縄線文を欠き、縄文を有するもの

b－0　貫通する円形刺突文を有するもの

b－1　貫通する円形刺突文を有さないもの

b類では、b－1に分類されるのは表土・撹乱層を含めて3例のみである。

c．無文のもの

c類はごく少数であるが、一応以下の細分を行った。

c－0　貫通する円形刺突分を有するもの

c－1　貫通する円形刺突分を有さないもの

第Ⅲ群　続縄文土器

第Ⅳ群　縄文土器

Ⅲ群・Ⅳ群共に少数存在する。

第Ⅴ群　その他の土器

土師器と、道北部のいわゆる「擦文・オホーツクの融合型式」の土器をここに含めた。

また、ミニチュア土器もここに含めて記載し、時期の判定できるものは各個体について記すことにした。

Ⅱ　土器各論

表土・撹乱層の土器（1～53・337）

第Ⅰ群　オホーツク土器（1～30・52・53）

a．沈線文系土器（1～4・6～10）

口縁部が肥厚するのは、3・6・9であり、その他の資料は肥厚しない。1は沈線文の例。口唇上になでつけがなされた結果、粘土が内外両側にはみだしている。文様は、口縁部に2本の沈線がめぐらされ、口唇上に爪型文が横にならぶ。3・4・6・7は沈線と爪型文が複合施文された例。6の文様は、上から刻文・2本の沈線文・隆起帯を上下からはさむ形で施された横位の爪型文である。7の爪型文は沈線の施文後に施されている。2・8・9は沈線と刻文が複合施文された例。2の沈線はごく浅い。8・9共に沈線がめぐらされた後に刻文が施されている。10は摩擦式浮文の例である。

b．刻文系土器（5・11～18）

14・16・17以外は口縁部が肥厚する。5・11～13は爪型文の例。5は、肥厚して外反する口縁部・やや縮約する頸部・あまり肩の張らない胴部という器形である。口縁部肥厚帯下端を2指でつまみ爪形文を付けている。肩部には細くごく浅い刻文を3列めぐらしている。内外面共に炭化物が付着しているため、調整の跡は確認できない。11は2指、12は1指による爪型文である。13は2指による指圧式浮文が2列めぐらされ、間にやや先の尖った施文具による刺突文が施されている。

14～16は刻文の例。14は横方向のなでによって二段の稜が作りだされた後、その上に刻文が施されている。15の口唇部は内縁・外縁の両側から削られ、稜が作られている。

17・18は型押文の例である。17は先端の鈍い楕円形の施文具による型押文が横環している。18は円形の刺突具による型押文が、確認できる範囲では2列横環している。

c．刺突文系土器（19～24）

19～21はＯⅠ、22～24はⅠＯの突瘤文である。19は円形刺突文と爪型文が複合施文された例。19の口唇部は他の刺突文系土器とは異なり、削られて角張っている。口縁部は肥厚しない。爪型文は指圧式浮文に近いものである。20は胴部に沈線と刻文がめぐっている。22は刺突文下に隆起帯が作られ、その上に刻文が施されている。23・24は突瘤文の下部に沈線が横環している。23の口唇には浅い刺突文がある。24では沈線の下部に櫛歯状施文具による型押文が斜位に施されている。

d．無文の土器（25・26）

25は口唇が肥厚し、頸部の器壁が薄くなっており、ほぼ直線的な器形を有する。口縁部肥厚帯外面は横方向のみがきが施され、頸部以下の外面には横方向のごく薄い擦痕が認められる。26は頸部がやや縮約する器形である。口縁部は肥厚しない。補修孔と思われる穿孔があり、内外面共に横方向のごく薄い擦痕が認められ、炭化物が厚く付着している。

胴部・底部の資料（27～30・52・53）

27～30は頸部が縮約する器形の肩部の破片と判断したが、29・30は他の器形の破片の可能性がある。27は2指を左右につまむように動かして施された「ハ」の字状の爪型文を2列横環させている。28は4×3列の櫛歯からなるスタンプを横環させている。29・30は沈線と刻文による文様であり、30では沈線を刻文が切っている。

52・53は底部の資料である。53は成形が雑であり、指を使ったと思われる成形の跡がでこぼこに残っている。

第Ⅱ群　いわゆる鈴谷式土器（31～46・49～51）

a．縄線文を持つ土器（31～37）

31～35はＯＩの貫通円形刺突文を有し、36・37は刺突文を有さない。いずれの資料も現存する部分では胴部に縄文は認められない。37は第3層出土の土器番号222・223と同一個体である可能性がある。31・32は口唇部の肥厚が著しく、口縁部の外反が強い。33～35・37は口唇部がやや肥厚し、35はわずかに外反し、33・37は外反がなく、34は口唇部内縁がわずかに内屈している。36は最大径が胴部にある小形の壺である。口唇部文様は、31・32・37はＬの縄、34はＲＬの縄をそれぞれ斜位に押捺したもの、33はＬの縄を斜位に押捺した後にＬの縄を1本横環させたもの、35はＬの縄を2本1組で斜位に押捺したものである。36の口唇部には、口縁部からつながった縄線文が部分的にはみ出している以外に、文様はない。口縁部文様は、31・33・35～37はＬの縄を2本1組にしたもの、32はＬとＲの縄を2本1組にしたもの、34はＲＬの縄をそれぞれ4～6条横環させている。31・32は撚りがおそらくＬの縄を「へ」の字状に折り曲げた端を用いて、縦位の刺突列を施している。

b．縄文を持つ土器（38～41・44）

38～41はＯＩの貫通円形刺突を有し、44は刺突文を有さない。いずれの資料も口唇部の肥厚はほとんど認められない。38は口縁部が外反し、口唇外縁が削られている。40は口縁部が内屈し、口唇上面が削られて角張っている。44も口縁部がやや内屈し、口唇外縁から上部にかけてなでつけられており、口唇内縁に粘土がはみ出している。口唇部文様は、38・40がＲＬの縄文。39は0段の条（撚りの方向は不明）を斜位に押捺していると思われるが、原体は確定できない。41は斜位の縄線文と思われるが詳しい内容は不明である。口縁部から胴部にかけての文様は、38・41・44はＲＬの縄文、39はＲＬの縄文と思われるが不明、40はＲＬの縄を図の左側では横位に、図の右側では縦方向のジグザグを描くように回転させて施した縄文である。

c．無文の土器（42・43）

42・43とも確認できる範囲では無文だが、あるいは胴部に縄文が施されている可能性もある。いずれもＯＩの貫通円形刺突文を有し、口唇が肥厚し、口縁部がやや外反する。口唇部文様は両者とも斜位の刻線文である。

胴部・底部の資料（45・46・50・51）

45は隆起帯を有し、その上に、ＲＬの縄を左に開く馬蹄形に折り曲げて施した刺突文を横環させている。胴部はＲＬの縄を縦位に回転させた縄文が施されている。46はＲとＬの縄線文と、Ｌの縄を下に開く馬蹄形に折り曲げて施した縦位の刺突列が確認できる。その下の縄文はＲＬである。

底部資料のうち、50は丸底である。焼成はやや良いが、胎土には小石が多量に含まれており、内面にはひびが多い。外面には、水平方向に、同心円状の擦痕がめぐっている。本遺跡のなかで、平底以外の器形の底部はこれ1点のみである。51は底部が外に張り出すという形態から見て鈴谷式の

底部と判断したが、色調・胎土はオホーツク式土器に近い感もあり、あるいはオホーツク式土器の可能性もある。外面には縦方向にごく浅い擦痕がある。

第Ⅲ群　続縄文土器（47・49）

47は胴部資料で、ＲＬの縦走縄文が施されている。続縄文時代の土器であろう。49は口縁部資料である。胎土は砂を含むがやや緻密で、焼成もやや堅緻である。口唇部は角張り、口縁部はほとんど外反しない。ＯＩの突瘤文を有し、外面には約４㎜幅と思われる施文具による浅い擦痕が縦方向に走っている。胎土、口唇部形態から判断してオホーツク式の刺突文系土器ではない。平行微隆起線はないが、口縁部の外反の度合いなどから判断して、いわゆる北大Ⅰ式に分類できると思われる。

第Ⅴ群　その他の土器（48・337）

48は無文の胴部破片である。胎土は砂・小石を多く含み、焼成はやや悪い。胎土、器壁の厚さから判断して、いわゆる「道北部のオホーツク・擦文融合型式」の土器であろう。337はミニチュア土器であると思われる。胎土は砂を少し含み、焼成はやや悪い。底面がやや凹み、内面底部が丸く凹んでいる。文様はない。脚部の低い高坏、もしくは台付きの鉢のような器形であろうか。時期は不明である。

第２層の土器（54～101・338）

第Ⅰ群　オホーツク土器（54～83・98～101）

ａ．沈線文系土器（54～57）

口縁部が肥厚するのは56のみである。54は沈線文と爪形文が複合施文された例。口唇部直下に横位の爪型文が横環している。沈線文は細く浅い。55・56は摩擦式浮文の例。55は口唇部と口唇部直下の外縁が削られて角張っている。56は口唇部が欠損している。57は摩擦式浮文と爪型文が複合施文された例。口唇部が少し凹み、浅い溝状になっている。１指の爪型文が隆起線の上に斜位に施されている。

ｂ．刻文系土器（58～67）

58～61・63は爪型文の例。58は胴部径に比べて口縁部の径がやや小さい器形になると思われる。口縁部はほとんど肥厚しないが、頸部に横方向のみがきが施されることによって、口縁部下にごくわずかな稜がついている。爪型文は２指で斜位に施される。59は口縁部が肥厚し、口唇部付近でごくわずかに内彎する。口縁部の一部に横方向にみがかれた跡がある。爪型文は２指による隆起式浮文であるが、下側の指のあたる部分には爪痕はなく、指の腹の跡のみである。60は口縁部の肥厚はない。口唇部がなでつけられ、外縁・内縁両側に粘土がはみ出ている。口縁部外面に横方向のなでが２条めぐらされ、摩擦式浮文のような隆起線が作られている。ただし分類としては刻文系土器に含めた。爪型文はおそらく２指によるものと思われるが、下側の指の跡は顕著ではない。61は口縁部がほとんど肥厚せず、口唇部にむかって細くなっており、口唇は内外両面からなでられて尖っている。爪型文は２指による隆起式浮文である。63も口縁部はほとんど肥厚しない。爪型文は１指によるものである。

62・64～67は刻文の例。62は頸部があまり縮約しない器形である。口縁部は肥厚し、口唇面が内側に傾いている。胎土に大粒の砂を多く含み、焼成も悪い。口縁部下端に斜位の刻文を施し、胴部

には4歯の櫛歯状施文具による型押文を横位に3列横環させている。64・65の口縁部は肥厚し、横方向のなでによって2段になっている。64の口唇部は削られ角張っている。文様は、64・65ともに先端の丸い施文具によって施された斜位の刻文である。66の口縁部は肥厚しないが、横方向にごく浅いけずりが施されることによってかすかな段が3段生じている。口唇部は削られて角張っている。先端の丸い施文具による斜位の刻文が3列横環する。67は口縁部がわずかに肥厚する。先端の丸い施文具による横位の刻文が口縁部に横環している。

c．刺突文系土器（68～73）

68～70・72はＯⅠ、73はＩＯの突瘤文である。71の刺突文は内面に突瘤を生じさせていないが、刺突の形状などから刺突文系土器に分類した。口縁部は全ての土器で肥厚しないが、68・69は横方向のなでによって口縁部に稜がつけられている。また、68は口唇部にむかって先端が細くなっている。口唇部は、68・70の外縁がやや角張るが、それ以外は丸みをおびている。73は口唇部がやや肥厚している。文様は、71は刺突列の下に隆起帯を横環させ、先端の丸い施文具で斜位の刻文を深く施している。73はごく細い中空の施文具によって、口唇部には刺突を横環させ、口縁部突瘤文の下部には4個単位の縦列する刺突列がめぐっている。また、この刺突列の下部には、隆起帯が剝落したと思われる痕跡が残っている。

胴部・底部の資料（74～83・98～101）

74は口縁部の一部と思われるが、口縁部の全体像が不明のためカウントしていないので、ここで扱う。破片の上部は輪積みの痕跡と思われる「擬口縁」となっている。隆起帯の上縁は斜位の刻文、下縁は2指による爪型文となっている。この爪型文は右下がりになっており、やや珍しい例である。内外面共に横方向のみがきが施されており、内面は特に平滑である。

75～82は頸部以下の破片資料である。すべての頸部の縮約する壺形ないしは甕形土器の肩部であると判断したが、82については部位が確実ではない。75・76・78は現存する外面の全面にみがきが施されている。75は2本の沈線の間に横位の刻文が横環する。76は斜位の突起が貼り付けられ、2列の横環する斜位の刻文をはさみこむように3列の沈線がめぐらされる。77は縦位の突起が貼り付けられた肩部の破片であると思われる。78は、先端の丸い施文具による斜位の刻文が、現存する部分では3列横環している。79は、先端の丸い施文具による横位の刻文が3列横環する。80は5歯以上の櫛歯状施文具による縦位の型押文が横環している。81は先端の丸い施文具による型押文が2列横環し、その間に5歯の櫛歯状施文具による縦位の型押文が横環している。82は、櫛歯上の施文具を横に引いて平行する沈線を描いている。おそらく3本の歯を持つ施文具で繰り返し沈線を引いていると思われる。1本1本の沈線は極めて細かく浅い。

83は壺形土器の頸部である。胎土は砂粒を多く含み、極めて脆い。頸部の外面にはみがきが施されており、内外面共に炭化物が付着する。口縁部が剝落して生じた段が頸部の上に見られる。文様は、肩部に4列の型押文が横環する。上端及び下端の列には3歯の櫛歯状施文具による型押文が斜位に施され、中2列には5本の突起からなる花弁形の型押文が施される。

98～101は底部の資料である。99・101は胎土中に砂粒がやや多い。器形は全て下端部が外に張り出さない形である。100は底面が厚く、器壁は薄いという特徴を持つ。98・100は外面がみがかれている。

第Ⅱ群　いわゆる鈴谷式土器（84～94）

a．縄線文を持つ土器（84～87）

いずれの資料もＯＩの貫通円形刺突文を有する。胴部の縄文については、いずれの資料も胴部まで遺存していないため、有無が確認できない。84・85は口唇部が肥厚し、外傾している。また、口縁部がわずかに外反する。86の口唇部は肥厚せず、外傾もしない。87は口唇部がわずかに肥厚し、外傾する。また、口縁部は外反する。口唇部文様は、84はＬの縄線文を４本横環させている。85はＬの縄を折り曲げて斜位に押捺している。86はＬの縄を斜位に渡し、口唇部外縁と内縁に特に深く押捺している。87はＬの縄を口唇部から口縁部にかけて４列横環させている。口縁部文様は、84・85はＬの縄を２本１組で、86はＬの縄をおそらく１本単位で横環させて押捺している。87はＬの縄を２本１組で用いて縦横の区画を作り、それを切って、Ｌの縄を折り曲げて作った２本１組の縄線文を区画のなかに斜めに施している。

b．縄文をもつ土器（88～92・94）

いずれの資料もＯＩの貫通円形刺突文を有する。88と89の口唇部は肥厚し、口縁部はわずかに内彎する。口縁部内縁の下部には、折り返されたようなかたちで粘土がなでつけられて薄くはみ出しており、その下の部分が横方向に削られて凹んでいる。口唇部上面は、部分的にではあるがわずかに凹んで溝状になっている。口縁部外縁はけずられて角が丸くなっている。90の口唇部は肥厚しない。頸部が縮約し、胴部に最大径をもつ器形であると思われるがはっきりしない。91は口唇部はほとんど肥厚しないが、粘土が口唇部内縁にはみ出している。92の口唇部は肥厚しない。94も口唇部は肥厚せず、口縁部も外反しない。口唇部文様は、88・89・92はＲＬの縄文。90・91はＲＬと思われる縄を斜位に押捺したもの。94は縄文と思われるがはっきりと確認できない。口縁部・胴部文様は、88・89はＲＬの縄を斜位及び横位に回転させた縄文。縄文は部分的にしか確認できない。90～92はＲＬの縄を横位に回転させた縄文。94もＲＬの縄文であるが、口縁部外縁直下にも施文している。なお、94については、口縁部下の円形刺突文の間隔が狭い点、口縁部外縁直下にも縄文を施す点は鈴谷式土器としては特異であり、あるいは鈴谷式として取り扱うのは不適切かもしれないが、一応ここに分類した。ちなみに94の胎土は砂粒がやや多く、焼成もやや悪いが、他の鈴谷式の胎土・焼成とそれほど違いがあるという印象はない。

c．無文の土器（93）

93は遺存する部分には縄文は確認できず、ここに分類したが、おそらく無文として誤りはないと思われる。ＯＩの貫通する円形刺突文を有する。口唇部はほとんど肥厚しない。口唇部内縁はやや内屈し、やや尖り気味である。口唇外縁は丸い。口縁部の下部ですぐに屈曲しており、おそらく胴部に最大径がある器形だと思われるが確実ではない。

第Ⅲ群　続縄文土器（95・96）

95の胎土は砂粒を少し含み、焼成はやや悪い。器形は、口唇部がやや内傾し、口唇部内縁は丸みをおび、外縁は尖り気味に外に張り出している。この口唇部外縁に斜位の刻文が施されているようであるがはっきりしない。口縁部下には先端の丸い施文具によってＯＩの突瘤文が施されている。刺突文下にはＬＲの縄文を横走させている。続縄文時代前半期に位置づけられる土器と思われる。礼文島幌泊段丘の遺跡群の報告書〔種市編　1985〕中でⅡ群Ｂ類に分類された土器の一部に類例が認められる。

96の胎土は砂を含まず、やや緻密で、焼成もよく堅緻である。口唇部は角張り、口唇部と土器内面はみがかれている。文様は、口唇下にまず細く浅い沈線を引き、それを切って沈線の上部には中空の

刺突具によるＯＩの円形突瘤文が施され、沈線の下部には半裁竹管状の施文具による刺突文が横環する。ＯＩの刺突は一応「突瘤文」としたが、裏面にはわずかな隆起しか確認できない。刺突文下にはＬＲの縄文が施されているように思われるがはっきりしない。この96は、いわゆる北大Ⅱ式に分類されると思われる。

第Ⅴ群　その他の土器（97・338）

97は土師器の坏の破片である。胎土は緻密で、焼成もよく非常に堅緻である。外面・内面ともに細かくヘラミガキがなされ滑らかである。特に内面は黒色処理が施され、光沢がある。

338は脚部の低い高坏形の器形である。底部がやや外に張り出し、底面外面は凹んでいる。胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや悪い。指による成形の跡が全面に残っている。炭化物は付着していない。色調・胎土が鈴谷式土器のそれに近いようにも思われるが、時期は不明である。

第３層の土器（102～289・339～341）

第Ⅰ群　オホーツク式土器（102～106・110～182・276～278・289）

ａ．沈線文系土器（110～114）

112以外は全て口縁部が肥厚している。110・112は沈線文と爪形文が複合施文された例。沈線文の施文にはどちらも先端の尖った施文具が用いられている。110の口縁部下端の爪型文は２指によるもので、下側の指の爪痕も確認できる。胴部には横環する沈線文と、斜位の刻文が確認できる。112は口縁部が肥厚せず、口唇部外縁のすぐ下に１指による斜位の爪形文を施している。この土器は、表土・撹乱層出土の土器番号４の土器と同一個体である可能性があるが、確定はできなかった。111・113は沈線文と刻文が複合施文された例。111は内外面共にみがかれている。文様は、横位の刻文と２本の横環する沈線文であるが、どちらも先端の丸い施文具で施された浅いものである。113の口唇面はやや外傾する。文様は、口唇部下端に斜位の刻文を施した後、それを一部分切って沈線文を横環させている。施文具は両者とも先端の尖ったものである。114は沈線文と型押文が複合施文された例。口唇部付近でやや内彎する器形である。口唇部はやや尖っている。内外面共に横方向にみがかれている。文様は、口唇部下に太く先端の丸い施文具によって浅い沈線を施し、その下部には４歯の櫛歯状施文具によって斜位の型押文を施している。

ｂ．刻文系土器（102～105・115～133）

102・104・115～120・122・125・126は爪型文の例。102は頚部が著しく縮約する壷形土器。口縁部が肥厚し、頚部から胴部にかけての器壁はかなり薄い。外面は頚部から胴部にかけて横方向によくみがかれていて光沢を有する。内外面共に炭化物が厚く付着する。口縁部の文様は、２指による指圧式浮文である。上下共に爪痕が残る。胴部文様は、先端の丸い刺突具によって施した浅い円形刺突文を３列横環させている。104も壷形土器の破片であると思われる。口縁部は肥厚し、肥厚帯の幅は狭い。口唇部はやや尖っている。内面が横方向によくみがかれていて光沢を有する。内外面共に炭化物が付着する。文様は２指による指圧式浮文である。

115～120・122・125・126のうち、118・120・122・125は口縁部が肥厚せず、横方向のなでによって口縁部にわずかな段がつけられている。それ以外の資料は口縁部が肥厚する。115は口縁部がやや内彎し、口唇部がなでつけられてやや角張る。文様は２指による指圧式浮文であるが、爪痕は確認できない。116・117は２指による指圧式浮文に近い爪型文が施されている。116は上の指のみ

爪痕が残る。117は上下とも爪痕が残る。117は、内外面及び口唇面が横方向にみがかれて光沢を有する。119も2指による爪型文が施された資料であるが、文様の配列が上下に乱れている。この119の口唇部はやや尖る。118は口唇部外縁に1列、口縁部に2列、1指による斜位の爪型文が横環している。120も1指による斜位の爪型文が口縁部に2列横環する。内面はみがかれて光沢を有する。122は口唇面が削られて凹状に凹んでいる。文様は2指による、横位に近い斜位の爪型文が2列横環している。125は口唇部外縁に斜位の爪形文を施し、その下に横方向のなでによって作られた微隆起線が横環する。その直下に1指による横位の爪型文が1列横環し、なでによる凹みをはさんでさらに同様の爪型文が2列横環する。この125は微隆起線をもつ点で沈線文系土器に近いものである。126は上下に稜をもつ厚い隆起帯を貼付によって作り、その稜の上に小さくて浅い斜位の爪形文を施している。口唇部はやや尖っている。

121は爪型文と型押文が複合施文された例。口縁部は肥厚し、わずかに内彎する。口唇部はなでつけられてやや角張る。口唇部下には4＋1歯の櫛歯状施文具によって斜位の型押文が施され、口縁部下縁には1指による斜位の爪型文が横環する。

103・105・123・124・127～131は刻文の例。103は頸部が著しく縮約する壺形土器。口縁部が肥厚し、口縁部肥厚帯と頸部の境には外傾する接合痕が明瞭に確認できる。外面の全面、特に頸部はよくみがかれていて光沢を有する。内外面に炭化物が付着する。口縁部下端には、先端の鋭い施文具で細く深い刻文を斜位に施している。確認できる範囲の胴部文様は、細く浅い沈線文を横環させ、それを切って「ハ」の字状の刻文を下にめぐらせるものである。105も頸部の縮約する壺形土器。やや細身の器形で、頸部の縮約はそれほど顕著ではなく、口縁部と胴部の径の差があまりない。肥厚する口縁部を有する。この土器の大きさからすると、器壁が厚い感がある。頸部外面はよくみがかれていて光沢を有する。内外面共に炭化物が付着する。口縁部下端に、先端のやや丸い施文具によって深く太い刻文を斜位に施している。胴部に文様はない。124も壺形土器の破片。頸部が著しく縮約する器形を有する。口縁部は肥厚し、2段になっている。頸部には薄い隆起帯が横環している。内外面共に炭化物が付着する。口縁部には，稜の部分に先端の丸い施文具による刻文が横環する。頸部の隆起帯の上には斜位の型押文が施されている。型押文の施文具は2ないし3歯の櫛歯状工具と思われるが明瞭ではない。

123・127～131のうち、口縁部が肥厚しないのは131のみである。123は内外面共にみがかれていて光沢を有する。刻文の施文具は、128は先端の丸いもの、123は先端のやや丸いもの、それ以外は先端の鋭いものである。128は頸部に沈線と、その上部に沈線を切って斜位の刻文が施されている。129は口縁部直下に円形の刺突文が横環する。この刺突は、裏面に突瘤を作りだしてはいない。131は、横位の浅い刻文が4列施されている。

132・133は型押文の例。両者ともに口縁部は肥厚するが、132は口縁部下端に稜をもたない。132の口唇部は尖っており、133の口唇部は削られて角張っている。133は内外面共にみがかれて光沢を有する。文様は、132は4歯の櫛歯状施文具による縦位の型押文を口縁部に横環させたもの。133は、先端のやや丸い施文具による浅い刺突を、口唇部外縁に1列、口縁部に2列施したものである。

c．刺突文系土器（106・134～159）

159がＩＯの突瘤文である他は、すべてのＯＩの刺突をもつ土器である。135・136のみ突瘤が生じていないが、刺突文系土器として分類した。

106は深鉢形の土器である。屈曲に乏しい円筒形の器形を有し、口唇部がわずかに外反する。熱を受けたためか赤褐色の色調を呈し、内外面共に炭化物は付着していない。また、擦痕やみがきな

ど、調整の跡もほとんど確認できない。口唇部外縁には斜位の刻文を施している。円形刺突文列の下部には、刺突文一つ分ずつ間隔をあけて、3ないし4個単位の縦位の刺突列をめぐらしている。この刺突列の施文具は竹管状の中空の工具であり、工具を斜め上に向けて刺突を行っている。また、この刺突列は下の胴部文様を切っている。胴部文様は、2本の沈線文を横環させた後、それを切って斜位の刻文を施している。口唇部・胴部の施文具は共に先端の鋭いものであり、施文は深い。

134は刻文との複合施文列。肥厚した口縁部を有し、口縁部下端には稜をもつ。口唇部はやや尖る。円形刺突は浅く、突瘤はあまり生じていない。口縁部下端に太く鈍い斜位の刻文を有する。135・136は爪型文との複合施文例。両方とも2指による爪型文を、肥厚した口縁部の下端に施している。138は口縁部がわずかに肥厚し、口縁部の下端に稜をもつ土器である。137は138と同様の土器の頚部の資料であろう。円形刺突は口縁部と頚部の境に施されており、刺突の間隔が広い。139～147は、確認できる範囲で口唇部・胴部ともに無文の例。139・140以外は口唇が外反する単純な器形である。139は胎土中に砂粒がやや少なく、焼きもやや良い。口縁部がやや内彎する器形である。口唇部はなでつけられて溝状に凹み、外縁に粘土がはみ出ている。刺突の施文具は先端のやや尖ったものであり、刺突の間隔が広い。これらの特徴から見て139はオホーツク式土器ではない可能性がある。140は頚部が縮約する器形。143は作りが非常に雑な土器で、口唇部や器壁の厚さが一定していない。内外面共に炭化物が厚く付着している。148～150は口唇部に文様を施する例。148は斜位の刻文である。149は中空の刺突具を斜めの角度で突き刺し、横位の刻文を施している。150は口唇部内縁と外縁に斜位の刻文を施している。150の突瘤文は他より細い。151・152は刺突文下に文様を施する例。151は太く鋭い沈線文を4本横環させている。152は浅く鋭い横位の刻文を縦列させている。153～158は頚部もしくは胴部に隆起帯をめぐらす例。153と154は同一個体。口唇部文様は、153・154・156が円形刺突文、155が太く鋭い斜位の刻文、157はおそらく無文、158は口唇部が欠損しており確認できない。隆起帯上の文様は、153・154は浅く鋭い斜位の刻文、155は太く鈍い斜位の刻文、156は円形刺突文、157は太く鋭い横位の刻文である。隆起帯下の文様は、153・154では円形刺突列が横環している。155では沈線が確認できる。156では円形刺突文が縦列する。157では、隆起帯の上部に横位の刻文が施されている。

159はＩＯの突瘤文の例である。口唇部には施文具のはっきりしない刺突がめぐり、突瘤文の下には先端の丸い施文具によってごく浅い沈線がめぐらされている。

胴部・底部の資料（160～182・276～278・289）

160～174は甕形もしくは壷形土器の肩部の資料。160・166・167・171は頚部がかなり縮約する器形である。それ以外の資料はあまり頚部が縮約しない器形であると思われるが、確実ではない。特に162・174は深鉢形土器の胴部である可能性がある。160は沈線を2本横環させ、それを切って、沈線の上部には「ハ」の字状の刻文、沈線の間には斜位の刻文を施している。161は、5歯の櫛歯状施文具による型押文を横位に3列横環させ、その間に2本の沈線をめぐらせている。163は細く浅い沈線と4歯の櫛歯状施文具による斜位の型押文である。163は先端の丸い施文具による斜位の刻文を3列横環させている。この163は第2層出土、土器番号78の土器と同一個体である可能性があるが、確定はできなかった。164は4歯の櫛歯状施文具による斜位の型押文を2列横環させている。内外面共にみがかれている。165は7歯の櫛歯状工具による斜位の型押文が2列、「ハ」の字状の刻文が2列横環しているのが確認できる。166は頚部に隆起帯をめぐらし、その下部、一部隆起帯にかかる位置に6歯の櫛歯状施文具による縦位の型押文を施し、さらにその下部に横位の刻文を横環させている。167は、先端の丸い3歯の櫛歯状施文具による斜位の型押文を2列横環させて

いるのが確認できる。168は中空の施文具で施した刺突文を、確認できる範囲で3列横環させている。169は両端の太い「へ」の字を左向きに90度回転させた形の型押文を2列横環させている。170は型押文を4列横環させている。1列目と3列目、2列目と4列目の施文具は同一であり、それぞれごく細く突起がいくつか集合した形のものである。171は先端の丸い施文具による刺突を3列横環させている。172は横位の隆起帯と、それにつながる形でやそこから縦位に垂れ下がる突起を2個有している。横位の隆起帯の上には、3歯の櫛歯状工具による横位の型押文がめぐっている。173は9個の円形刺突文によって円を描き、その中を円形に浅く凹ませている。174は隆起帯を有し、隆起帯の上とその上部・下部に横位の刻文が横環している。

175～181は深鉢形土器の胴部であると判断した。175は3本の沈線文と横位の刻文の組み合わせである。176は最上部に円形刺突文が確認できる。その下は3本の沈線文と横位の刻文、円形刺突文が交互に配列されて文様が構成されている。177～181は隆起帯を有する例。179～181は同一個体。177・178は隆起帯上に太く鋭い斜位の刻文が施されており、178では隆起帯下部に横位の刻文が施されている。179～181は2本の隆起帯を有する。隆起帯の上には鋭い斜位の刻文がめぐっている。179では刻文の向きが途中で変わっているのがわかる。182は器形が不明。最上部にLの縄線文が2本確認できる。浅い沈線で鋸歯状文を描いている。182は胎土・色調からオホーツク式土器であると判断したが、他の型式の可能性もある。

276～278・289は底部の資料。胎土、及び底部の張り出さない器形からオホーツク式と判断した。ただし、276・277は底面が丸みをおびて器形が尖底に近く、また、胎土もオホーツク式・鈴谷式のいずれとも判別しがたい。よって276・277は鈴谷式の可能性もある。276は底面が側壁に比べて厚い。底面は一応平底の形態はなしているが、丸みをおびており安定していない。植物の繊維と思われる紐状の圧痕が、偶然ついたようなかたちで数条残っている。277も276と同様の器形であるが、底面の面積がより小さく、ほとんど尖底のような器形である。「尖底に近い器形」とのべてきたが、表土・撹乱層から出土している尖底の資料（土器番号50）は器壁の厚さが一定であるのに対し、276・277（及び279）は底面が側壁に対して厚いという特徴があり、成形法は全く異なっていると考えられる。278は外面がみがきに近い形で丁寧に調整されており、滑らかである。外面に炭化物が付着する。289は器壁が薄く、もろい。底板の外側に側壁を貼り付ける、という成形法をとっていると思われ、底面と側壁の間に接合痕が確認できる。内外面共に炭化物が付着する。

第Ⅱ群　いわゆる鈴谷式土器（108・109・183～261・274・275・279～288）

a．縄線文を持つ土器（108・109・183～225）

108は深鉢形の土器。O－1の貫通円形刺突文を有する。器形は、口唇部が肥厚し、頸部がやや縮約して口縁部が外反する。胴部は肩は張り出さないが、やや丸みをおびる。底部は外側に大きく張り出し、張り出した部分には指による成形の跡が残る。底面の内面は丸みをおびている。内外面にはごく浅い擦痕がまばらに施されている。擦痕はランダムな方向に施されているが、内面上半部では横方向が主体である。内面には部分的に炭化物が付着する。文様は、口唇部にはRLの縄を斜位に押捺している。口縁部には、RとLの縄を2本1組にして5組横環させて押捺している。口縁部の文様の下には、口縁部の文様を切って、やはりRとLの縄を2本1組にして、下向きの「矢印」状の形を描くように押捺している。この「矢印」の内部には、Rの縄を折り曲げた端部を用いた刺突を計4つ施している。この「矢印」状の文様は、現存するのは3つであるが、土器の全周では6箇所に等分されて施されていたと考えられる。胴部にはRLの縄をほぼ横位に回転させた縄文を施

している。この縄文もジグザグに回転させているようにもみえるが、確定はできなかった。109の土器は底部が突出しており、台付きの深鉢とでもいうべき器形を有している。ＯＩの貫通円形刺突文を有する。口唇部はやや肥厚する。頚部は少し縮約し、口縁部がやや外反する。胴部は、丸みをおびながら、底部にかけて尖底の土器のように著しく縮約する。底部は高坏の脚部のような器形をしており、外側に広がっている。底部の内面は尖っており、底面は上げ底状に凹んでいる。底面は水平ではなく傾いており、非常に安定が悪い。内面には炭化物が付着する。文様は、口唇部にはＬの縄を２本１組にして斜位に押捺している。口縁部にもＬの縄を２本１組にして３組横環させて押捺している。胴部にはＲＬの縄文をジグザグに回転させて施している。底部の最も縮約する部分には、太く鋭い沈線文が１本、途中何度か途切れながら横環している。底部の張り出した外縁にもＲＬの縄文が施されている。

破片資料は、183～221はＯＩの貫通円形刺突文を有し、222～225は確認できる範囲では円形刺突文を有さない。刺突文を有するグループから説明する。

183～195は胴部に縄文が確認できたもの。図示にあたっては、口縁部文様に重点をおいて序列した。195が小型の短頚壺のような器形と思われるほかは、全て深鉢形土器の破片である。184～187・190・192は口唇部が肥厚し、その他は肥厚しない。184・186・191は口唇部がわずかに内屈し、特に184・186の口唇部内縁は鋭く尖っている。187の口唇部は水平につぶされて両側に粘土がはみ出たような形をしている。194の口唇面は削られて溝状に凹んでいる。口縁部は、183・191・192は内彎する。185・188・193・195は頚部で一部縮約して外反する。194は縮約せず大きく外反する。184・186・187・189・190は直線的な器形である。194は口縁部下に太い隆起帯を横環させている。口唇部文様は、183～188・190～192は縄線文、189・193・195は縄文、194は無文である。183～185・187・188はＬの縄を１本単位で斜位に押捺している。186はＬの縄を縦位に押捺している。３本単位のようにもみえるがはっきりしない。190はＲ$\left\{\begin{matrix}R\\L\end{matrix}\right.$の「合撚」の縄を２本１組にして斜位に押捺している。191はＲＬの縄を２本横環させている。192はＬの縄を２本１組にして横環させた後、その上から、Ｌの縄を折り曲げた端を用いた刺突を横環させている。189・193・195はＲＬの縄文である。口縁部文様は、183～189・195はＬの縄を２本１組にして３～６組横環させている。183は２本１組としたが、組ごとの間隔が一定しておらず、１本単位のようにもみえる。190は、口唇部と同じＲ$\left\{\begin{matrix}R\\L\end{matrix}\right.$「合撚」の縄を、１本単位で６条横環させている。191はＲＬの縄を３条横環させている。192は口唇部外縁にＬの縄を１条、その直下にＲの縄を２本１組にして横環させ、その下部に、それを切って、同じくＲの縄を折り曲げて２本１組にしたものを斜位に押捺している。193はＬの縄を２条、口唇直下に部分的に押捺している。194は口唇直下に縄線文（原体不明）を斜位に施した後、それを切ってＲＬの縄を３条横環させている。隆起帯の表面は欠落しているため、その部分の文様は不明である。195は縄線文の下部に、Ｌの縄を折り曲げた端を用いた刺突を横環させている。胴部文様は、183はＲＬの縄を縦位に回転させた縄文。184は一見撚糸文のようにもみえるが、原体の撚りが不均一な為に１条おきに条が抜けた縄文であろう。原体はＲＬと思われる。185～189・191・195はＲＬの縄をほぼ横位に回転させた縄文。190はＬＲの縄文が施されているようにみえるが原体は不明。192はＲＬの縄を斜位に回転させた縄文。おそらく109などのように、原体をジグザグに回転させたものと思われる。193は部分的に縄文が施されているように見えるが、原体は不明。194はＲＬの縄を、隆起帯下に縦位に回転させて縄文を施した後に、一部分そこに重ねるかたちで、さらにＲＬの縄を横位に回転させて縄文を施している。

196～221は胴部に縄文が確認できなかった例。219と220は同一個体の可能性があるが確定できな

かった。全て深鉢形の器形と思われる。口唇部が肥厚しないのは198・200～202・210であり、そのほかは全て口唇部が肥厚する。199・211の口唇部は内屈すると同時に外縁も大きく膨らむ。201は先端がやや尖る。204は口唇面が内傾している。205・215・217・219・220は口唇部が内屈し、205の内縁は尖る。209は口唇面がやや凹む。口縁部は、205・215はわずかに内彎する。221は胴部で縮約し、口縁部は外反せずに垂直に立ち上がっている。口唇部外縁にはボタン状の突起が貼り付けられている。209は頸部がやや縮約して外反する。198・202・203・207・208は外反する。201はかなり大きく外反する。そのほかの196・197・199・200・204・206・210～214・216～220は直線的な器形である。口唇部文様は、196はＬの縄を斜位に押捺していると思われるがはっきりしない。197はＬの縄を縦位に押捺している。198・199・209・215・216はＬの縄を、203・204はＬの縄を２本１組にしたものを、200・217・218はＲＬの縄を、斜位に押捺している。218は外面側から見て斜線が左下がりになる珍しい例である。217はＬＲと思われる縄を斜位に押捺しているように見えるが、原体ははっきりしない。202・213はＬの縄を、221はＲの縄を横環させている。210・211はＬとＲの縄を２本１組にして横環させている。201はＬとＲの縄を２本１組にして、内面の口唇下、円形刺突文の部分にまで横環させて押捺している。208はＬの縄を１条横環させた後、それを切って斜位の刻文を横環させている。205・219・220はＲＬの縄文である。206・212は無文である。口縁部文様は、196～206はＬの縄を２本１組にした押捺を２～６組横環させている。203・204では縄を折り曲げた端を用いた刺突を縄線文の間に横環させている。207～212ではＬとＲの縄を２本１組にした押捺を３～８組横環させている。207では口縁部文様の下部に、原体不明の縄を折り曲げて斜位に押捺した文様を横環させている。213はＬの縄を、221はＲの縄を横環させたものである。214はごく細い紐を４本の組紐にした原体を、１条ごとに交互に向きを変えながら押捺している。216～219はＲＬの縄を横環させている。220は、ＲＬの縄を６条横位に押捺する部分と、同じ撚りの縄を縦位に数条施した後に、その文様の上下の部分に、その文様を切って、同じＲＬの縄を１本ずつ横位に押捺している部分がある。胴部文様は、220以外は現存していないために確認できない。220は確認できる範囲では無文である。おそらく胴部全体が無文であると判断してよいと考えられる。

222～225は円形刺突文を有さないもの。222と223は同一個体。全て口唇部が肥厚する。225の口唇部はやや内屈する。口縁部は、222・223はわずかに内彎、224はほぼ直線的、225はわずかに縮約し外反する。222は、口縁部に粘土を貼り付け、穴を縦位に貫通させて吊耳状の突起を作りだしている。口唇部文様は222・223はＬの縄を斜位に押捺したもの、224は縦位に近い刻文、225は無文である。口縁部文様は、222・223・224はＬの縄を２本１組にして押捺したものである。222の吊り耳の表面にはＲＬの縄縄文が加えられている。225はＲＬの縄を横環させたものである。胴部文様は222にのみ確認できるが、これはＲＬの原体をほぼ縦位に回転させた縄文である。

ｂ．縄文を持つ土器（226～254）

254以外は全てＯＩの貫通円形刺突文を有する。229・230は同一個体。231と253以外は、ほぼ単純な器形の深鉢と考えられる。231は頸部がやや縮約して胴部がやや張り出す器形で、頸部より胴部の径が大きい広口の壷のような器形を有すると思われる。253も口縁部より胴部の径が大きい器形であると思われるが、口縁部は外反しない。口唇部が肥厚しないのは228～230・234・239・240・253であり、そのほかの資料は、程度の大小はあるが全て口唇部が肥厚する。229・230は口唇部外縁を削っている。254は、口唇部外縁が他の例よりも著しく張り出し、整った稜を作っている。口唇部が内屈するのは227・236・237・243～247・251・254である。特に244・245は内屈が著しい。口縁部の器形は、やや外反、もしくはわずかに縮約して外反するもの（226・232・236・238・242

・251・252）と、直線的なものがある。内彎する例は確認できなかったが、244・245は内彎する器形の可能性もある。口唇部文様は、233～239がＬの縄を斜位に押捺したものである。241はＬの縄を２本１組にして図中では右下がりに、242は左下がりに押捺している。243はＬの縄を２条横環させている。226・232・244～247はＲＬの縄を斜位に押捺している。228はＲＬの縄を横位に２条横環させている。227・231はＬＲの縄を斜位に押捺している。240・248～254はＲＬの縄文である。229・230はＬＲの縄文である。胴部文様は、226・232～254はＲＬの縄文である。横位の回転が多い。252は爪のような施文具で半円形の刻文を施している。227～231はＬＲの縄文である。231以外は横位の回転である。229・230は縄文がＬＲである点、口唇部が肥厚せず直線的な器形をもつ点が鈴谷式とするには特異な点である。また、253は貫通円形刺突文の間隔が他の例よりもかなり狭く、鈴谷式としては特異である。この229・230・252は鈴谷式以外の型式の土器として考える必要があるかもしれない。ただし、３者とも胎土・焼成・色調の特徴は他の鈴谷式と比べて特異な点はない。

ｃ．無文の土器（255～257）

255はＯＩの貫通円形刺突文を有し、256・257は有さない。255は口唇部がやや肥厚し、直線的な器形を有する。内面から刺突文の穴をえぐって広げている。256は胎土に砂粒・小石をやや含み、焼成はやや悪い。外面に炭化物が付着する。器形は、口唇部が肥厚せず、口唇部付近でやや縮約し、胴部径が口縁部の径より大きい。257は胎土に小石を多く含み、表面にひび割れが生じている。焼成はやや良い。内面に薄く炭化物が付着する。口唇部が肥厚し、内面口唇部下に段をもつ。256・257は、胎土・色調・焼成・器形の特徴から鈴谷式と判断した。

胴部・底部の資料（258～261・274・275・279～288）

258～261は口縁部から胴部にかけての資料である。258は胴部にＬＲ、260はＬＲの縄文を有する。259はＬＲと思われる縄文を有しているが、原体ははっきりしない。258はＬの縄を２本１組にして、259はＲの縄２本１組にして押捺している。258では、縄線文の下部にＬの縄を折り曲げた端を用いた刺突を横環させている。260は破片の上部にＬの縄線文が施されている。その下部に、竹管状の中空の施文具を用いた縦位の刺突列が確認できる。261はＲとＬの縄を２本１組にして、波を描くような押捺を施している。その他に、Ｒの縄を折り曲げた端を用いた刺突や、直線を描く縄線文も確認できる。

274・275・279～288は底部の資料。279は側壁と比べて底面が厚く、その他の資料は側壁と底面がほぼ同じ厚さか、底面がやや厚い器形を有する。279は一応平底の形態をなしているが、底面が丸みをおびており尖底に近い器形である。275は底面から胴部にかけて直線的に広がる器形である。その他の資料は底面部の側面が垂直に近く立ち上がっているか、底部がやや張り出す器形を有する。いずれの資料も底板の上部に側壁を貼り付ける、という成形法を取っていると思われ、内面側の底面と側壁の境目と、外面の張り出し部に指によると思われる成形の跡が残っている資料が多い。特に281～283・266・289には明瞭に残る。279は内面にのみ確認できる。274・275の胴部及び底面にはＲＬの縄文がまばらに施されている。284・285はＲＬ、286はＬＲの縄文が胴部にまばらに施されている。287の胴部に施されている縄文はＲＬと思われるがはっきりしない。279の外面には縦方向に鋭い擦痕が残っている。

第Ⅲ群　続縄文土器（107・262～270）

107は続縄文時代の土器であると考えられる。口唇部に、山形突起が現存する部分では５個ついており、全周では６個ついていたと考えられる。この突起は口唇部よりやや厚い。口唇は肥厚せず、や

や外反する口縁部と、少し縮約する頸部を有する。胴部はやや丸みをおびており、胴部径と口径がほぼ等しい器形であると考えられる。文様は、口唇部には、Rの縄を折り曲げた端を用いて刺突を施している。この刺突は山形突起の上にも施されている。口縁部から頸部にかけてRの縄を5～7条横環させて押捺している。全周のなかで1箇所にのみRの縄を1条縦位に押捺しており、その両脇には、Rの縄を折り曲げた端を用いて、「へ」の字状の刺突を縦位に5つづつ施している。胴部にはLRの縄文が、ややまばらに、ランダムな方向に回転させて施されている。「続縄文時代の土器」であるとしたが、型式的な帰属は不明である。

262は後北A式土器である。やや尖る口唇部をもち、口唇部下に水平から直角に近く右下がり方向へと続く貼付帯を施している。文様は口唇部外面にRLの縄文、貼付帯の下から胴部にかけて半月状の横環する刺突列とRLの帯状縄文を交互に施している。263は口唇部にごく小さな山形突起を有し、山形突起の頂点には刻みが施されてふたまたになっている。口唇面はやや凹み、口唇部外縁には貼付帯が横環している。貼付帯の下部には、さらに太く、つぶしが連続的に施された貼付帯がめぐっている。上下の貼付帯の間には、斜位の微隆起線と帯状縄文が施されている。また、下の貼付文の下部にも帯状縄文が確認できる。微隆起線の特徴や帯状縄文の存在からすると、後北式のいずれかのグループに含まれると考えられる。264は後北C_2・D式土器である。口唇部はやや外反して尖り、口唇面には縦位の刻みが施されている。口縁部はボタン状突起を頂点にして波形を呈し、ボタン状突起を中心にして帯状縄文が放射状に施されている。垂直方向の帯状縄文の両脇には微隆起線が走り、拓影図右下には三角形の列点文が施されている。

265～268は続縄文時代前半期の土器である。265は、口唇部が肥厚せず、胴部がやや丸みをおびた器形を有する。頸部を指でつまんで口縁部を外反させていることが、頸部に残る成形の跡によってわかる。口唇面は丸みをおび、縄（原体不明）を折り曲げた端で刺突を施している。胴部にはRLの縦走縄文が施されている。上泊3遺跡H－1住居址出土の土器［種市編　1985　図Ⅴ－8の2］と、器形は少し異なるが、文様構成が類似する。266は、口唇部が外反し、胴部がやや丸みをおびる。口唇部外縁に斜位の刻みを有する。口唇直下にはIOの突瘤文が施される。胴部文様はLRの縦走縄文である。礼文島幌泊段丘の遺跡群［種市編　1985］におけるⅡ群B類土器の一部や、本遺跡の第2層出土の土器（土器番号95）と関係があろう。267は、口唇面が内傾し、口唇部外縁が外側に張り出している。口唇部外縁にはLと思われる縄が斜位に押捺され、口唇下からRLの縄文が縦走する。円形刺突文及び突瘤文は確認できなかった。この土器も礼文島幌泊段丘の遺跡群Ⅱ群B類土器の一部と関係があると思われる。

268～270は鈴谷式に含めることも可能であると考えたが、やや特異な点があり、一応別にして考えることにした。いずれにしても続縄文時代の土器であると考えられる。268は口唇部が肥厚せず、口縁部が縮約し、口唇部近くで外反する器形をもつ。口径と胴径がほぼ等しいと考えられる。口唇部は無文である。口縁部以下にはRLと思われる縄文が施されているが、原体ははっきりしない。269は無文の土器である。胎土・焼成は鈴谷式のそれに近い。口唇部は肥厚しない、口唇面はなでられて、特に外縁が角張っている。口唇直下にOIの刺突文を有するが、貫通はせず、裏面に突瘤も作らない。270は薄手の土器である。口唇部は肥厚せず、口唇面はやや凹む。口唇直下にOIの刺突文を有する。口唇部にはRLと思われる縄を横位に押捺した縄線文が施されているようにみえるが、はっきりしない。口縁部には、先端の丸い施文具で太く浅い沈線文を描いている。

第Ⅳ群　縄文土器（271～273）

271は壺形土器の肩部であろうか。地文は屈曲部より上が縦位のＬＲ、下が横位のＬＲの縄文と思われるがはっきりしない。地文の上には太く浅い沈線を横環させ、屈曲部の直上には、π字形の工字文が描かれている。縄文晩期末に位置づけられよう。

272・273は、いずれも縄文晩期後半に位置づけられる土器であると思われる。型式的な帰属ははっきりしないが、一応縄文晩期として考えておく。続縄文時代初頭の可能性もあろう。273・274共に胎土に白色粒子を多く含んでいる。地文はいずれも横位のＲＬと思われる。272は太く浅い沈線をランダムに施し、沈線の下部には、半裁竹管状の施文具でＵ字状の刺突を横環させている。273は太く浅い施文具で、横走する沈線と鉅歯文を描いている。

第Ⅴ群　その他の土器（339～341）

339はミニチュア土器である。頸部がやや縮約し、肩部がやや張り出す器形を有する。胎土は砂をあまり含まず、やや緻密である。焼成はやや良い。炭化物は付着しない。口唇部下と、肩部の直下に、文様とも成形の跡とも区別のつかない押圧の跡がある。頸部には先端の尖った施文具による刺突文が横環する。時期は不明である。

340もミニチュア土器である。口縁部がやや外反し、やや縮約する頸部を有し、肩部が外に張り出す甕形土器の器形を有する。内面はＶ字形に近い形をしている。胴部下半には指によると思われる成形の跡が残る。胎土は砂粒を多く含み、焼成も悪く非常にもろい。炭化物は付着しない。頸部と肩部に、爪もしくは先端の鋭い半裁竹管状の施文具によって、半月状の刻文が横環して施されている。胎土及び文様の特徴からすると、オホーツク式土器である。

341は接合しないが、同一個体であり、図のような上下の位置関係になると思われる。深鉢形の器形である。口唇部は肥厚せず、外傾して内縁が尖る。口唇部から底部までやや丸みをおびて縮約し、底部は大きく外に張り出している。胎土は砂をほとんど含まず、やや緻密である。焼成もやや良い。炭化物は付着しない。内面には擦痕が残る。胴部にＲＬと思われる縄文が施されている。時期は不明である。器形から判断すると鈴谷式土器に含まれる可能性もある。

第３層下面の土器（290～322）

第Ⅰ群　オホーツク式土器（293・294・296～299）

ｂ．刻文系土器（296）

296は刻文と型押文が複合施文された例。口唇部はやや角張る。口縁部はわずかに肥厚し、横方向のなでによって稜が２本作りだされている。上部の稜には先端の丸い施文具による刻文が斜位に施され、下部の稜には２歯の櫛歯状施文具による斜位の型押文が施されている。

ｃ．刺突文系土器（297・298）

297・298共にＯＩの突瘤文を有する。両者ともに口唇部はほとんど肥厚せず、口縁部はわずかに外反する。298の口唇面には円形の刺突文が施されている。

胴部・底部の資料（293・294・299）

299は頸部が著しく縮約する器形をもつ壺形土器の肩部である。外面は横方向に良くみがかれて光沢を有する。５歯×２列の櫛歯状施文具による型押文が施されている。この型押文は弧を描く形で横環されていると考えられる。

293・294は底部の資料。293は底部での縮約が著しい器形である。外面には炭化物が付着する。294は底部がわずかに張り出しぎみの器形を有するが、胎土、及び側壁の薄さからオホーツク式土器の底部と判断した。垂直に近い胴部から、底面近くで丸みをおびて縮約している。底面外面の中央部がわずかに凹んでいる。

第Ⅱ群　いわゆる鈴谷式土器

a．縄線文をもつ土器（290～292・300～309）

305と306、及び308と309は同一個体である。290・291・308・309は口唇下に円形刺突文を有さず、その他の資料は全てＯＩの貫通円形刺突文を有する。

290は小型の深鉢形土器である。口唇部の下部でごくわずかに外反する他は、わずかに丸みを帯びた胴部をもつ単純な器形を有する。口唇部は肥厚しない。器壁はごく薄く、内面には指による調整の跡と思われるでこぼこが各所にみられる。底部は底面近くでやや突出して張り出し、指でつまみ出して作られたと思われる稜が生じている。胎土は砂粒を多く含み、焼成もやや悪く、もろい。内外面にはごく浅い擦痕がランダムな方向に残る。外面胴部に炭化物が付着する。口唇部にはＲＬと思われる縄を横位に巡らせて押捺しているようにみえるが、原体ははっきりしない。口縁部には、Ｌの縄を２本１組にして５組横環させている。胴部は無文である。この土器は、円形刺突文を有さない点や、胴部に縄文を有さない点も本遺跡の他の鈴谷式土器と比較してやや特異であるが、特に胎土・器壁の薄さは全く異なったものであり、その点でかなり特異な土器として位置づけられる。

291は、290と同様の器形の深鉢形土器である。口唇部は肥厚しない。口縁部は外反せず、底部がやや張り出す。胎土・焼成は本遺跡出土の他の鈴谷式土器と同様のものである。内面にごく浅い擦痕がランダムな方向に残る。内外面共に炭化物が付着する。口唇部にはＲＬの縄文を部分的に施している。口縁部にはＲとＬの縄を２本１組にして４組横環させている。胴部にはＲＬの縄文を縦走させている。この土器は、290と良く似た器形であるが、胎土・器壁の厚さは290とは異なり、本遺跡の他の鈴谷式土器と類似したものである。また、胴部に縄文を持つ点も290とは異なる。

292も深鉢形の土器である。口唇部は肥厚し、口縁部はわずかに縮約して外反する。口唇部には、Ｌの縄文を折り曲げた端を用いて、右側に開いた馬蹄形の押捺を施している。口縁部には、Ｌの縄文を２本１組にして６組横環して押捺している。縄線文の下部には同じくＬの縄を折り曲げた端を用いて、下側に開いた馬蹄形の押捺を横環させている。胴部にはＲＬの縄文が部分的に施されている。

破片資料では、301・302・308・309は胴部にＲＬの縄文を有し、303はＬＲの縄文を有する。その他の資料では、現存する範囲では胴部に縄文は確認できない。300以外は全て口唇部が肥厚する。304は口唇面が外傾し、口唇部内縁は尖る。301・305・306・308・309は頸部がやや縮約し、口縁部が外反する。特に308・309は口径より胴部径が大きい器形である。その他の資料はほぼ直線的な器形を有すると思われる。口唇部文様は、300はＲＬの縄を、304・307はＬの縄を斜位に押捺している。303はＲの縄を、308・309はＬの縄を２本１組にして斜位に押捺している。301はＬの縄を横方向に１条横環させている。302はＬの縄を横位と斜位に数条づつ施している。305・306はＬの縄を折り曲げた端を用いて刺突を施している。口縁部文様は、300はＲＬの縄を口唇部直下から斜位に押捺している。口唇部直下には縄文原体の端部が確認できる。301はＲとＬの縄を２本１組にして５組横環させている。縄線文の下部には、太く深い縦位の刻文と浅く鋭い斜位の刻文を４～５本ずつ組み合わせた文様を、間隔をあけて横環させる形で配置している。302・307はＬの縄を横環させ

て押捺しているが、１本単位なのか２本１組なのかはっきりしない。303はＲの縄を、305・306・308・309はＬの縄を２本１組にして横環させて押捺している。304は横環するＬの縄を２本１組にした縄線文の間に、同じくＬの縄を２本１組にした斜位の縄線文がはさまれている形になっている。ただし、施文順序は斜位の縄線文が先である。

ｂ．縄文を持つ土器（311～317）

316と317は同一個体である。311は口唇部が肥厚せず、315もほとんど肥厚しない。313は口唇部内縁が内屈している。312・314・316・317は口唇部が肥厚する。器形は、311は頸部がやや縮約し、口唇部付近がやや外反する。314・316・317は口縁部が少し外反する。313は口唇部付近が内彎する。312・315は直線的な器形である。口唇部文様は、311・312・315はＬの縄を、314はＬＲの縄を斜位に押捺したものである。316・317は先端の鋭い施文具によって太く深い刻文を縦位に施している。313は無文である。胴部文様は、314がＬＲの縄文のほかは、全てＲＬの縄文である。

胴部の資料（310）

310は、ＬＲの縄を２本１組にして横位と縦位に押捺している。現存する範囲では、縄文は確認できない。

第Ⅲ群　続縄文土器（318・319）

318・319共に続縄文時代前半期の土器である。共にＩＯの突瘤文を有する。318は口唇部が外反し、口唇部の外縁は突出する。319は口唇部がわずかに肥厚し、口唇部内縁は角張り、外縁はやや突出する。318は、口唇部外縁にＲの縄を縦位に押捺してできたと思われる刻みを有する。確認できる範囲では両者共に縄文は施されていない。両者共に第２層出土の土器番号95や第３層出土の土器番号266と関係があろう。ただし、319はオホーツク式土器の刺突文系土器に含まれる可能性もある。ここでは口唇部の特徴から続縄文土器に分類した。

第Ⅳ群　縄文土器（320～322）

321は壷形土器の肩部と思われる。第３層出土の271と同一個体の可能性が強いが、確定できなかった。内外面共に炭化物が付着する。地文は横位のＲＬと思われるがはっきりしない。地文の上には太く浅い沈線を横環させ、拓影図の上下２箇所にπ字形の工字文が描かれている。縄文晩期末に位置づけられる。

320は、器壁が非常に薄く、もろい。器面に微隆起線を横環させ、微隆起線の間に、一部微隆起線にかかる形で、ＲＬの縦位の縄線文をめぐらしている。この縄線文は絡条体圧痕によるものと思われるが、絡条体の軸らしき凹みは確認できない。この320は縄文早期、中茶路式土器である。

322は深鉢形土器である。内外面共に黒褐色であり、炭化物が付着する。胎土には砂粒、雲母様の粒子を含み、焼成は悪い。器形は、口唇部まで器壁の厚さが一定で、直線的に開く単純な器形である。文様は、Ｒの縄、及びＬの縄による撚糸文を交互に横環させ、羽状の文様を描いている。ここでは、ＲとＬの縄は、同じ軸に巻かれているのではなく、それぞれ別の軸に巻かれ別々に施されている。縄文早期、東釧路Ⅳ式に比定できると思われるが、確定はできない。

第Ⅴ群　その他の土器（295）

295は底部の資料である。胴部に向かって直線的に開き、底部は張り出さない。胎土は砂粒、小石を含み、焼成はやや良い。器壁は厚く、底面と側壁の厚さはあまり変わらない。内外面共に炭化物が

付着し、内面には縦方向中心に、外面にはランダムな方向にごく浅く擦痕が残る。文様は施されていない。胎土・調整（擦痕）の特徴は鈴谷式のそれに類似するため、鈴谷式に比定できるとも思われたが、底部が張り出すという特徴を有しておらず、鈴谷式とは確定できなかった。

遺構出土の土器（323～336）

遺構と各土器の対応関係は以下のとおりである。

1 A　pit14……323
1 C　pit12……326
1 C　pit11……324・325
1 C　pit10……327～330
1 D　pit 5 ……331・332
1 E　pit 1 ……333～336

以下に323～336までまとめて説明を行う。

第Ⅰ群　オホーツク式土器（323・324・327・328・331）

b．刻文系土器（323・331）

323・331共に刻文の例。323は口縁部が肥厚し、口唇面が凹んでいる。口縁部下端の稜の部分に太く鋭い刻文を縦位に施している。331は口縁部が肥厚しない。口縁部下端に、横方向のなでによって稜を作り、その上に斜位の刻文を施している。

c．刺突文系土器（327）

327はＯⅠの突瘤文を有する。口唇部はやや角張り、わずかに外反する。

胴部の資料（324・328）

324は壷形土器の肩部であると思われる。縦長の貼付文を有し、貼付文の両脇には浅い沈線文が横位に施されている。

328は深鉢形土器の胴部であると思われる。拓影図上部には、ほとんど剥落しているが隆起帯が横環している。隆起帯の表面には斜位の刻文が施されている。隆起帯の下部には細く鋭い沈線が5本横環している。

第Ⅱ群　いわゆる鈴谷式土器（325・326・329・330・332～336）

a．縄線文を持つ土器（325・326・329・333）

326・333はＯⅠの、329はＯⅠの貫通円形刺突文を有する。325は円形刺突文を有さない。325は口唇部が肥厚せず、それ以外は全て口唇部が肥厚する。326は口唇部内縁が内屈する。329の口唇面はなでられて溝状に凹み、口唇部内縁は尖っている。329は口縁部がやや縮約し、口径よりも胴部径が大きくなる。口縁部はほとんど外反しない。その他の資料はほぼ直線的な器形を有するものと思われる。口唇部文様は、325は表面が剥落しており不明。326はＬの縄を1条、333はＲＬの縄を2条横環させて押捺している。329は無文である。口縁部文様は、326はＬの縄を、329はＲの縄を2本1組にして横環させて押捺している。333はＲＬの縄が9条確認できる。325は、口唇下から下方に向かってＬ2本・Ｒ2本・Ｌ2本・Ｒ2本・Ｌ・Ｒ・Ｌ・Ｒ・Ｌという順序で横環させている。口縁部の縄線文の下にはＬの縄を折り曲げて端を用いて、「へ」の字状の刺突を施している。

b．縄文を持つ土器（330・332・334～336）

全てＯＩの貫通円形刺突文を有する。335は口唇部外縁に刺突が施されている。330・335は口唇部が肥厚し、332・334・336は肥厚しない。330・334・335は口縁部が外反し、332・336はほぼ直線的な器形である。口唇部文様は、330・332・334はＬの縄を斜位に押圧したもの、335はＬの縄を、336はＲの縄を横位に押捺したものである。口縁部文様は、全てＲＬの縄文である。

Ⅲ　まとめにかえて

冒頭に述べた分類基準によって、本遺跡の土器群の口縁部資料を層位別に分類・集計した結果が第２表～第４表である。表土・撹乱層出土分を除くと、本遺跡の口縁部資料の58.6%をいわゆる鈴谷式土器群が占めている。

冒頭にも述べたように、鈴谷式土器の定義、あるいはその位置づけをめぐってはさまざまな見解がある。以下には、本遺跡の鈴谷式土器の型式学的特徴のうち、これまで議論の対象になってきた部分を中心に、簡単にまとめてみたい。

１．器　　形

底部形態について、尖底ないしは丸底か、あるいは平底か、という点が主に問題とされてきた。本遺跡出土資料では、完全な丸底は１点のみである（50）。他に、底面が丸みを帯びており、安定が悪く、底部が張り出さないという、丸底に近い器形を有するものがある（279）。これは、オンコロマナイ遺跡出土土器の「平底」［泉・曽野編　1967　Fig　２－６等］例に近い。その他の底部資料はいずれも平底であり、底部が垂直に立ち上がるものや、張り出すものが多くみられる。特異な例として、高坏の脚部のような底部を有する資料がある（109）。

２．文　　様

２．１　口唇下刺突文

円形刺突の有無、及び刺突は貫通か突瘤かという点が問題とされてきた［石附　1976など］。本遺跡の資料は、大部分が円形刺突文を有しており、刺突文がないことが確実な資料は、集計した分の中には11点、表土・撹乱層を含めても14点しかない（表　参照）。また、本遺跡の円形刺突はほぼ全てがＯＩの貫通する刺突文である。例外として、ＩＯの貫通する刺突文の例がある（329）。なお、鈴谷式に含めなかったが、鈴谷式に含まれる可能性のある資料のなかにＯＩの貫通しない円形刺突文を有する土器がある（269）。

２．２　口唇部文様

本遺跡の資料では、Ｌの縄を押捺した文様が最も多いと思われる。しかし、土器各論の部分では触れなかったが、Ｌの縄の斜位の押捺か、ＲＬの斜縄文か判別の困難な土器がかなり存在した。これらの判別に際して、「斜縄文」を「押捺」と見誤っている例がある可能性がある。ただし、「押捺」を「斜縄文」と見誤っている例はないであろうことを述べておく。

2．3　口縁部文様

櫛目文・縄線文・縄文のそれぞれの有無や様相が問題になっている。本遺跡では、櫛目文や型押文を有する例は存在しない。また、無文の例もごくわずかである。縄線文を有する土器と、縄線文を持たず縄文を有する土器の割合を、集計した分全体でみると、前者が52.6%であるのに対し、後者は28.5%である。ごく小さな破片のため文様の判定が出来なかった土器が18.3%もあるため、先の比率をそのまま文様の出現率と考えるのは危険であるが、少なくとも縄線文を持つ土器の方が多数を占めていることは間違いない。

縄線文のパターンとしては、縄線を横環する例がほとんどであり、横環以外の文様パターンは少数である（108・192・220・261・300など）。縄線文は、Ｌの縄を、もしくはＲとＬの縄を２本１組にして押捺する例が最も多いと思われる。

縄線文の原体としては、上記のもののほかに、ＲＬの縄が多く用いられる。また、ごく少数であるが、Ｒの縄のみの例（221・303）やＬＲの縄の例（310；ただし胴部の例。口唇部文様にはＬＲの縄線文の例はある。）、Ｒ｛ＲＬの「合撚」の例（190）、４本の組紐の例（214）がある。口唇部・口縁部にＲの縄のみを用いる例・ＬＲの縄を用いる例には、胴部文様がＬＲの縄文になっているものがあり（227・231・303など）、多数の例がＬの縄線文・ＲＬの縄線文の口縁部文様とＲＬの縄文の胴部文様という組み合わせを有していることとちょうど逆の関係になっている。口唇部・口縁部文様と胴部文様のあいだには、縄文原体についてこのような関係が存在している。

2．4　胴部文様

縄線文を持つ土器のうち、胴部に縄文を持たないのが確実なのは290のみである。その他に、220・300が縄文を持たない可能性が高い。小さい破片資料では胴部の縄文の有無は確認出来ないが、遺存率の高い資料の様相から判断すると、縄線文を持つ土器のうち、胴部に縄文を持たない例はごく少ないとして問題はないであろう。縄文原体はＲＬが大部分であり、ＬＲはまれである。

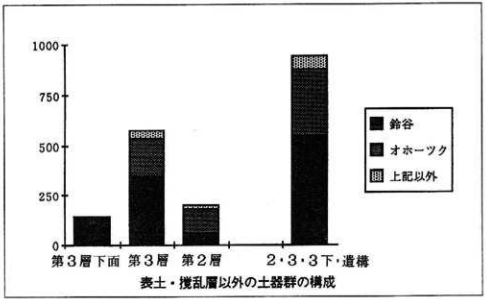
（熊木俊朗）

第2表　土器口縁部資料出土数量集計表（表土・攪乱層以外）

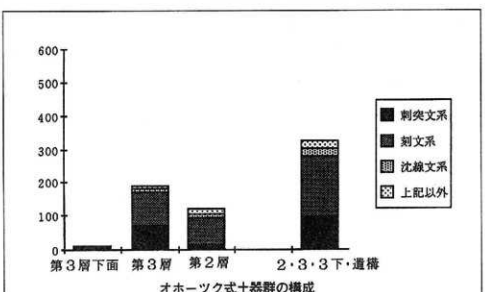
	オホーツク						鈴谷														無文(時期不明4))	その他		計
							縄線文				縄文				無文				不明3)	鈴谷計				
	沈	刻	円刻	無文	不明1)	計	刺有	刺無	刺不明2)	計	刺有	刺無	刺不明2)	計	刺有	刺無	刺不明2)	計						
第2層																								
A	4	27	3		4	38	19			19	8			8						27	12	2	〔続縄・北大〕	79
B		8	3		1	12	8		2	10	4			4	1			1		15		1	〔ミニチュア〕	28
C	5	31	8	1	11	56	2			2	1			1						3	3			62
D	2	9	3	1		15	4		2	6	6		1	7						13		1	〔土師器坏〕	29
小計	11	75	17	2	16	121	33		4	37	19		1	20	1			1	0	58	15	4		198
第3層																								
A	2	3				5	9		3	12	7			7		1		1	3	23	1			29
B		1	4		2	7	21			21	4			4					2	27		1	〔ミニチュア〕	35
C	1	27	37			65	53		7	60	20	2		32		1		1	23	116	8	4	〔ミニチュア・[illegible]C2D・[illegible]A・続縄〕	193
D	7	64	28		5	104	49	1	8	58	41			41	1			1	26	126	14	6	〔ミニチュア・鈴谷[illegible]・続縄〕	250
E	1	6	2			9	26	3		29	15			15					10	54	2	1	〔続縄〕	66
小計	11	101	71		7	190	158	4	18	180	97	2		99	1	2		3	64	346	25	12		573
第3層下面																								
B		3	3			6	2			2	2			2					1	5		2	〔東釧路IV・続縄〕	13
C			3			3	37	3	8	48	16		1	17					28	83	3	1	〔続縄〕	100
D	1					1	9			9	13			13					7	29				30
小計	1	3	6			10	48	3	8	59	31		1	32				0	36	127	3	3		143
遺構																								
Pit1							6			6	3			3						9				9
Pit3							1			1										1				1
Pit4			1			1																		1
Pit5		1				1	1		1	2	1			1						3				4
Pit10			1			1	2			2	1			1						3				4
Pit11		2				2	1		1	2	1			1						3				5
Pit12							1			1										1				1
Pit14		1				1																		1
小計		4	2			6	12		2	14	6			6				0	0	20	0	0		26
合計	23	182	95	2	23	327	251	7	32	290	153	2	2	157	2	2		4	100	551	43	19		940

1）……オホーツク式土器とは判別できるが小破片のため文様が不明なもの
2）……文様は判別できるが小破片のため刺突の有無が不明なもの
3）……鈴谷式とは判別できるが小破片のため文様が不明なもの
4）……文様が不明であり、時期も不明なもの

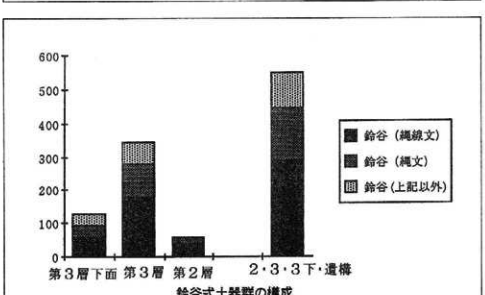
第３表　利尻富士役場遺跡の土器群（口縁部資料）の構成



表土・撹乱層以外の土器群の構成



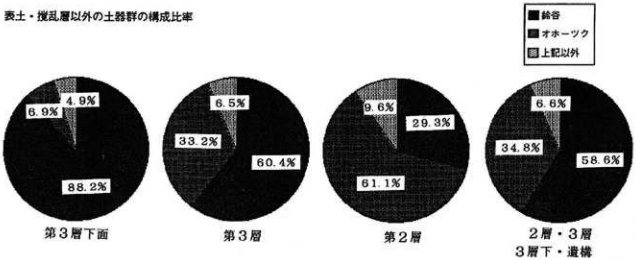
オホーツク式土器群の構成



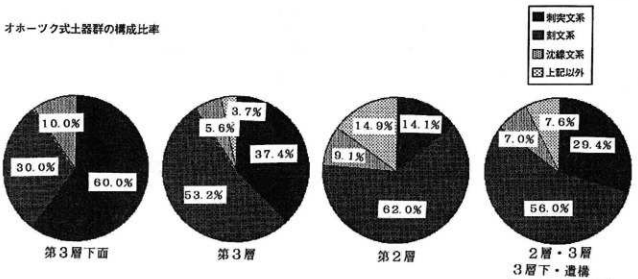
鈴谷式土器群の構成

第4表　利尻富士役場遺跡の土器群（口縁部資料）の構成比率

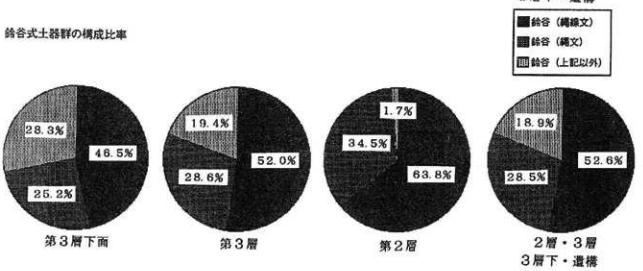
表土・撹乱層以外の土器群の構成比率

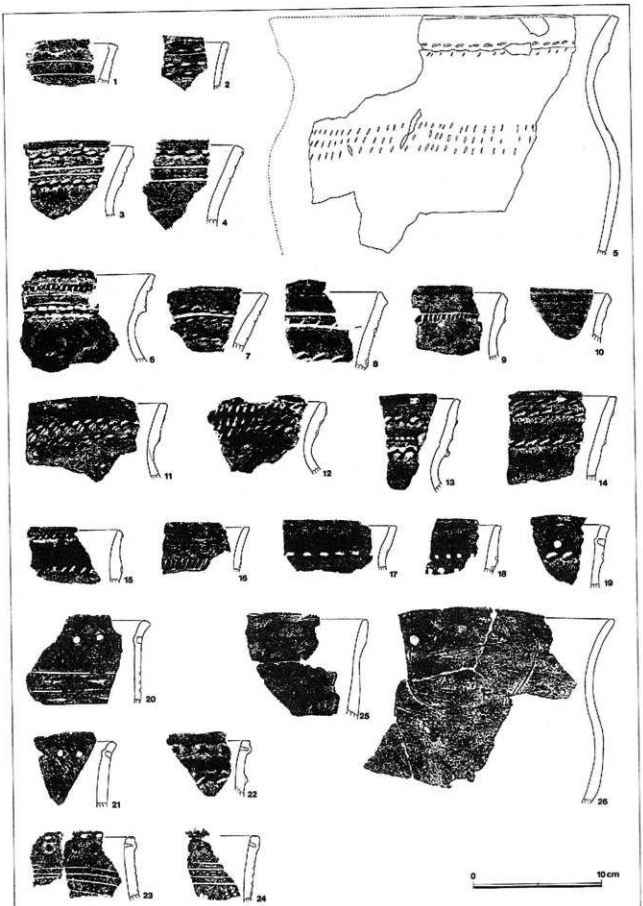


オホーツク式土器群の構成比率

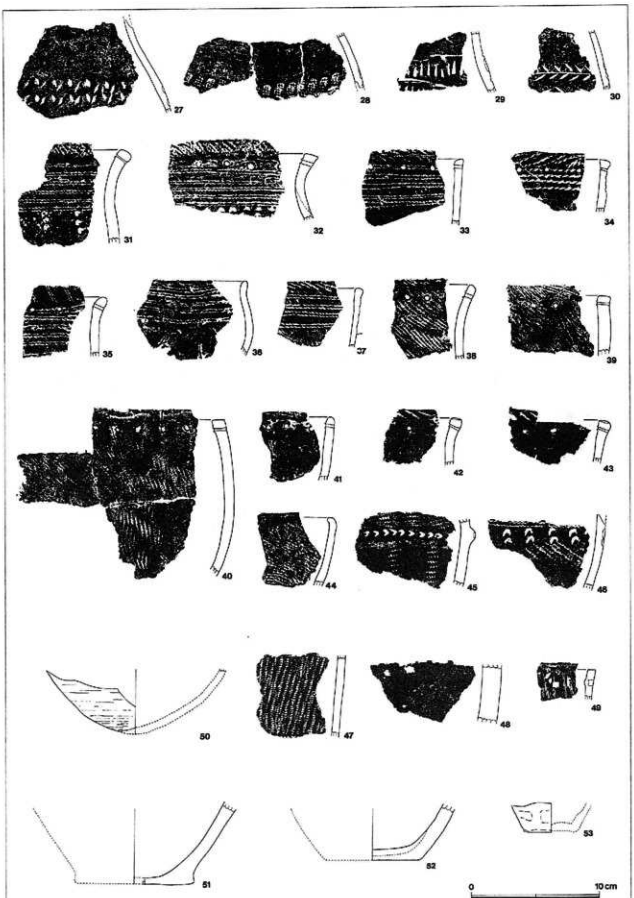


鈴谷式土器群の構成比率

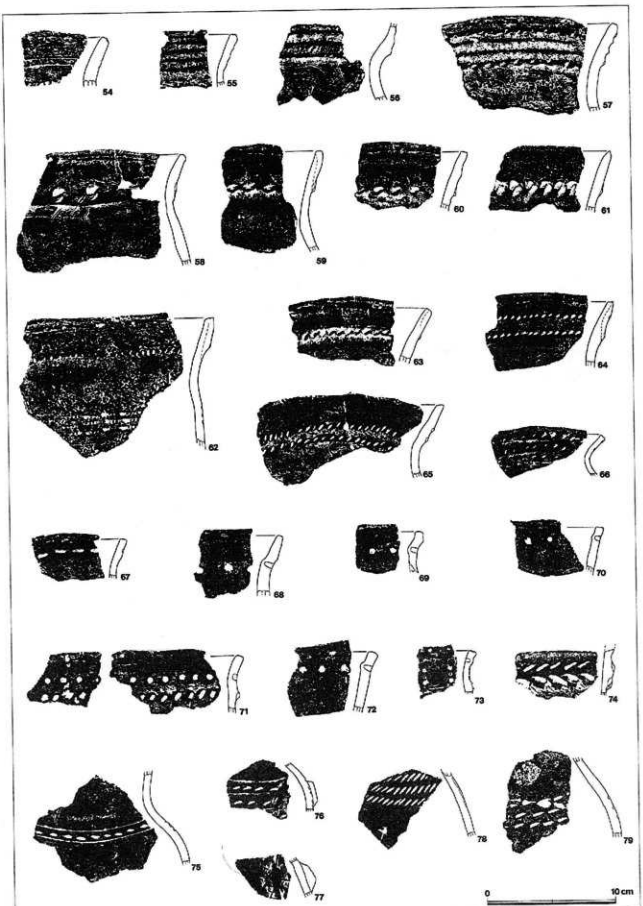




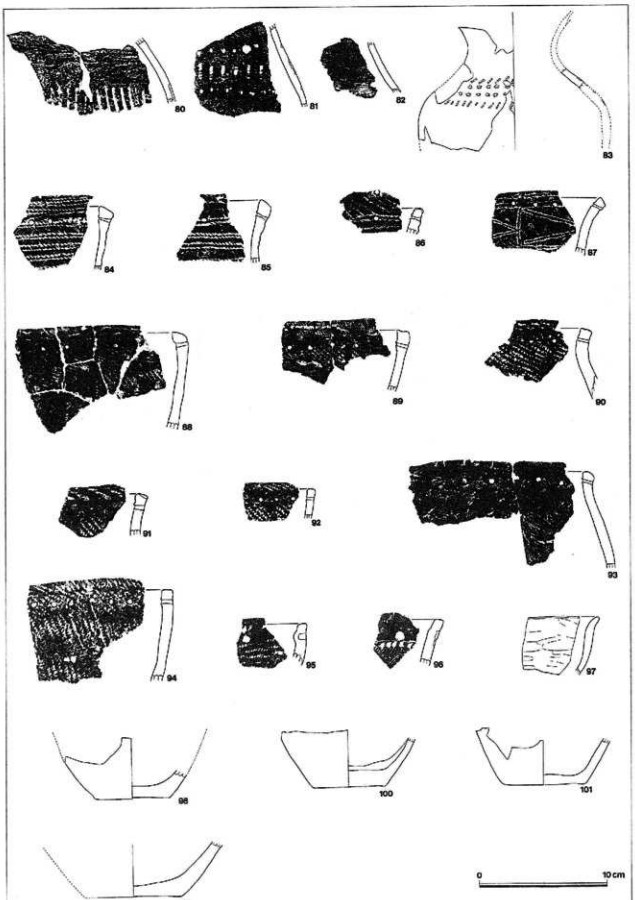
第9図　発掘区出土土器(1)



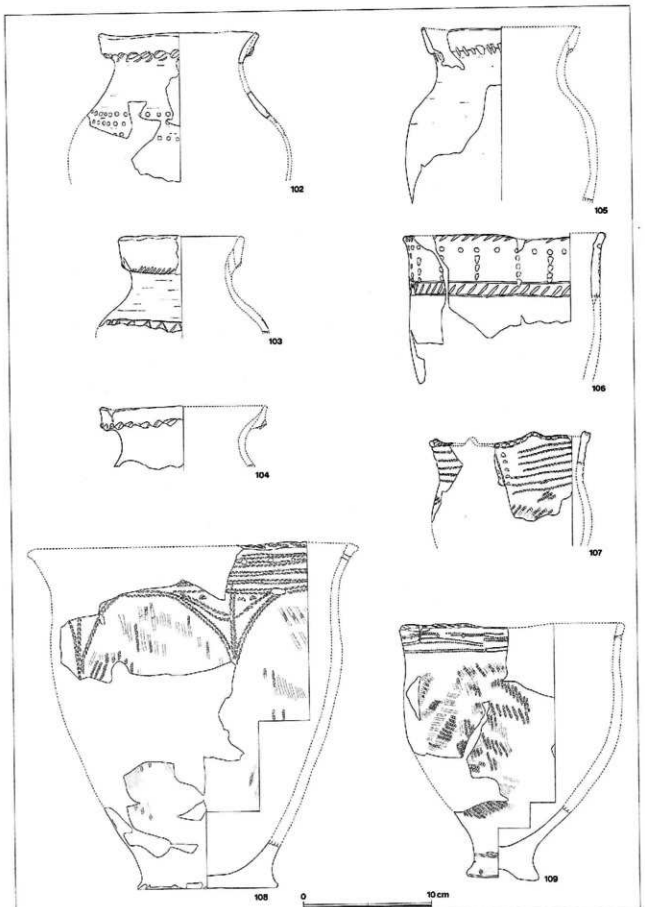
第10図　発掘区出土土器(2)



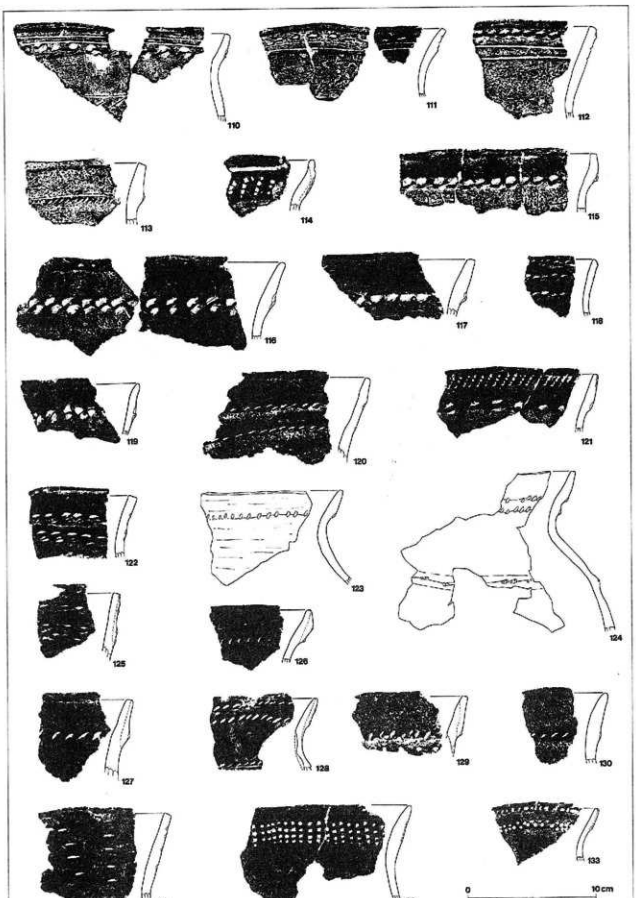
第11図　発掘区出土土器(3)



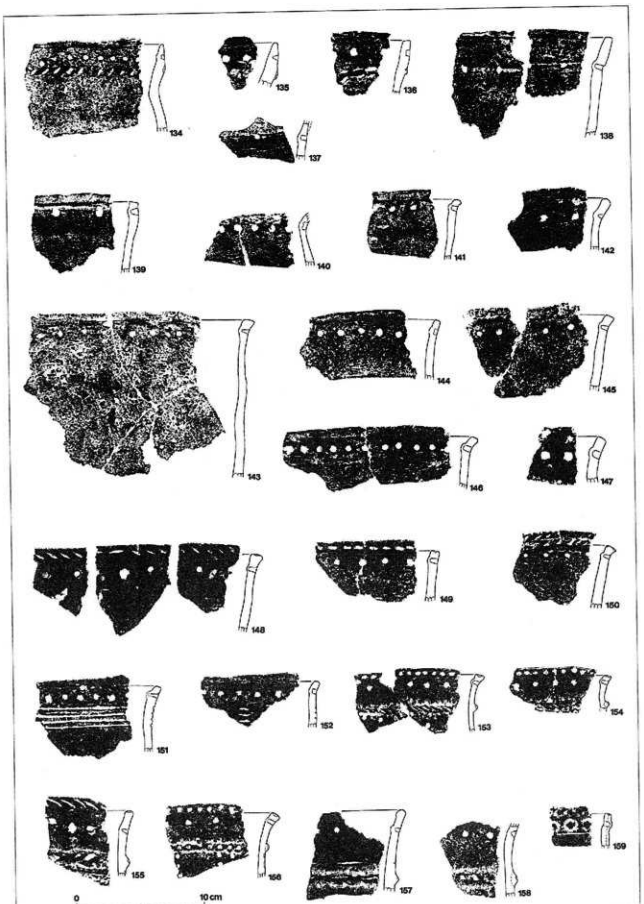
第12図　発掘区出土土器(4)



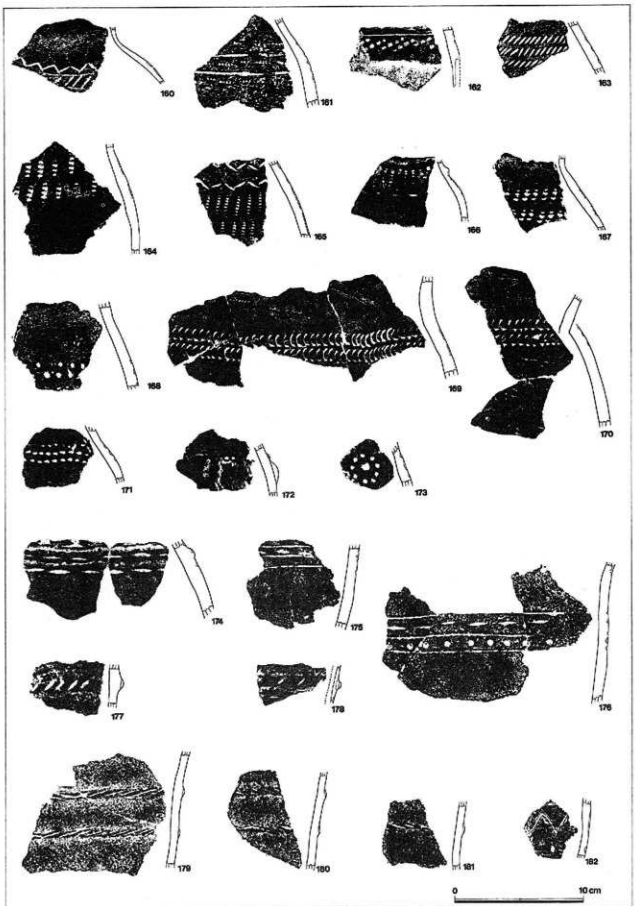
第13図　発掘区出土土器(5)



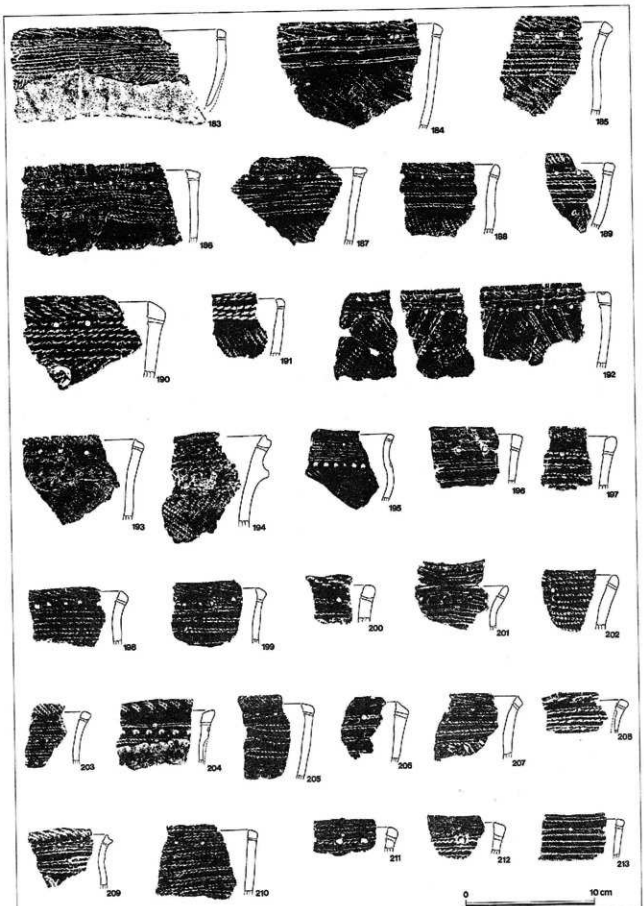
第14図　発掘区出土土器(6)



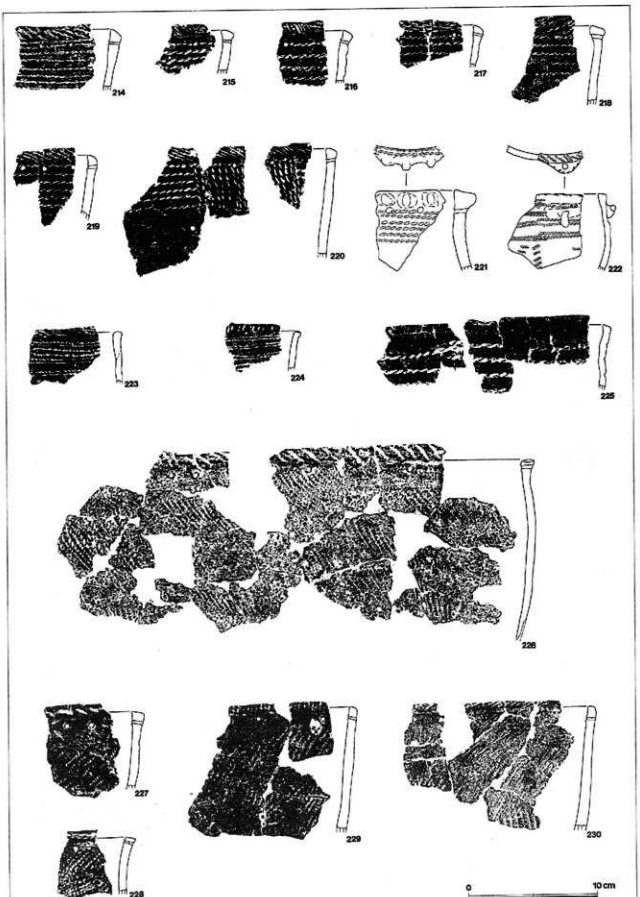
第15図　発掘区出土土器(7)



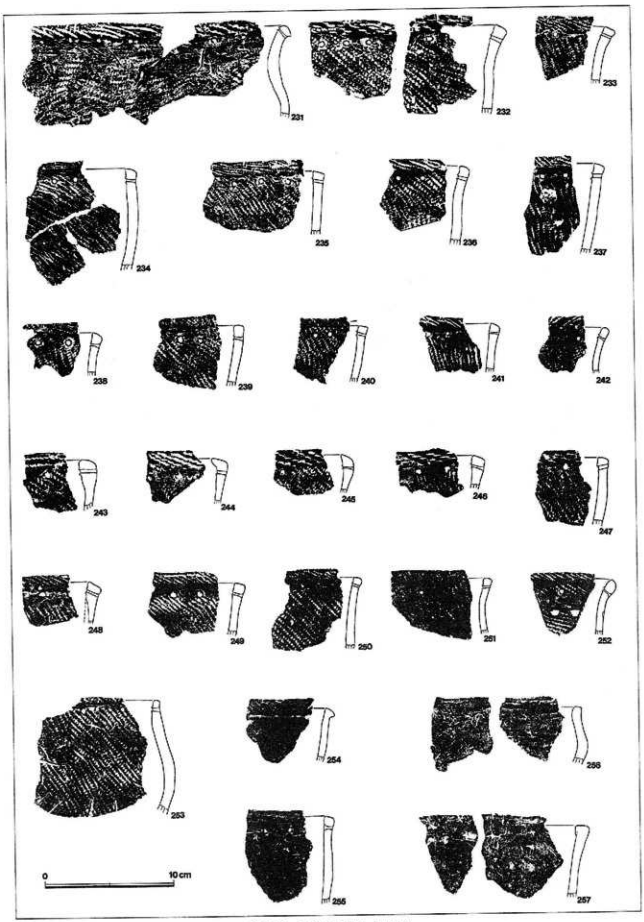
第16図　発掘区出土土器(8)



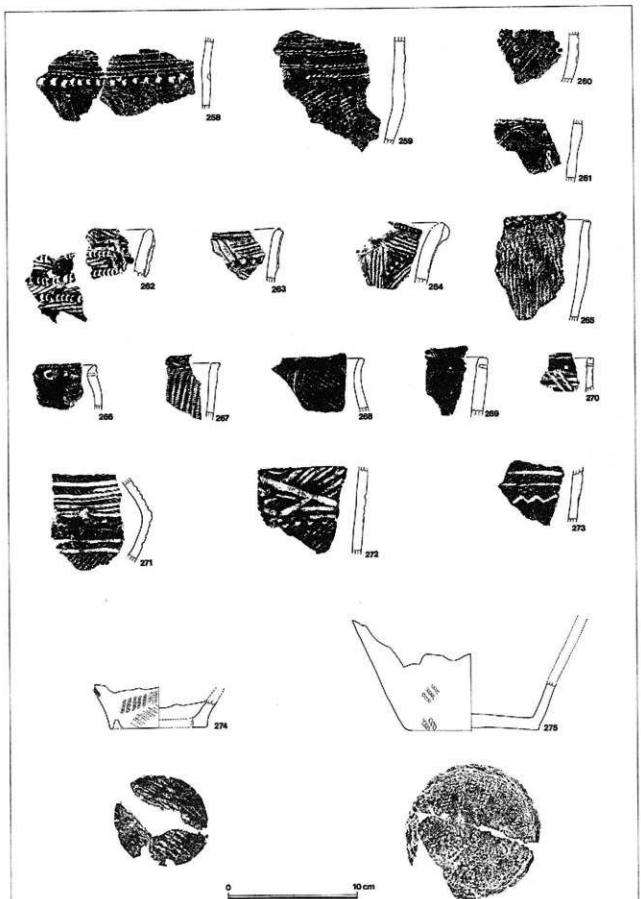
第17図　発掘区出土土器(9)



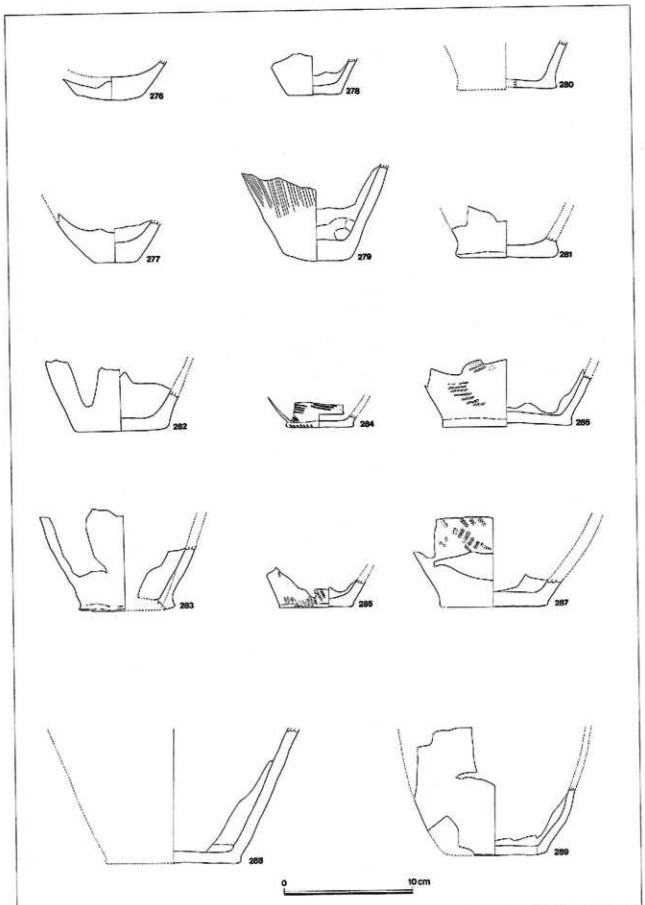
第18図　発掘区出土土器(10)



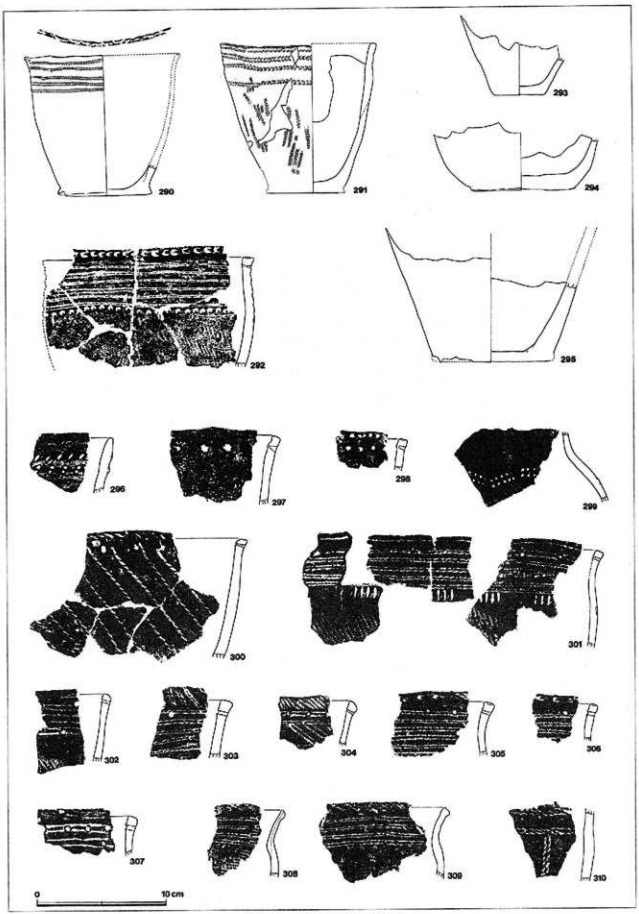
第19図　発掘区出土土器(1)



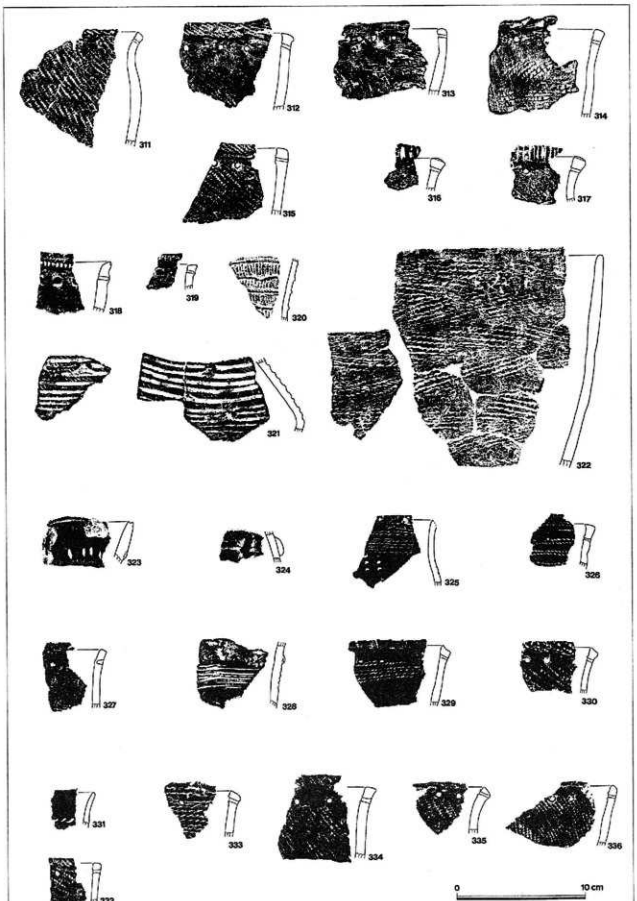
第20図　発掘区出土土器(2)



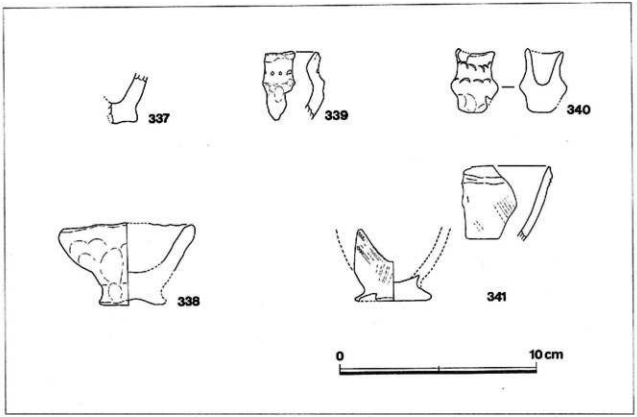
第21図　発掘区出土土器(13)



第22図　発掘区出土土器(4)



第23図　発掘区出土土器09・遺構出土土器



第24図　発掘区出土土器(6)

第2節　石　　器

発掘区からは248点の石器が検出され、出土層位及び計測値等のデーターは第7表に示したとおりである。検出された石器のうち、有溝石錘や有孔砥石は全例図示したが、数の多い器種についてはそのバラエティーが表現できるように抽出した。石器全体の実測率は約30%であるが、計測データーについては総ての石器について掲載している。以下、図示したものを中心に説明する。

1. 石鏃（図1～19、表1～63・250）

64点出土したものを形態によって5タイプに分類したが、詳細に観察するならば各タイプはさらに細分が可能である。以下、タイプごとに記述するとともに、細分についてはグループ分けして触れてゆくことにする。

また、石器計測表の備考欄に○印が示されているものは、器形に関係なく基部・茎部が非常に薄く作りだされているもので、装着について考えるとき、将来石鏃の細分基準の一つになる可能性がある。

タイプ1（図1～3・5、表6～13・29・30・39・51）

有茎のものをまとめるが、明瞭な茎部を作り出しているものは少ない。4グループに細分することができる。

非常に薄い剝片を使用し、第1次剝離面を表裏に残したまま側縁部の加工だけで整形される（表2・12・13）、小さいながらも逆刺部が明瞭に作り出される（表6・7）、不明瞭ながらも茎部を作り出していると判断出来る（図1・5、表11・29・30）、不明瞭な茎部をもち茎部が薄く作りだされている（図3・表9・10・39・51）ものなどがある。

タイプ2（図11～14、表43）

明瞭な茎部を持たない柳葉形のものをまとめ、基部が薄く作り出されるものとそうでないものの2グループに細分される。

入念な両面加工が施され全体に薄身に作られ基部も尖頭部と同じ程度に薄く尖頭状に仕上げられている（図11～13、43）、表裏に第1次剝離面を残し、加工は両側面に集中し基部はさほど薄くない（図14）ものがある。ただ、図14は全体的なプロポーションから見て石鏃としては違和感の残る例である。

タイプ3（図4・8～10、表31～38・40～42）

茎部の作り出されない、涙滴形（ティアドロップ・タイプ）のものをまとめ、基部が薄く作り出されるものとそうでないものなど3グループに細分される。

入念な両面加工が施され、全体に薄身に作られ基部は丸みがあり、薄く仕上げられている（図4・8～10、表31～34・36）、基部がやや尖頭状になる（表35・37・38・40・41）、基部に厚みのあるもの（表42）などがある。

タイプ4（図6・7、表16・17・19～21・60～62）

無茎の二等辺三角形、基部が平らでコンケーブしない細身のものをまとめ、3グループに細分することができる。3者の基部は共に薄く仕上げられている。

非常に薄い剝片を使用して表裏に第1次剝離面を残す、加工は両側面に集中して石刃鏃風に見える（図6・7）、入念な両面加工が施され非常に緻密に仕上げられている（表16・17・20・60・61）、片面に第1次剝離面を残しやや粗雑な加工となるもの（表19・21・62）などがある。

タイプ5（図15～19、表49・50・52～56）

無茎の石鏃で基部がコンケーブするものをまとめるが、2グループに細分することができる。

入念な両面加工が施され両側縁はゆるやかなカーブを描き基部がコンケーブする（図18・19、表49・50・55・250）、基部近くで肩の張り出すもの（図15～17、表52～54・56）などがある。ただ、タイプ5の中で基部の幅が広い例は銛先鏃の可能性がある。

2. 無茎銛先（図20～23、表18・68～72・135・136）

無茎の石鏃に類似した外形をもつ、銛頭の先端に装着するための石器である。全体的に薄く平板に作られ、基部付近は断面形が薄く平らであるといわれている。本遺跡では石鏃全体が薄く平板であり、基部も薄く仕上げられているため平面観や側面観よりも、大きさによる区分が有効であると考えた。タイプ4・5とした石鏃に比べ大きく重量感があるものというイメージがわかりやすい。

無茎銛先としたものは12点出土しており、基部がコンケーブするものと、平らなものの2グループに細分される。

入念な両面加工が施され基部がコンケーブする全長の短いもの（図20・21、表68）と、全長の長いもの（図22・23、表69・70・135）がある。基部が平らなグループも前者と同じ様に、全長の短いもの（表71）と、全長の長いもの（表18・72・136）がある。

3. 有茎銛先（図24～29、表8・79～96）

入念な両面加工が施された有茎石鏃形を呈し、太い茎部、重量及び計測値が石鏃を大きく越えるものを一括した。この中でもやや小型細身と感じるもの（図24・25、表8・79～83・87）と、大型で重量感のあるもの（図26～29、表84～86・88）の2グループに細分できる。他は欠損品である。

銛先は骨角製の本体に装着することによって機能する石器である。そのため、銛先の茎部は本体と接合する面が平坦に作られると言われる。この視点において観察するならば石器計測表の備考欄に△印が示されているものは、茎部の片面が平坦に作られているものを表わしている。又、茎部平坦面が作られる側に主剥離面（第1次剥離面）が残される（図25・29、表79・81・85・86・90・92）ものと、茎部が明瞭な平坦面とはならないが頭部の表裏で器厚に明らかな差のある（図28、表80・84・88）ものがある。

4. 錐（図30、表98・99）

刺突部を持つものを石錐とした。不定形な剝片を利用し図下端部に刺突部を作り出している（図30）、同様に薄い剝片の一端に刺突部を作り出している（表98）、断面扁形の棒状頁岩の一端に刺突部をもつもの（表99）などがある。99は切断面剝離面とも全体が磨滅しており、本遺跡の主体を成す遺物群より古い、縄文時代の遺物の可能性が強い。

5. ナイフ（両面加工・半両面加工）（図31～45、表115～134・137～170）

縦長の剝片を利用し、両面加工が施され鋭い刃部を作り出しているものを一括した。ナイフ状石器は利器としての性格によるものか欠損品の割合が多い。つまり、欠損部が生じても利器として使用することが出来るため、形状変化が進むまま使用されていたと理解したほうが良いのかもしれない。入念な加工の施される細身のグループと、やや加工が荒い幅広のグループに細分できる。また、半円形の形状を示すものの例も多く、この形状のままで完形品の可能性を否定することは出来ない。

入念な両面加工が施され、やや細身の形状に仕上げられており中には石槍状と形容出来るものも含まれている（図31～34・37～39・41～43、表115・120～124・126・128～130・132・138）、同柄部破片（表159・160・162～164・166）、同刃部破片（表139・143～148・151・158・165・167）などがある。

前者に比べ幅広の剝片を利用し、やや荒い両面加工が施され柄部が作り出されるものや、長円形を呈する（図35・36・40・44・45、表116～119・127・131・134）、同柄部破片（表170）、同刃部破片（表155・161・169）、半円形に近い形状を示す刃部破片（表125・133・149・150・152～154・156・157・168）などがある。他は小破片である。

6. スクレーパー（図46～50、表176～186）

背の高い刃部を作り出し、素材平坦面と刃部の角度が鈍いものを一括した。

やや薄手の剝片に鈍い角度の刃部を作りだす（図46・47、表179・181・182）、やや厚手の剝片を利用する（表176・180・184・185）、いわゆるエンドスクレーパーと呼ばれる（表177・178・183）、非常に厚い剝片を利用し図下端部に背の高い刃部を作り出すエンドスクレーパー（図48～50、表186）などがある。

7. 使用痕のある剝片（不整形なナイフ・削器等）（図51、表188～214）

片面だけの側縁加工で鋭い刃部を作り出すものを一括した。得られた剝片をそのまま利用するものと、わずかに剝片の形状整形するものの2グループが見られる。

得られた剝片の形状そのままに側縁部に刃部を作り出す（図51、表193～197・199・202・206・208・209・214）、長円形を意識した整形の見られる（表200・201・203・204・207・210～213）、平坦な刃部を持つ（表198・205）、薄い縦長の剝片を使用しツマミを作り出しているもの（表188・189）などがある。

8. 石　　斧（図56～62、表222～234）

刃部を欠損する小型（図56）、原石の形状を残す小型両刃石斧（図57）、クサビ状の原石を利用した両刃石斧（図58）、擦り切り痕を残す（表225）、短冊状（図59・60）、全長の短い（表223・224）、打撃による剝離調整により形状を整え片面の刃部先だけが研ぎ出される（表222）、短冊状の打製石斧あるいは未製品（表226）、大型の短冊状両刃石斧（図61・表227）、刃部を欠損しているが北方系といわれる角柱状石斧（図62）などがある。他は刃部あるいは胴部の破片である。

9. 敲　　石（表235・236）

長円礫の一方の端に大きな剝離と潰れがみられる（表235）と、長円礫を半割する大きな剝離によって刃部状の断面を作り出している（表236）ものの、2点が出土している。

10. 砥　　石（図66、表238～242）

発掘区より6点の砥石が出土しているが、図66に示したものを含め総て破片である。

11. 石　　錘（図63～65）

いわゆる有溝の大型石錘が3点出土している。

長円礫の1側に溝の見られる（図63）、偏平長円礫を一周する溝の見られる（図64）、偏平円礫を一周する溝が見られるが、溝の幅に乱れのある（図65）ものがある。

12. 有孔砥石（図52・53）

いわゆる有孔砥石といわれる石器が2点出土している。

細い短冊状を呈し、下部を欠損、上端の片面にも欠損が見られる。孔は両側より漏斗状の窪みとして削孔し中間部で貫通させている（図52）。表土排土時に半割してしまったが完形品である。上端部中央に削孔が見られ、孔は両側より漏斗状の窪みとして削孔し中間部で貫通させているが、斜め上方から下方に向かって削孔の軸線が引かれる。表裏とも、図上で右から左へ斜行する溝が作り出されている（図53）。

13. 玉（図55）

第3層の魚骨層内から1点だけ出土している。径10㎜を超える大型のものである。琥珀製の玉は一度に沢山出土することがあるが、本例は水洗処理の土層内から出土しており他の類例はなかったのであろう。

14. 金 属 器（図54）

円形の垂飾用金具の一部と思われる金属片が1点出土している。第3層出土で青銅製であろう。

以上、出土した石器について記述した。

出土した石器の組成を見ると、出土数の偏りと石器の作り方に特徴のあるものが認められた。

石鏃の本遺跡における出土のありかたは、調査面積および石器総数に対して出土数が多いことと同時に完形品の占める割合が高いと言える。器形の特徴としては基部が非常に薄く作られているものが多く存在しており、この様な製作的特徴を持つものについては表中に明示している。この、基部が薄く作り出される石鏃の装着方法について推測する時、身の厚い有茎の石鏃を直接矢柄に装着して使用すると言う無骨なイメージでは無理が生じるのではないかと疑問を持った。石鏃の装着方法について疑問を持ちつつ資料の検討を行っていたところ、馬場脩氏が紹介している千島オホーツク竪穴の資料（馬場1979）の中に非常に都合の良い例を見つけることができた。先端部を溝状に掘り込んだ骨製中柄に、本遺跡出土例と同様な形状の石鏃が装着された状態で出土した資料が写真で紹介されている。基部が薄く作られた石鏃は、まさにこの様な装着方法であろうと感じた。中柄はわりと長く下部に逆刺が作り出されており、ずいぶんと深いところに逆刺が位置しているものだと感じるが、どのような生き物を対象にしたのであろうか。

本遺跡は、北海道島と礼文島を望み見る利尻島と言う離島に営まれている。利尻島や礼文島にはネズミやリス以上に大きな陸上動物は生息していなかったので、北海道島とちがって有用な陸獣を狩猟対象とすることは出来ない。それにもかかわらず石鏃の出土数が多い、このような例について西本豊弘氏が礼文島香深井A遺跡を例に引いて陸獣狩猟について疑問を呈したことがあり（西本　1984）、本遺跡例も同様であろう。また、時期について隔たりはあるが、石鏃装着の好例を知ることのできた千島例も利尻島・礼文島と同じように島嶼部にあることから、弓矢を持って陸獣を追いかけるという狩猟イメージは浮かばない。とするならば、華奢に作られた石鏃を装着した用具で行いうる狩猟の対象となりうる動物相とは何であろうか。

具体例を提示出来る程に熟考しているわけではないが、華奢な石鏃を装着し、長い中柄の深い位置に逆刺が作り出される矢によって有効に刺し貫かれる生き物は軟らかいと考えられるであろう。このような推測をしていると、かつてテレビ報道を賑わしていた、ボウガンの矢を受けて逃げ惑うカモのことが思い出された。島嶼部に多数生息する鳥類を対象として、射落とすあるいは飛翔できなくし、小舟で悠々と拾い集めていたのではないかと想像をたくましくしてみた。

ただ、このような推測は北海道島についても通用するものであろうか、資料の検討例があまりにも少ないので肯否1例づつを上げておく。肯定的に石鏃を観察できる例としては、ほぼ同時代と解釈してよい稚内市オンコロマナイ遺跡（泉　1967）が上げられ、宗谷海峡一帯では同じような狩猟が行われていたのであろうか。否定的要素を持つ例としては、千島例がオホーツクと紹介されているので枝幸町目梨泊遺跡（佐藤　1994）を上げる。目梨泊例は有茎石鏃が多く図示されており側面観がやや厚くコロコロとした感じを受け、石鏃の組成に違和感がある。しかし、千点を超す石鏃の中には無茎のものも多く含まれているようなので完全に否定されるものではないかもしれない。千島・北海道オホーツク海・利尻島にあって類似度に親近感や距離感があるのは文化的共通性と共に、生活環境による生業の差に支配される分化なのであろうか。

有孔砥石と呼ばれる短冊状の石器が2点出土している。図上で示すほどに明瞭な使用の痕跡を一見してでは認知しにくい石器である。縄文や続縄文時代の溝を掘るように使い込まれた砥石とは形状や砥面の状況に差異が大きい。しかし、この石器が砥石だと考えて、現在私たちが鉄製の刃物を研ぐために使用する砥石と比較するとどうであろうか。石器自体のサイズや一つ一つの砥面サイズを比べると大きな差があるものの、砥面の形状や全体的なプロポーションのよく似た砥石を見つけることが出来る。砥面の一つ一つは小さなものであるが、研磨の使用方法が見えない程にきめ細かい使われ方をし、砥面のコンケーブが非常に浅く定規などの平坦なものを当てなければ観察しにくい。一つ一つの砥面の確認に注意が必要であるがコンケーブした砥面が連続している、表裏2面だけではなく両側面及び稜をも使用している。この様な使用状態に近い形状を示す現在の砥石としては、手持ちで使用する鎌用の砥石が一番近いのではなかろうか。だが、鎌用の砥石と比べ研磨痕が不明瞭でコンケーブが浅い点からすれば、鉄器の刃部を強く研ぎ出すために使用すると言うよりも、肉用包丁の油分を取り除くために、軽く刃部をなぞるような使用方法ではなかったかと観察される。又、図に溝状に示されるのは、右手に砥石を持ち手先を振子のように繰り返して使用した結果であろう。

少ない出土品としては、大型の有溝石錘が3点出土している、有孔や有溝の石錘はオホーツク文化に伴う石器としてよく知られている。しかし、本遺跡から出土した3例は微妙に印象が異なると感じるが、具体的に比較検討する用意を筆者は持ち合わせてはいない。

石器の組成を見ると、石鏃・石製銛先・ナイフの三器種が突出しており、中でもナイフ類がずば抜けている。遺構の項でも触れているが、本調査区が海獣類残骸・魚類残骸の廃棄場所であるため、解体処理に使用されたナイフ類が混入あるいは廃棄されたため多数検出されたのかもしれない。ナイフ類に比べてスクレーパーは少数である、海獣類が多数捕獲されているとすれば少なすぎるような気がする。続縄文時代の遺跡において石器組成のバランスを崩した例は幾つか知られている。恵山期の南川遺跡（高橋　1976・加藤　1983）では敲石とメノウ製錐の出土数について異常値が報告され、本遺跡に近い例としては稚内市声問大曲遺跡（土肥　1993）の出土石器総数1,147点中、スクレーパーが8割を占めると報告されている。石器組成のバランスの崩れは集落ごとの生業の差、あるいは分業の現われ・専業集団の発生なのであろうか。特に、声問大曲遺跡の集石遺構群とスクレーパーの数は生業を反映しているような気がする。とすれば、本遺跡は海獣狩猟・鳥類狩猟や漁労を専ら営み、その

処理を象徴するものであり、声問大曲遺跡は報告者がいうように食料の加工処理の場、あるいは毛皮等のなめしの現われなのであろうか。また、本遺跡において検出された2基の配石遺構も声問大曲例と同じ意味をもつものであろう。

本遺跡の石製銛先を考えるために、続縄文期の他遺跡の石器組成を検討した。日本海側では瀬棚南川遺跡、小樽チプタシナイ遺跡(大島　1992)、餅屋沢遺跡（大島　1990)、石狩紅葉山33号遺跡（木村　1975・石橋　1984)、ワッカオイ遺跡（石橋　1975・1976・1977)、オホーツク海側では斜里宇津内遺跡（米村　1973)、常呂栄浦1遺跡（藤本　1985)、宗谷海峡を挟んでは稚内オンコロマナイ遺跡、声問川大曲遺跡である。時期的に見るならば南川遺跡・紅葉山33号遺跡は恵山期、チプタシナイ遺跡・餅屋沢遺跡・ワッカオイ遺跡は後北C２D式期、宇津内遺跡は宇津内２式期、栄浦第１遺跡は宇津内２式期と後北C２D式期、声問川大曲は続縄文前半の複合遺跡、オンコロマナイ遺跡は本遺跡と同じ鈴谷式期とオホーツク式期である。海岸部に営まれた遺跡を基準とし、続縄文の各地域各時期にわたって検討しようとしたが、地域的には日本海側の石狩以北、オホーツク海側の常呂以北にまとまった報告資料がなく、時期的には後北期前半の資料が欠落している。又、遺跡の性格がそれぞれ異なっており比較資料としては充分とは言えない状況にある。従って、良好な資料が報告されるたびに追加検討を加えていかなければならない作業であると考えている。

資料の検討には直接生産に係ると考えられる、石鏃・石製銛先・ナイフ類に絞り、有茎・無茎、ナイフ・スクレーパー・使用痕のある剥片に分けた。報告書から出来る限り数値を得ようとしたのだけれど、全体の数量が記載されていないものや、器種はわかるが分類できない数量があった。そこで、推測数量、分類できない数量についてはカッコ書きとした（第８表）。カウントにあたっては、本来の石器組成に出来るだけ近づけるため遺構だけではなくグリットを含めた全石器とし、基礎数の取出し作業は遺構単位とし遺構別一覧表を作り本表では総計を使用した。備考には対象とした遺構等、除外したもの、検討外の石器数、調査面積をコメントした。又、ワッカオイ遺跡の総数は推測出来ない、栄浦第１遺跡は遺構の重複が激しく単純な遺構が見つけづらく、宇津内２式と後北C２D式の重複した遺物群として比率を見るため参考例の計を表示した。

この表の中から読み取れるのは、石製銛先ばかりではなく石器の消長が感じられる。

恵山文化はすばらしい銛類を持ち、優れた海洋狩猟民としてのイメージがある。しかし、南川遺跡における石鏃と石製銛先の比率、25対１という数字はあまりにも差がありすぎるのではないだろうか。紅葉山第33号遺跡では更に低い数値を示している。更に、有茎石製銛先は見られない。オホーツク海側では宇津内遺跡しか提示できないのでほとんど比較ができないが、有茎石鏃が見られず有茎石製銛先もわずかしかない。後北C２D式期になると石器使用量が減少するようで、器種も石鏃とナイフ・スクレーパーくらいになるのではないだろうか。栄浦第１遺跡では宇津内２式と後北C２D式の重複を抽出したが宇津内２式に無茎石鏃を主体的に持つ後北C２D式の石器が重なった場合の組成であろう。声問川大曲遺跡は石製銛先をほとんど持たない続縄文前半の諸文化が複合し、スクレーパーが異常に多い石器組成を示している。オンコロマナイ遺跡と本遺跡は石鏃と石製銛先が多く、共に有茎無茎の２者を持つ。

各地域・各時期の資料がきれいに埋められているわけでもなく、各遺跡の性格が異なり調査面積もバラバラな中での推測ではあるかが、組成表にない石器が他の遺跡で直接生産の主体的な石器になるとは考えがたいので本表にある石器数量が石器組成の比率を反映していると考えておきたい。

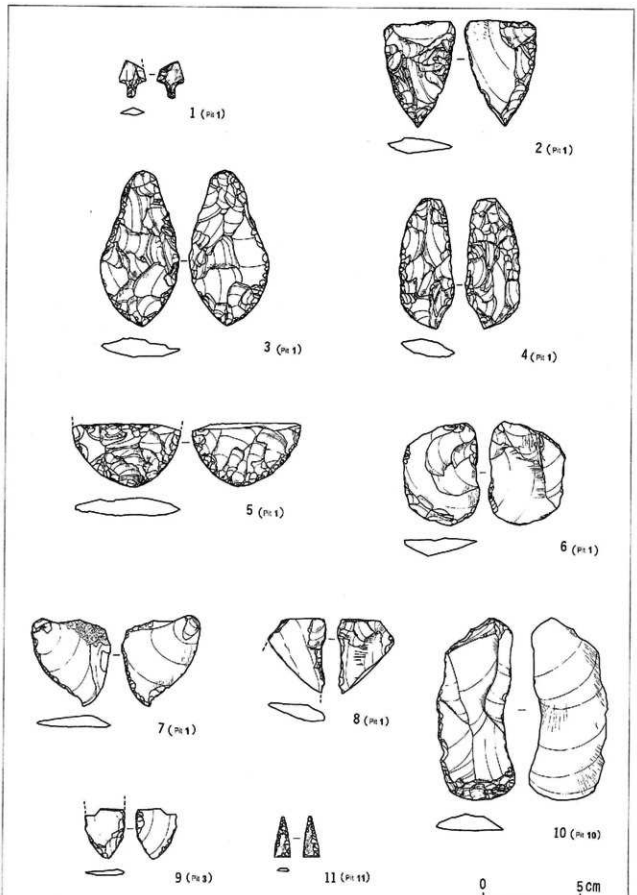
このような石器のありようを時間的に見ると、北へ向かった恵山文化は影響力の強い地域を離れるに従い、石製銛先の量を減らし海洋民的性格を弱め在地の文化を受け入れて行く、その現われが石鏃

に見られる有茎主体から徐々に無茎の比率を高めて行く変化なのではないだろうか。又、南川3群の時期には声問川大曲遺跡にまで到達している。無茎石鏃の流れは宇津内2式や後北式の文化伝統の中に求められるのであろうが海岸部には後北式前半の良好な資料が求められず、今後に期待される。後北C2.D式期になると石器の使用量が減少し、有茎無茎の石鏃は残るがナイフあるいはスクレーパーが主体となるようである。石器の使用量が減少してゆくにも係らず、文化的衰退とはならず逆に北海道をほぼ席巻し東北地方にまで進出するのは鉄器供給による文化の強大化と、寒冷化による南下なのであろうか。北大式期になるとワッカオイ遺跡で見る限り擦文文化期と同じようなラウンドスクレーパーくらいしか残らないのではないだろうか。

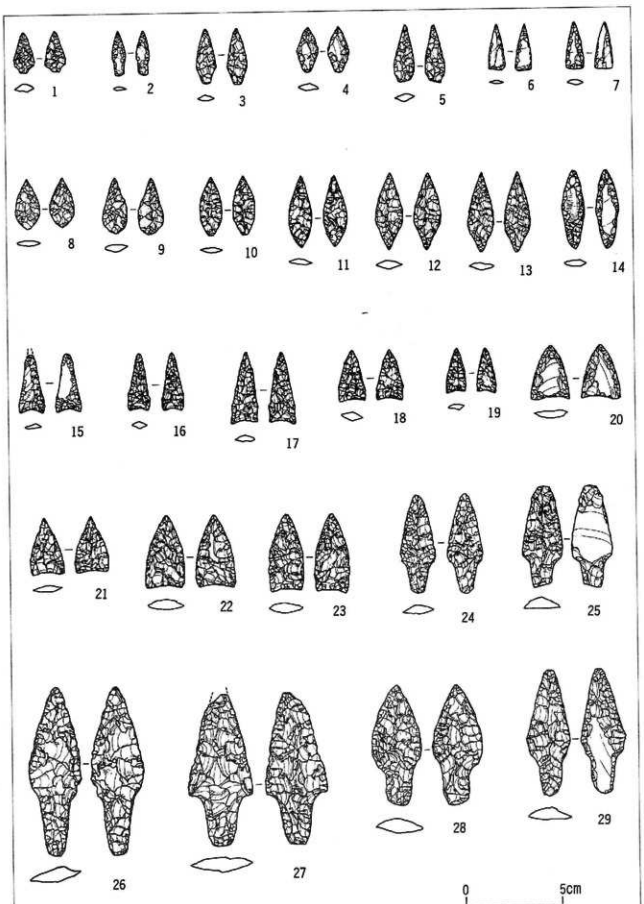
後北式の分布があまり見られない道北地域のオンコロマナイ遺跡に代表される人々の時間軸に沿った流れはまだ明確にされてはいないが、同時代の他文化に比べ強い海洋指向を感じる。石鏃については前述のごとく鳥類等の狩猟を考えた。石製銛先については有茎無茎の両タイプを持ち出土数も多くなり周辺環境を考えると海獣狩猟を強く感じさせると共に、様々な狩猟方法を持っていたのではないだろうか。海洋適応の始まりをどこに求めるか不明であるとしても、海洋狩猟の技術について本遺跡時点ではある程度枠組みが出来上がりつつあり、オンコロマナイ遺跡と比較するならば島嶼部においては、更に海に対する依存度が強く働いていたと読み取ることも可能である。

以上、本遺跡出土の石器について、北海道内のいくつかの遺跡との比較を通して考えてみた。この作業は石器のみを素材としての仮設作業であることを最後に記しておきたい。

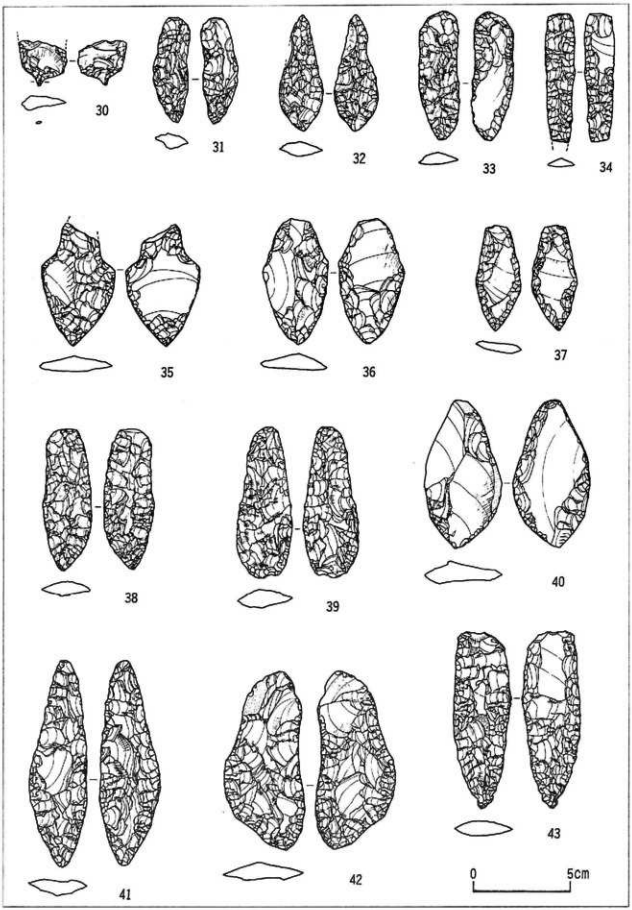
（内山真澄）


1 (Pl.1)
2 (Pl.1)
3 (Pl.1)
4 (Pl.1)
5 (Pl.1)
6 (Pl.1)
7 (Pl.1)
8 (Pl.1)
9 (Pl.3)
10 (Pl.10)
11 (Pl.11)
0
5cm

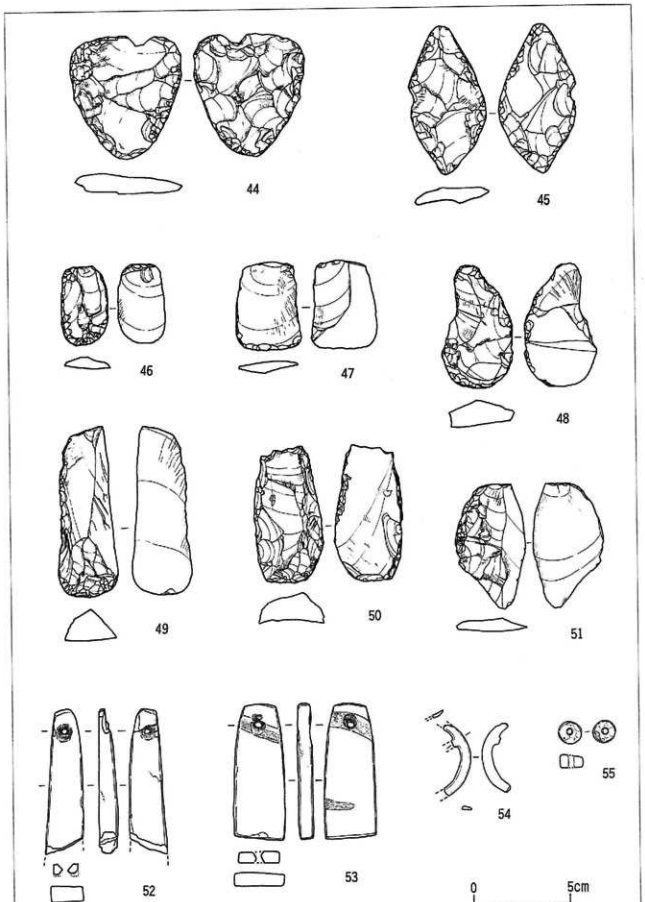
第25図　遺構出土石器



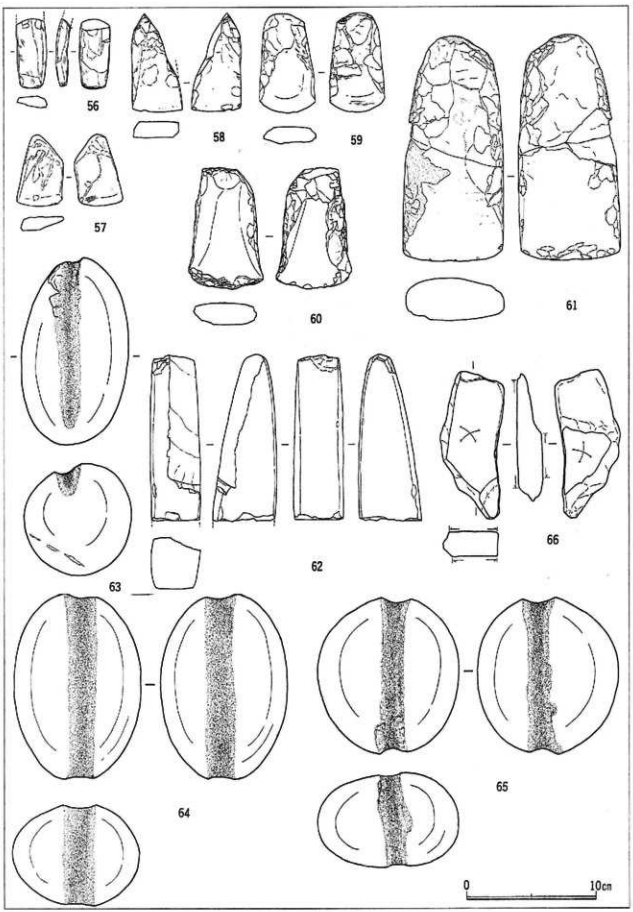
第26図　発掘区出土石器(1)



第27図　発掘区出土石器(2)



第28図　発掘区出土石器(3)



第29図　発掘区出土石器(4)

第3節　骨角器・土製品

骨角器

骨角器は28点出土した。このうち、発掘時に取り上げられたものが19点、水洗選別で抽出されたのが9点である。全般に保存状態は悪く、取り上げ時に割れてしまったものが多い。焼けたものも多かったが、これらは焼けたために残ったと考えられる。28点のうち23点の実測図を掲載し、全点の写真を掲載した。また、出土地区・層・長さ・材質等については第9表に示した。

これらの資料は完形品が少なくて破片が多く、断片的な資料である。また、これらは第3層から出土したものがほとんどである。第3層から出土した土器は鈴谷期とオホーツク文化期のものが混じっており、骨角器も両方の時期のものが混在していると思われる。従って、今回は各器種の系統などについては言及することができなかったが、この点は今後の課題としたい。

なお、この資料の材質等について国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生に御教示をいただいた。ここに感謝いたします。

1. 銛　　先（図1・2）

1はクジラ骨製で全体によく焼けており、破損している。中柄を受ける部分は閉窩式で、器体中央部ではなく片方によっており、先端に鏃を挟むためのスリットを持つ。鏃と直行する方向の索孔が斜めにあけられているが、これは片方によった中柄受けの部分に並行している。単尾で内側にかえしが作られている。2はクジラの骨を銛先の形態に整形したもので、1と同様の銛先の未製品であろう。自然の風化により、全体にかなり磨滅している。

2. 槍　　先（図7・20）

20はクジラ骨製で、側縁を削って茎部を細くし、かえしを作り出している。基部付近では断面形は長方形であるが、先端付近では楕円形に近い。全体に作りが荒く、先端も尖っていないことから、加工途中であると思われる。やや反りを持つように作られているのは、着柄のためであろう。7は土掘り具の柄の破片のようにも見えるが、着柄のためのソケット？があるので、槍先の基部破片と考えた。クジラ骨製で焼けている。

3. 釣 針 先（図3）

アザラシ類の犬歯製品である。反った犬歯の形をそのまま利用して整形し、先端近くにかえしを作っている。

4. へ　　ら（図4・19）

19は断面がかまぼこ形の棒状で、先端部をへら状に加工している。保存状態はかなり悪く、破損が著しい。4はへらの先端部の破片で、焼けている。両方ともクジラの骨製品である。

5. 針 入 れ（図6）

アホウドリ？上腕骨製の針入れの破片である。鋭利な線刻によって文様がつけられている。5本の横線の束で区画を区切り、1区画おきに斜めに線を入れている。

6. 装 飾 品（図８）

鳥類の中足骨の遠位端を切り取って整形し、刻み目を入れている。用途は不明であるが、一応装飾品とした。

7. 器 種 不 明（図５・９～17・21～24）

完形品であるが用途不明のもの・小さな破片であるために器種がわからないもの・原材を器種不明として一括した。５は雌のトドの下顎右犬歯の両側面を削り取っている。よく磨滅していて削り痕はわからない。何かの未製品かもしれない。９～13は棒状の製品の破片で、14～17は板状の製品の破片である。いずれもよく焼けている。16と17は接合しないが、出土地点も近く、形状から見て同一製品の可能性が大きい。

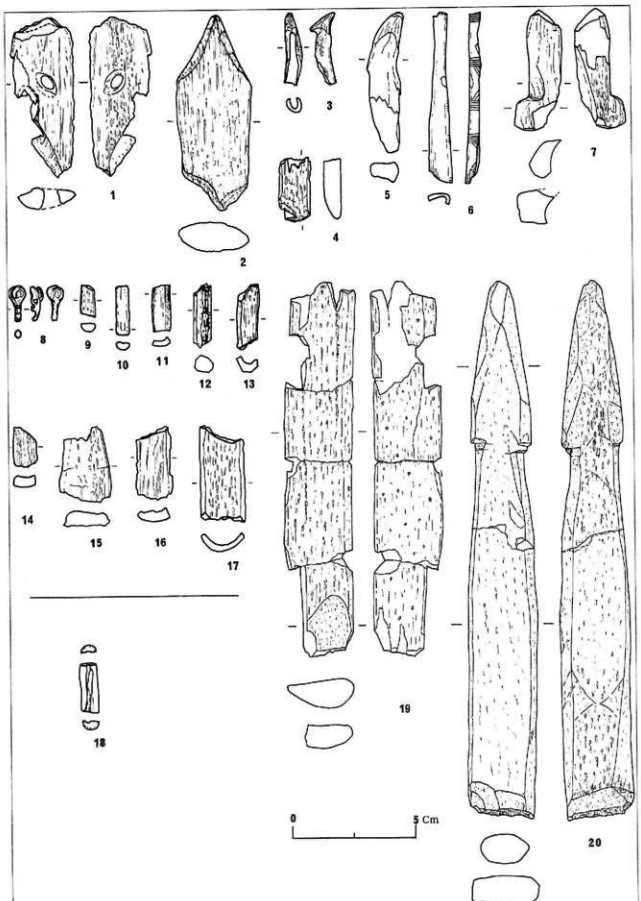
21は雄のアシカの右下顎骨を切ったものである。下顎骨の後ろ半分を釣針などに加工するために切り取った残片であろう。切り口部分は金属器で四方から削って、最後に折りとっている。22は海獣の肋骨を半裁しており、面取りが見られる。23は海獣骨の端を切り取って面取りしたものである。22・23は原材であろう。24はクジラの骨を平行四辺形で断面がかまぼこ形の板状に加工したものであり、全体によく磨滅している。

土製品（図18）

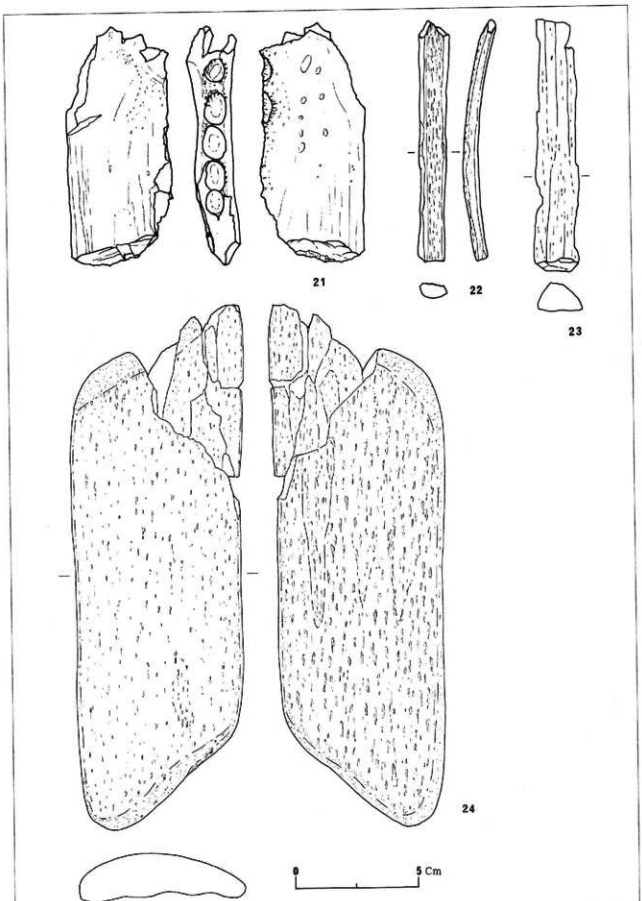
土製品の管玉が１点出土した。出土地区・層・長さ等については表10表に示した。半欠品であり、孔は貫通しているが互いに少しずれている。これは細くて先端の尖ったもので両端から孔をあけたためと考えられる。この製品は土錘である可能性もあるが、中央部が膨らまない円筒形なので、一応管玉としておく。この点については、今回の出土は１点のみであるので、類例の出土を待って改めて考えたい。

なお、金属製の管玉が１点出土したが、現在材質を分析中であり、今回の報告書には間に合わなかった。

（新美倫子）



第30図　発掘区出土骨角器(1)・土製品（約⅔）



第31図　発掘区出土骨角器(2)（約⅔）

第6章 動 物 遺 体

はじめに

利尻富士町役場遺跡から出土した動物遺体はコンテナで6箱程度であり、その内訳はおおよそ魚類が1箱、陸獣類が2箱、海獣類が3箱であった。これらは第3層から出土したものが大部分で、哺乳類は1C区や1D区で集中していたものが多い（第5・6図）。第3層からは鈴谷期とオホーツク文化期の土器が混在して出土しており、動物遺体も両方の時期のものが混じっていると思われる。動物遺体は黒土中に含まれていたため保存状態が非常に悪く、腐食して消滅したものもかなりあると推測される。今回出土した資料は、比較的骨が集中していた部分がかろうじて残ったものであり、もともとはさらに多くの動物遺体が捨てられていたのであろう。

資料の採集方法として、鳥類・哺乳類の主要な部位については発掘時に出土地点を記録して取り上げた。また魚類については、発掘時に目についたものも取り上げたが、基本的には土を水洗選別して得られた資料をもとに内容を考えることとした。水洗選別はピット内の土と魚骨ブロック（第3層中で魚骨の集中している部分）の土について2㎜目のふるいを用いて行った。魚骨ブロックは1D区の1カ所と1E区の2カ所の計3カ所をそれぞれブロックA・B・Cとして取り上げている。出土した動物種名を第11表に、出土量を第12～19表に示した。

なお、この資料の同定にあたって国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生にはご教示をいただき、現生資料を使用させていただいた。深く感謝いたします。

第1節 魚　　類（第12～14表）

魚類は種を同定した資料4,683点と大量に出土した。第12表と第13表にそれぞれ水洗選別で抽出された椎骨とそれ以外の部位の出土量を示し、第14表に発掘時に取り上げた資料の出土量を示した。なお椎骨は、サケ類を除いて1/2～2/3程度以上残っているものについて種を同定し、それ以下のものは同定不可として数量だけを数えている。サケ類では椎骨の破片を椎骨数に換算した。

椎骨数で見るとニシンが最も多く、同定可能な椎骨の41%を占めている。これに次いで多いのがホッケで34%を占め、これら2種で全体の75%に達する。ニシンは産卵群の個体と思われる大きな椎骨が多く、主に春の産卵期に接岸する個体を捕獲したと思われる。もっとも、小・中型のものも含まれており、筆者の同定した斜里町のオシャマップ川遺跡（アイヌ期）出土資料に比べるとこれらがやや多い傾向がある（註1）。ホッケは体長30㎝以上の大型の個体が主体だが、20㎝代前半程度のものもかなり見られた。これは、春に接岸する比較的若い個体群と秋の産卵期に接岸する成熟した個体群の両方を捕獲しているためと考えられる。

タラ類の骨は発掘時には非常によく目につき、3カ所の魚骨ブロックは全てタラ類主体という印象を受けた。しかし実際にはタラ類が主体となっているのはブロックBだけであり、全体の椎骨数ではニシン・ホッケに次いで7%とそれほど多くない。全長1mに達するようなきわめて大きな個体が多く、大部分がマダラであると思われる。他に椎骨ではカサゴ類・カレイ類・アイナメ類・サメ類・カジカ類・ウグイ類・サバ類・サケ類・ヒラメが出土した。カサゴ類は大型の個体が多く、カレイ類・アイナメ類は体長30㎝程度の中型の個体が多い。サメ類の椎骨ではアブラツノザメが多く見られた。ネズミザメは椎骨が3点出土しただけだが、歯は26点出ており、吻軟骨6点も見られた。サバ類の椎

骨は全点がかなり大きく、全長40㎝以上の個体のものである。サケ類はシロザケタイプの椎骨破片が見られたが、量はわずかであった。

椎骨以外の部位の出土量を見ると、カサゴ類が最も多く、次いでタラ類、ニシン、ホッケ、アイナメ類、カレイ類の順となり、椎骨数から見た出土量の順位と必ずしも一致しない。これは、おそらく頭部の各部位の堅さ等の条件による保存されやすさの違いに原因があると思われる。また少量であるが暖流系のフグ類の歯板やエイ類の尾棘も見られた。

第2節　鳥　　類（第15表）

鳥類は種を同定したものが33点と少量だった。これはもともと鳥類の骨があまり捨てられなかったのかもしれないが、骨が腐食してしまった可能性もある。アホウドリ類が13点で最も多く、他にウ類が8点、ウミガラス類が7点、アビ類が3点、カラス類とカモメ類が1点ずつ出土している。アホウドリ類は小型のタイプが多かった。ウ類ではほとんどの資料がヒメウであると思われる。ウミガラス類にはエトロフウミスズメより少し大きいタイプと少し小さいタイプが見られた。アビ類は小型の種である。

第3節　哺　乳　類（第16～19表）

陸獣類ではイヌが多く出土し、他にカラフトブタが8点、キツネとヒグマが各4点、タヌキが2点、ネズミ類が1点出土している。イヌの出土量を第16表に、他の陸獣の出土量を第17表に示した。

イヌは顎骨から見て少なくとも幼獣3個体、成獣7個体が出土している。これは可能な範囲で個体識別をした結果であるが、保存状態が悪いために個体識別ができない資料もあるので、本来の出土個体数はもう少し多いかもしれない。第16表で①～⑥・⑪・⑬の数字のついている資料は、同一数字のものが出土状況や形質から見て同一個体であることを示し、②～⑩・⑬については計測値を第20・21表に示した。全ての資料は解体され食用とされた後に捨てられたと思われ、埋葬されたものはなかった。頭部のみあるいはつながった状態の頭部と首部分のみが出土した個体が多く、頭蓋骨・顎骨の出土数に比較して四肢骨の出土は少ない。以下に番号をつけた資料について説明する。

①：幼獣の頭蓋骨。未萌出の永久歯がある。

②：成獣。頭部から前肢にかけてがほぼ一括で出土したが下顎骨はなく、近辺で出土した下顎骨は、歯の磨滅状態から見て別個体(⑧)のものであった（第5図参照）。頭蓋骨は土圧でつぶれて壊れているが、幅は比較的広く、上顎歯の磨滅はない。現代紀州犬と比べて第1頚椎・第2頚椎はひとまわり大きく、四肢骨はやや太い。右上腕骨の長さは150.0㎜＋である。

③：成獣の頭蓋骨＋左右下顎骨＋第1・第2頚椎。頭蓋骨は土圧でつぶれゆがんでいるが、顔面の幅は広く、吻部は短くすぼまる。下顎骨では第2前臼歯と第3後臼歯が抜けて、歯槽が埋まっている。下顎底は丸いが、下顎の高さは比較的平行である。歯は少し磨滅している。第1頚椎は現代紀州犬よりも少し大きい。

④：成獣の頭蓋骨＋左下顎骨。吻部は細いが上顎骨後半部の左右の幅は広い。下顎の高さは比較的平行で、第1・第2前臼歯は脱落し歯槽が埋まっている。歯列は現代紀州犬よりもやや湾曲が強く、歯は磨滅している。

⑤：成獣の頭蓋骨＋右下顎骨。本来頭蓋骨全体があったと思われるが、右上顎骨は検出されなかった。吻部は短く、幅広で高い。頭蓋骨の幅も広い。矢状稜は発達し、歯は磨滅している。下顎骨は細かい破片となった犬歯部分が出土した。

⑥：成獣の頭蓋骨。右上顎骨は失われているが、本来は頭蓋骨全体があったと思われる。矢状稜は発達し、歯は磨滅している。

⑦：成獣の左下顎骨。保存状態が非常に悪く、計測不能の部分が多い。歯列の湾曲は現代紀州犬程度である。

⑧：成獣の右下顎骨。歯はかなり磨滅している。下顎底は丸いが、下顎の高さは比較的平行で骨体は厚い。歯列の湾曲は現代紀州犬よりやや強い。

⑨：成獣の右下顎骨。保存状態が非常に悪い。第２前臼歯と第３後臼歯は脱落し、歯槽が埋まっている。歯列の湾曲は強い。下顎の高さは第１後臼歯と第２後臼歯の間で最も高く、前方ではかなり低い。

⑩：成獣の右下顎骨。残存しているのは第１前臼歯部分から第１後臼歯部分までであり、歯列の湾曲は強い。

⑪：成獣の第１頸椎～第３頸椎が連なって出土した。３点とも現代紀州犬よりひとまわり大きい。

⑫：成獣の左脛骨。完存で、長さは168.8㎜。湾曲は比較的弱い。

⑬：成獣の頭蓋骨＋左右下顎骨。頭蓋骨は取り上げる際に粉々に壊れてしまい、計測は不能。頭頂部の縫合は完全には癒着していない。下顎底はやや丸いが、下顎の高さは比較的平行である。

なお、イヌの形質については保存状態が悪いので詳細なことはわからない。けれども、頭蓋骨が大きくて高さがあり幅が広いこと、下顎骨は骨体が厚く下顎底が丸いことなど、少なくとも本州の縄文犬とはかなり異なっており、礼文島の香深井Ａ遺跡で出土しているオホーツク犬に類似する（西本1981）。

カラフトブタは幼獣の下顎骨１点、若獣の下顎骨１点と遊離歯が出土している。若獣下顎骨は雌のもので、第３後臼歯が萌出を始めたところであり、骨体が全体に厚い。ヒグマは中手・中足骨と指の骨が出ており、４点中３点が焼けていた。ヒグマは利尻島に自然生息していないので、これらは他の場所から持ち込まれたと考えられる。

海獣類は総破片数4,347点と多量に出土したが、このうち2,206点はクジラ類で、そのほとんどは長さ３㎝ほどの焼けた小骨片であった。種と部位を同定できた資料は95点であり、この中ではアシカの雄が37点と最も多く、オットセイの雄も比較的多い。保存状態が悪いためにどちらとは決定できないがアシカ雄またはトド雌と考えられる資料も５点あることから、アシカ雄は実際にはさらに多くなるであろう。アシカ雄の資料の年齢を見ると、若獣と亜成獣のものが１点ずつある他は全て成獣であり、幼獣は含まれていなかった。また、ピット８からは肩甲骨１点・尺骨１点・腓骨４点の計６点が一括して出土し、そのうち３点は焼けていた。アシカの雌については、アシカ雌またはオットセイ雌と思われる踵骨が１点出ているだけである。

オットセイは21点出土し、このうち雄が18点と多く、雌は３点と少ない。雄では若獣の頭蓋骨・下顎骨・第１頸椎・第２頸椎が連なった状態で一括出土した例が見られた。雌雄共に幼獣は含まれず、全ての資料が若獣～成獣個体であった。トドは雄８点、雌７点、雌雄不明１点が出土し、成獣が多いが幼獣も２点見られた。アザラシ類は２点と少なく、イルカ類も椎骨５点と頭蓋骨・下顎骨等の破片が少量見られただけであった。クジラ類は破片数は多いが、個体数は少ない。特に第３層では破片の

大部分が1カ所から集中して出ており、もともと同一の破片が細かく割れたものと考えられる。表土から出土した右上腕骨はツチクジラ・ミンククジラ程度の大きさの個体であった。

ま と め

以上、利尻富士町役場遺跡出土の動物遺体について述べてきたが、この資料の特徴は以下のようにまとめることができる。

魚類はニシン・ホッケといった季節的に大群をなして接岸する種が大部分を占めており、主に接岸した個体群を対象とした漁労活動が行われていたと考えられる。このような季節的集中度の高い漁労活動は、近辺のオホーツク文化期の遺跡である利尻島の亦稚貝塚や礼文島の香深井A遺跡でも行われている（西本1978、西本1981）。これは、同じニシンが主体となる場合にも、回遊性の大型個体ではなく沿岸に通年生息する小型・中型個体を主な対象とする縄文文化期の漁労活動とは大きく異なっている（西本1990、新美1992）。海獣類はアシカの雄とオットセイの雄が多い。亦稚貝塚と香深井A遺跡出土の海獣類は、オットセイの雄が主体であるが、亦稚貝塚ではアシカも比較的多いらしい（西本1978、西本1981）。また、陸獣ではイヌが多く出土し、イヌとカラフトブタを家畜として飼育し食用としていたと思われる。

この資料は先にも述べたように鈴谷期のものとオホーツク文化期のものが混在しているが、以上の点から見てオホーツク文化期の亦稚貝塚や香深井A遺跡出土の動物遺体とよく似た特徴を持つと言えるだろう。

（新美倫子）

註1　現在報告書印刷中

〈引用・参考文献〉

斉藤弘吉	1963『犬科動物骨格計測法』斉藤弘吉刊	
新美倫子	1992「コタン温泉遺跡の魚類」『コタン温泉遺跡』八雲町教育委員会	448－457頁
西本豊弘	1978「動物遺存体」『亦稚貝塚』利尻町教育委員会	81－97頁
西本豊弘	1981「動物遺存体について」『香深井遺跡　下』東京大学出版会	402－452頁
西本豊弘	1990「茶津貝塚の動物遺体」『茶津貝塚』北海道文化財研究所	186－203頁

第11表　出土動物種名

Ⅰ 魚　　類
1. エ　イ　類
2. ホホジロザメ
3. ネズミザメ
4. アオザメ
5. アブラツノザメ
6. ニ　シ　ン
7. サ　ケ　類
8. ウグイ類
9. サ　バ　類
10. フ　グ　類
11. カサゴ類
12. アイナメ類
13. ホ　ッ　ケ
14. カジカ類
15. ヒ　ラ　メ
16. カレイ類
17. マ　ダ　ラ
18. タ　ラ　類

Ⅱ 鳥　　類
1. ウミガラス類
2. カモメ類
3. アビ類
4. アホウドリ類
5. ウ　　類
6. カラス類

Ⅲ 哺乳類
1. ネズミ類
2. エゾヒグマ
3. エゾタヌキ
4. キタキツネ
5. ニホンアシカ
6. トド
7. オットセイ
8. フイリアザラシ
9. アザラシ類
10. イルカ類
11. クジラ類
12. イ　　ヌ
13. カラフトブタ

第12表　水洗選別魚類出土量（椎骨）

遺　構	ニシン	ホッケ	タラ類	カサゴ類	カレイ類	アイナメ類	サメ類	カジカ類	ウグイ類	サバ類	サケ類	ヒラメ	種不明	同定不可
Pit 1	209	31	25	6	9	8	①20 ②1.③1		3	2	+		30	176
Pit 2	1	5	1	1										5
Pit 3	411	232	31	12	21	6	①1	7	2		2		36	91
Pit 4	410	219	95	5	34	9	①11	1	1		2		27	260
Pit 5	13	46	1	3	9	3	①3		1		+		10	92
Pit 7	6	6		4	2	1		1					3	24
Pit 9	5	2	2	2	6									6
Pit10	1													15
Pit11	4	22	1	1		1					+		3	69
ブロックA	295	781	40	180	56	40		8	4	14	+	1	51	927
ブロックB	40	12	127	3	1	7	①1	1			+		18	446
ブロックC	409	132	7	13	32	7	①14 ②2	4	9				39	305
合　計	1,804	1,488	330	230	179	82	54	22	20	16	4	1	217 /437	2,416

註　①：アブラツノザメ、②：ネズミザメ、③：アオザメ。＋：ごく少量出土。

第13表　水洗選別魚類出土量（椎骨以外）

遺　構	カサゴ類	タ ラ 類	ニシン	ホ ッ ケ	サメ類	アイナメ類	カレイ類	そ の 他
Pit 1	pmaxL1、R1 dent R 1 art R 1 qu R 1	maxR 1	耳石14		①歯 5	qu R 1	pmaxL 1	フグ類歯板 4
Pit 3	pmaxL 1 maxL 1 dent L 1 、R 1 art L 1 qu L 2 、R 3 pop R 1 op R 1	pmaxL 1 op L 1	耳石 2	pmax L 2 maxR 2 dent L 2 、R 1 art R 1 鋤骨 1		pmaxL1、R1 maxL 1 qu L 1	pmaxL 1 art R 1 pop R 1	カジカ類 dent R 2
Pit 4	pmaxL 1 dent L2、R1 qu L 1	pmaxL 1 maxR 1 dent L1、R1 art R 1 鋤骨 1	耳石28	maxL1、R1 art L 2 qu R 1 鋤骨 1	①歯 1	dent R 1 qu L 1 op L 1 鋤骨 1		
Pit 5			耳石 2	art R 1	①椎 1			
Pit 7	pmaxL 1 dent L 1		耳石 3		①歯 1			
Pit 9	dent L 1	pmaxL 1	耳石 1			qu L 1	qu L 1	ヒラメ qu L 1
Pit 10					②歯 1	op L 1		
Pit 11	dent L 1	鋤骨 1		art R 1	①歯 2	qu L 1		
ブロックA	pmaxL10、R9 maxL4、R4 dent L9、R5 art L4、R1 qu L9、R5 pop L1、R1 op R 3 鋤骨 5	pmaxL6、R4 maxL4、R2 dent L2、R1 art R 5 qu L2、R3 鋤骨 3	耳石 8	pmaxR1 maxL3、R2 dent L2、R2	①歯 2	art R 1 qu L 1	dent L 1 qu L 1 鋤骨 1	フグ類歯板 1 ヒラメart L 1 エイ類尾棘 1
ブロックB	pmaxR 1 maxL1、R2 pop R 1 op R 1	pmaxL12、R8 maxL1、R4 dent L5、R11 art L 3 、R 2 qu L 7 、R 1 op L 1 、R 2 鋤骨 7			①歯 5	maxL 1 qu L 1		フグ類歯板 1 カジカ類 pmaxR 1
ブロックC	pmaxL2、R2 dent L 1 、R 3 art L 1		耳石29	maxL 1	①歯 8 吻軟骨 1	qu L 1	pmaxR 1 qu L 1	
合　計	111	107	87	28	27	17	10	12／399

註　pmax：前上顎骨、max:上顎骨、dent:歯骨、art:関節骨、qu:方骨、pop:前鰓蓋骨、op:鰓蓋骨、L:左、R:右。
①：ネズミザメ、②：ホホジロザメ。

第14表　発掘時取り上げ魚類出土量

層　位	種・部位・量
表　土	タラ類 pmaxL 1、R 2 artL 1、ve17 カサゴ類 ve 3
第 2 層	ネズミザメ　吻軟骨 1
第 3 層	タラ類 artL 1、ve20 ネズミザメ歯 1、吻軟骨 4、ve 4 ツノザメ類 ve 2 アオザメ類 ve 1 カサゴ類 dentL 1、ve 2
第3層下面	タラ類 ve 1、ホホジロザメ歯 1 ネズミザメ ve 1
合　計	64

註　pmax：前上顎骨、dent:歯骨、art：関節骨、ve:椎骨。
L：左、R:右。

第15表　鳥類出土量

遺構・層位	アホウドリ類	ウ　類	ウミガラス類	ア　ビ　類	そ　の　他
表　土		FemR 1 MtL 1	HumL上 1		種不明トリ仙椎 1 肋骨 1、fr 1
Pit 1	HumR上 1 UlL上 1				種不明トリfr 6
Pit 2					種不明トリve 1、fr 4
Pit 3			TibL 1		
Pit 5					種不明トリfr 1
Pit 10			HumR上 1 Ul 1		種不明トリfr 2
Pit 11	UlL下 1				
ブロックA	HumL上 1				種不明トリfr 8
ブロックB	FemL上 - 中 1	UlL中 1 McR下 1 MtL 1	MtL下 1	HumL上 1 CorL上 1	種不明トリ指骨 3 ve 1、fr 5
ブロックC		MtL 1	HumR下 1		種不明トリfr 6
第 3 層	HumL上 1 UlL下 2 McL中 1 CorL 1 ve 3	HumL下 1 FemR上 - 中 1	TibL上 1	仙椎 1	カラス類 CorR 1 カモメ類 RadR下 1 種不明トリ仙椎 1 指骨 1、fr10
第3層下面					種不明トリfr 1
合　計	13	8	7	3	54

註　Hum：上腕骨、Rad:橈骨、Ul:尺骨、Mc:中手骨、Cor:烏口骨、Fem:大腿骨、Tib:脛骨、Mt:中足骨、ve:椎骨、fr:破片。
L:左、R:右。上：近位端、中：中間部、下：遠位端、上・中・下のないものは完存。

第16表　イヌ出土量

遺構・層位	頭　蓋　骨	上　顎　骨	下　顎　骨	四　肢　骨　・　椎　骨　・　そ　の　他
表　土				Ul R 1
Pit 1	前頭骨　R 1			Pel R 1
Pit10		L(m^3x)幼		
ブロックA				Atl fr 1
ブロックB	fr 1 個体分①	L($i^{123}cm^{123}$)幼① R($i^{123}cm^{123}$)幼① R(m^3)幼		 ve 3
第　3　層	fr 1 個体分② fr 1 個体分③ fr 1 個体分④ 前半分L＋ 後半分LR⑤ 頭頂骨＋側頭骨 ＋後頭骨LR⑥	L(x x P^4M^1x)② R(x x x x P^4M^{12})② L($I^{123}CP^{1234}M^1$x)③ R($I^{123}CP^{1234}M^1$x)③ L(x x x x x $P^{34}M^1$x)④ R(x x x x x $P^{34}M^1$x)④ L(I^2C x $P^{234}M^1$x)⑤ L($P^{34}M^{12}$)⑥ L(m^{23})幼 R(x $P^{34}M^{12}$)	 L($I_{123}CP_1\times P_{34}M_{12}$x)③ R($I_{123}CP_1\times P_{34}M_{12}$x)③ L(x x x $P_{34}M_{12}$x)④ R(x)⑤ R(x x x x x x x)幼 L($I_{123}CP_{1234}M_{12}$x)⑦ R(x x x $P_{34}M_{12}$x)⑧ R(x x x x x x x x x x x)⑨ R(x x x x)⑩ LI_2	{Atl 1、Axi 1、Sca L 1、Hum L 1、R 1 Rad L 1、Ul L 1、Met 8、Ph 8、ve 11、rib 15}② {Atl 1、Axi fr 1}③ {Atl 1、Axi 1、ve 1}① Atl 半欠1、Tib L1②、Tib L中1 Pel(腸＋恥)L 1、Pel(座)L 1、Met 3 ve 2、Ph 1、fr 4
第3層下面	fr 1 個体分⑫ fr 2	L($I^{123}CP^{1234}M^{12}$)⑬ R($I^{123}CP^{1234}M^{12}$)⑬	L($I_{123}CP_{1234}M_{123}$)⑬ R($I_{123}CP_{1234}M_{123}$)⑬	
合　計	10	16	12	75

註　Atl：第1頸椎、Axi：第2頸椎、Sca：肩甲骨、Hum：上腕骨、Rad：橈骨、Ul：尺骨、Pel：寛骨、腸：腸骨部分、座：座骨部分、恥：恥骨部分、Tib：脛骨、Met：中手or中足骨、ve：椎骨、rib：肋骨、Ph：指骨、fr：破片。I：切歯、C：犬歯、P：前臼歯、M：後臼歯、大文字は永久歯、小文字は乳歯を表し、数字は歯の順番を示す。
（ ）は骨体があることを示し、Xは脱落した歯を示す。L：左、R：右、中：中間部。中・半欠等のないものは、ほぼ完存。幼：幼獣、幼のないものは成獣。
①～⑥・⑪～⑬：同じ数字のついている資料は、それぞれ同一個体であることを示す。②～⑩・⑫・⑬については計測値を表20・21及び本文中に示す。

第17表　陸獣類出土量（イヌ以外）

遺構・層位	種　・　部　位
第　2　層	LM 焼fr 2
Pit 1	ブタ I^1L 1、歯fr 2、ネズミ類 mand L 1、LM fr 1
Pit 3	キツネ？ ve 1
Pit 4	LM fr 1
Pit 5	LM fr 3
Pit11	ブタ 歯fr 1
ブロックA	キツネ max L(x x)、LM fr 3
ブロックB	キツネ Fem L下1、LM fr 1、焼fr 2
ブロックC	クマ末節骨 1
第　3　層	ブタ R〔$P^3P^4M^1$〕、mand L(x x x x x x x $P_4M_{1\cdot2}$)若♀、mand R(x x x) 幼、歯fr 1 クマ Mct 1 焼、基節骨 1 焼、下 1 焼、タヌキ Sca R 2 キツネ mand L 1、中小LM指骨 2 焼、LM fr 7、焼fr 3
合　　計	44

註　LM：種不明陸獣、max：上顎骨、mand：下顎骨、Sca：肩甲骨、Fem：大腿骨、Mct：中手or中足骨、ve：椎骨、fr：破片。
I：切歯、P：前臼歯、M：後臼歯、数字は歯の順番を示し、○付の数字は現出途中であることを示す。
（　）は骨体があることを示し、〔　〕は骨体はないが、同一個体であることを示す。Xは脱落した歯を示す。
L：左、R：右。幼：幼獣、若：若獣、幼・若のないものは成獣。下：遠位端、下のない数字は完存。

第18表　遺構内海獣類出土量

遺　構	アシカ	オットセイ	トド	クジラ類	種不明海獣
Pit 1					fr 30
Pit 2		♀Tib R 1若		焼fr 1	fr 15、焼fr 20
Pit 3				焼fr 10	Ph 1、fr 21 焼fr 11
Pit 4					rib 1、fr 57 焼fr 11
Pit 5					rib 2、Ph 1 fr 64、焼fr 85
Pit 7					焼歯 fr 1 fr 10、焼fr 48
Pit 8	♂Sca L 1焼 Ul R 1 Tib L 1焼、R 3(うち1は焼) アシカ♂or トド♀ Hum L 下1焼	♂Hum R 1焼	♂Ul R 1焼	rib 1	ve 1、rib 1 fr 3
Pit 9					ve 1
Pit10		♂Hum L 1			Ph 1、fr 35 焼fr 28
Pit11					fr 30、焼fr 21
Pit18		♂Tib R中1			
ブロックA				焼fr 150	fr 65、焼fr 60
ブロックB		♂Sca R 1			ve 1、rib 1 fr 102、焼fr 81
ブロックC			♂下顎関節突起R 1		fr 23、焼fr 10
合　計	7	5	2	162	842

註　Sca：肩甲骨、Hum：上腕骨、Ul：尺骨、Tib：脛骨、ve：椎骨、rib：肋骨、Ph：指骨、fr：破片。
L：左、R：右。中：中間部、下：遠位端、中・下のない数字は完存。若・若獣、若のない数字は成獣。

第19表　遺構外海獣類出土量

層　位	アシカ♂	オットセイ	トド	その他の鰭脚類	イルカ類	クジラ類	種不明海獣
表　土	Fem L下1(病変)	♂Pel(腸)R 1		フイリアザラシ Hum L中1	ve 1	Hum R 1 ve 1 fr 5 焼fr 8	頬歯1、Mct 1 ve 2、rib 7 Ph 2、fr 83 焼fr 27
第 2 層	Hum R 1 Fem R上1				ve 1	焼fr 6	rib 2、Ph 2 fr 42、焼fr 8
第 3 層	側頭骨 L 1、R 1 蝶骨 R 1、切歯骨 L 1 矢状稜 fr 1 mand L 2、R 1 Axi 1 Sca L 2、R 1若 Hum L上～中1 R 1亜、中～下1 Rad L 2、上～中1 R中1 Ul L 1、R 1 Pel L 1 Fem L 1、R下1 Tib L 1、上～中1 下1	♂ sk 1 mand L 1、R 1 Atl 1 Axi 1 Atl 1 Sca R 1 Hum L中～下1若 R上1、中2 ♀ Ul R 1若 ♂ Tib L 1亜 ♀ Tib L 1 ♂ Ast R 1 （同一・若）	♂ 側頭骨 R1 mand L 1亜、R 1 ♀ Hum L中～下1 Rad L上1、 中～下1幼 ? Rad R 1幼 ♀ Ul L 1 Pel(腸)R 1 Fem L中～下1 ♂ Ast R 1	アシカ♂orトド♀ Hum L1、R1、上1 Ul R 1若 アシカ類 Hum L中1 アシカ♀orオットセイ♀ Cal L 1 アザラシ類 Sca L 1若 ? Sca L 1	sk fr 1 鼓骨 1 mand fr 1 ve 2 fr 4	Sca R 1 fr 67 焼fr 1953	Mct 1、ve 31 胸骨 2、rib 53 Ph 40、fr 744 焼fr 135
第3層下面	Pel(座)L 1		♂Hum L中1 Pel L 1		ve 1	fr 2	ve 2、rib 3 Ph 3、fr 6 焼fr 7
合　計	31	16	13	9	12	2044	1204

註　sk：頭蓋骨、mand：下顎骨、Atl：第1頸椎、Axi：第2頸椎、Sca：肩甲骨、Hum：上腕骨、Rad：橈骨、Ul：尺骨、Pel：寛骨、腸：腸骨部分、座：座骨部分、Fem：大腿骨、Tib：脛骨、Ca f：踵骨、Ast：距骨、Mct：中手or中足骨、ve：椎骨、rib：肋骨、Ph：指骨、fr：破片。
L：左、R：右。上：近位端、中：中間部、下：遠位端、上・中・下のない数字は完存。
幼：幼獣、若：若獣、亜：亜成獣、幼・若・亜のない数字は成獣。

第20表　イヌ頭蓋骨・上顎骨計測値

No. / 計測場所	②	③	④	⑤	⑥
最大頭蓋長	－	174.0±	－	178.5±	－
基底頭蓋長	－	143.1±	158.3	－	－
前　頭　幅	－	－	－	51.8±	－
M^1外側での上顎骨幅	62.8±	58.4±	59.6	－	－
P^4歯冠長	19.4	18.4	18.4	－	18.5±

註　計測法は斉藤(1963)に準拠した。
P^4：第4前臼歯、M^1：第1後臼歯。数値の単位はmm、－は計測不能、±は推定値を示す。

第21表　イヌ下顎骨計測値

No. / 計測場所	③	④	⑦	⑧	⑨	⑩	⑬
M_1 M_2中間部での高さ	23.9	23.7	－	27.6	25.5	－	21.7
M_1中央部での高さ	22.8	25.0	－	28.8	24.9	23.7	20.6
P_3中央部での高さ	19.4	20.0	26.3	25.8	18.7	－	16.2
M_2中央部での厚さ	10.7	9.9	－	13.6±	10.1	－	9.1
M_1中央部での厚さ	11.7	11.0	－	14.3	11.1	11.4	10.2
P_3中央部での厚さ	9.8	9.3	11.1	13.5	9.9	－	8.4
M_1　歯　冠　長	－	19.8	－	20.7±	－	－	20.8

註　計測法は斉藤(1963)、西本(1981)に準拠した。
P_3：第3前臼歯、M_1：第1後臼歯、M_2：第2後臼歯。数値の単位はmm、－は計測不能、±は推定値を示す。計測は原則的に左下顎骨の外側で行い、左下顎骨のない場合は右下顎骨の外側で行った。

第7章　魚骨層から出土した植物遺体

1. 試料

ここで取り扱ったのは利尻富士町で行われた発掘調査の際、Ⅰ－Dベルトの魚骨層から採取された土壌試料中から得られた試料である。土壌試料はフローテーション作業が行われており、メッシュを通して得られた浮遊物の選別を行った。

魚骨層からは、サハリン南部から北海道北部を主な分布域とした縄線文と円形刺突文が施された、鈴谷式土器が出土しており、鈴谷期に形成されたものと考えられている。

選別にあたって2㎜メッシュと0.42㎜メッシュを使用して再度篩分けを行った後、実体顕微鏡下で植物遺体の抽出・同定作業を行った。

各試料中に含まれていた炭化物は少なく、魚骨、獣骨片、ウニの刺などの量の方が多いものであった。

2. 各試料から検出された植物遺体

各試料からは下記の植物遺体を抽出・同定することができた。

試料№1　Ⅰ－Dベルト　魚骨サンプルA
- ヤマブドウ（Vitis coignetiae pulliat）種子　1点
- キ　ハ　ダ（Phellodendron amurense）種子　1点
- マ　メ　科（Leguminosae）種子　1点
- エゾニワトコ（Sambucus sieboldiana vsr.miqulii Hara）種子1点
- 不明種子　1点

試料№2　Ⅰ－Dベルト　魚骨サンプルA
- オニグルミ（Juglans ailanthifolia Carr.）核片　2点
- マヤブトウ種子　1点
- マタタビ属（Actinidia sp.）種子　1点
- タ　デ　属（Polygonum Sp.）そう果　1点
- ウルシ属（Rhus sp.）種子　1点

試料№3　Ⅰ－Dベルト　魚骨サンプルA
- ヤマブドウ種子　1点
- ウルシ属種子　1点
- アカザ属種子（Chenopodium sp.）
- 不明種子　1点

3点の試料中から検出されたのはオニグルミの核片、ヤマブドウ、キハダ、マタタビ属、アカザ属、ウルシ属、エゾニワトコの種子とタデ属種子、2種類の不明種子である。

3. 利用された植物について

鈴谷式土器を続縄文とするかオホーツク文化とするかについては、議論があろうが時間的には続縄文時代の中におさまる年代であろう。北海道北部の続縄文時代の遺跡から可食植物遺体が出土したのはこれが初めての例である。

オニグルミは脂肪に富んだ子葉が生食できる堅果で、子葉を包む核（殻）・核片は縄文時代早期から出土しており、多くの堅果の中で最も良く利用されている。殻は堅くタンニンが含まれていることから腐敗しにくく、炭化したことによってさらに残存し易くなっている。アイヌ民族の利用例によると（知里　1953）炉の周辺に置いて火であぶって、縫合線から殻が割れ易くなってからこじ開けて食べている。この際に強い熱を受けた部分が炭化して残存し易くなると考えられる。遺跡から最もおおく出土しているのは、子葉を取り出すために割った際に生じた核片で、食後にまとめて廃棄されたのであろう。

ヤマブドウ、キハダ、マタタビ属の種子も縄文時代早期から利用されているものである。出土した種子は果実を食べた際の残滓と考えられる。しかし、いずれも炭化した状態で出土しており、食用する以前になんらかの熱を受けたため、食べることなく廃棄された可能性がある。なお、マタタビ属にはマタタビ（A.polygama Maxim.）とサルナシ（A.arguta Planch.,Miq.）があるが、種子の形態が類似していることから区別せずにマタタビ属として扱った。

ウルシ属の種子は食用となったものか、他の目的で採取されたものかは不明である。ただ、これまでに縄文時代から擦文時代までのいくつかの遺跡からその種子が発見されており、生活の中でなんらかの目的で使用された可能性がある。

エゾニワトコの種子は未炭化で、おそらく魚骨層周辺に点在していた樹木から、果実や種子が飛散して魚骨層中に入り込んだものと考えられる。果実中には青酸体が含まれているが、発酵されて青酸体を分解すれば食用可能である。知里（1953）によったアイヌ民族による利用例もあり、炭化したものについては注意を払わなければならない。

タデ属そう果やアカザ属種子が出土しているが、いずれも未炭化である。タデ属やアカザ属の植物は人里雑草として集落周辺の荒れ地などに主に分布するもので、魚骨等が廃棄された場所付近に分布していたと考えられる。ただ、知里（1953）によってはこれらの植物のそう果や種子を炒ったり、搗いたりして食用とされていたことが記載されており、炭化したこれらの種子についても注意しなければならない。

マメ科種子についてはハギ属（Lespedeza sp.）に類似した形態をもつもので、周辺に分布したものから飛散したものと考えられる。

破損して同定ができなかった2種類の不明な種子があるが、1点はアサダ（Ostrya japonica）の未端部に類似したものである。

以上、出土した堅果・種子について述べたが、ここでは栽培植物の種子を発見することができなかった。道央部の続縄文時代の遺跡では北方系作物群を構成するゴボウ、アサなどの栽培種子が発見されている（矢野　1981））。これらの栽培種は鈴谷式土器等が南下した際に共に、サハリンを経由して北海道へ伝播してきた可能性が強いものであることから、鈴谷式土器が出土した当遺跡からその痕跡が発見できないかとの期待をもっていた。栽培植物は発見されなかったが、9種類の植物が確認できたことは、これまで植物利用の実体が不明であった道北地方でも他の地域と同様に植物が利用されていたことが確認でき、それなりの成果をあげたものと考えられる。このような小さな努力の積み重ねが新しい発見につながるのである。

これまで、穀物とは無縁とされてきたオホーツク文化の遺跡で、住居内部の土壌中からオオムギ、キビ、アワなどの発見が相次いでいる。これは、従来の発掘方法だけではなし得ない、住居内の床全面から採取した1トン以上の土壌を気長にフローテーション作業を行った結果によって得られたものである。そういった意味でも、今回だけではなく、今後もこのような作業を続けてほしいものである。

（北海道開拓記念館　山田悟郎）

第8章 ま と め

利尻富士町役場遺跡の今回の調査において得られた資料から、成果と課題をまとめた。

本遺跡の包含層の主体をなすのは第3層すなわち黒色土2層である。第3層からは遺構である小ピット群といわゆる鈴谷式土器、オホーツク式土器の土器群、石鏃とナイフを主体とする石器群、季節的に大群をなして接岸するニシン、ホッケといった魚類やアシカ、オットセイの海獣などの動物遺体群、さらには植物遺体などの遺物を得ることができた。

それぞれの遺物の詳細な報告はそれぞれの章において記述されているが、ここではそれら遺物全体を通じて利尻富士町役場跡遺跡を概観してみたい。

まず、遺構では小ピット16基と皿状のくぼみに礫が見られる配石遺構2基が検出された。小ピット群は第3層中の下位に多くあった。ピットには鈴谷式土器が多く含まれているが、一部オホーツク式土器を含むピットがあることから直ちにこれらピット群を鈴谷式土器に伴うものと断定できない。しかしながら、これらピット群が第3層中において位置するレベルやピット内の土器は鈴谷式土器が主体となることから、オホーツク式土器の問題を含みながらもここでは鈴谷式土器に伴うものとして理解しておきたい。これら小ピット群が鈴谷式土器に伴うものであるとするならば、ピット内から出土した動物遺体は鈴谷期のものとしては初めての出土例となる。これまでのオンコロマナイ遺跡や香深井B遺跡の発掘調査において動物遺体を伴う遺構が出土していないことから鈴谷期の文化論が展開されなかったことを考えるならば、本遺跡での出土例は今後の鈴谷式期の文化を考えるうえで極めて大きな手がかりとなるものであろう。

さらに、これら小ピット群は小さなゴミ穴であると考えているが、そうであるとするならば、本遺跡全体の広がりにおいてこれら小ピット群が位置する地点よりも、さらに標高の高い地点に居住空間が営まれたと考えられる。つまり、ゴミは低いところから高いところへ棄てるものでなく、高いところから低いところへ棄てることがごく自然なことであるから、本遺跡において営まれた住居が恒常的であるか一時的なキャンプ地であるかどうかは別問題にしても、住居などの居住空間は小ピット群よりもさらに標高の高いところに営まれたことが容易に推測される。しかし、住居址の存在は、本遺跡が単に捕獲採集した動物類の解体跡の残骸を廃棄したゴミ捨て場や食糧の生産加工の場として存在したのか、あるいは相当の恒常性をもった集落としての性格をもつ遺跡であったのかを判断する重要な決め手となるので、本遺跡は今後も注視されなければならない。

次に遺物について考察を加えたい。まず、第3層からはいわゆる鈴谷式土器とオホーツク式土器が出土する。発掘調査中において明確な分層ができないにもかかわらず、いわゆる鈴谷式土器とオホーツク式土器が混在することの事実をどう理解するかで苦慮していた。しかしながら第3層中の全てにおいて均質に両者が混在するのではなく、レベルが下がるにつれてオホーツク式土器が少なくなり、いわゆる鈴谷式土器が多くなる傾向にあった。

土器の分類はすでに本文中で述べているが、なかでも定義をめぐって様々な見解がある鈴谷式土器を縄線文と縄文を有する土器、縄文のみを有する土器も鈴谷式土器に含めて考えた。鈴谷式土器として一括したこれら土器類は香深井B遺跡の第Ⅲ群土器A・B類、C類に相当し、香深井遺跡の報告者はそれぞれ遠淵式土器、仮称メクマ式土器に対比し鈴谷式土器に包括すべきではないとしている〔菊池1981〕。しかしながら、オンコロマナイ遺跡1～3号竪穴床面や香深井B遺跡2号竪穴埋土・床面、3号竪穴埋土、本遺跡第3層中においてこれら文様要素を持つ土器群の出土状況からはむしろカテゴリーとして一つのまとまりであると考えられはしないだろうか。したがってここでは、あえて概念規

定が今一つ曖昧な遠淵式や仮称メクマ式の別型式を設定するよりは、北海道北部地域における鈴谷式土器の一つのまとまりとして理解しておくことが妥当であると判断した。また、本遺跡における鈴谷式土器の底部形態は尖底が少なく平底が多い点において香深井B遺跡により近く、どちらかというと単純な縄線文や胴部縄文が多い文様パターンはオンコロマナイ遺跡に近い位置関係にあると思われる。こういったことが時間差なのかあるいは地域的な差と据えるかは今後の課題としておきたい。また、第3層下位の同レベルで出土した2個の鈴谷式土器（図290・291）は様々な点において興味深いものである。器形文様において本遺跡の他の鈴谷式土器とは異なる点があるが、第3層の最も深いレベルでの出土は本遺跡における鈴谷式土器の古いタイプとして考えられる。これらが本遺跡のその後のいわゆる鈴谷式土器との関係については、今後なお時間をかけて解明されなければならない。

石器では石鏃とナイフの出土数が多いことが特徴としてあげられる。しかも石鏃は基部が非常に薄く作られ、華奢な感じを受ける。このような石鏃が多いことの理由として、本遺跡において小型動物、特に鳥類を捕獲していたと考えられるが、しかし、動物遺体の出土状態において必ずしも鳥類が多いわけではない。動物遺体の章でも触れているように、鳥類の骨が生活生産用具作成のために利用される、もともとあまり捨てられなかったか、あるいは腐食してしまった可能性もあり、今後の課題である。また、本遺跡の石器組成においてナイフ類がずば抜けて多いことは、調査区域が海獣類・魚類の解体後の残骸廃棄場所であったことによるが、石器組成におけるこのような特徴は、本遺跡の性格を考えるうえで極めて重要なことである。このような特徴をもつ石器とその組成がはたして鈴谷期の特徴であるのかどうか直ちに断定はできないが、石器の大部分が本遺跡の主体をなす第3層から出土したものであることを考えるならば、少なくとも本遺跡における鈴谷期の石器組成の特徴を示唆するものとして注意しておきたい。

骨角器では少ない点数から特徴を見いだすことができなかった。

動物遺体では全体的に見てオホーツク文化期の亦稚貝塚や香深井A遺跡とほぼ同様の特徴を見いだすことができた。しかし、個々の出土状態からはいわゆる鈴谷式土器に伴うものとオホーツク文化期に伴うものとの区別ができるものがある。例えば第3層中位の獣骨レベルより掘り込まれている1C区ピット8は、すでに述べているように鈴谷期のものであると考えている。ピット8に充填していたアシカは鈴谷期において海獣捕獲があったことを想定させる。また、E区・D区ベルトの魚骨ブロックBは円形刺突文と縄線文、縄文を伴う鈴谷式土器が含まれていることから鈴谷期のものである。この魚骨ブロックBはタラが主体となっている。タラ漁が具体的にどのような方法で行われたのかを知るための手がかりとなる資料は不明であるが、タラ類のほとんどがマダラであることは12月から1月にかけての産卵期に比較的沿岸に近い特定の場所に集まってくるのを捕獲したであろう。こうした鈴谷期の限られた動物遺体からは、鈴谷期において大きく海に依存していた生活を思い浮かべることができる。さらに、1D区ベルトの魚骨ブロックからは9種類の植物遺体が得られた。可食植物と思われるものはオニグルミ、ヤマブドウ、キハダ、マタタビ属の4種類であった。

以上述べてきたように、利尻富士町役場遺跡に形成された文化は、鈴谷式土器を伴う文化とオホーツク文化である。両者の関係については様々に議論されているところであるが、残念ながら両文化の明確な類似点・相違点を据えることはできなかった。また、鈴谷式土器の定義をめぐって様々に議論されている背景には、鈴谷式土器の成立が未だ解明されていないことも理由の一つとしてあげられる。このように鈴谷式土器を伴う文化の実態が不明であったことを考えるならば、本遺跡の発掘調査の成果は今後の鈴谷文化自体の理解と解明、オホーツク文化との関係、さらには続縄文時代の周辺地域の文化との関係を据えるうえで、貴重な資料情報を得ることができたのである。　　（西谷榮治）

第1表 遺構一覧表

挿図番号	Pit№	平面形	規模cm	深cm	出土遺物	現場記載	遺構掘り込みレベル	備考
第7図	1	(略長円形)	66×50	59	鈴谷9 不明1 石錘1 ナイフ4 使痕剝3 Uフ5 フレ33 チップ260g	I-E Pit 1	不明 第3層中位より上削失	撹乱有り
第7図	2	(長円形)	(－×35)	40		I-E Pit 2	不明 第3層中位より上削失	撹乱有り
第7図	3	長円形	42×36	16	オホ1 不明1 使痕剝1 フレ9 チップ7g	I-D Pit 1	第3層下位 小ブロック包含層下	
第7図	4	略円形	40×38	25	鈴谷1 不明1 フレ4 チップ9g	I-D Pit 2	第3層下位 小ブロック包含層下	
第7図	5	略円形	46×42	22	鈴谷3 オホ1 フレ12 チップ9g	I-D Pit 3	第3層下位 小ブロック包含層下	
第7図	6	－	－	22	フレ2	I-D Pit 4	第3層下位 セクションより	発掘区境 Pit17下
第7図	7	－	－	－		I-D Pit 5	不明 底部の一部のみ残存	撹乱部底
第7図	8	長円形	24×20	29	獣骨充填	I-C B40～43獣骨Pit	第3層下位 獣骨ブロック中より	
第7図	9	－	(34×－)	40		I-C Pit 3	第2層下位 セクションより	発掘区境
第7図	10	略円形	43×42	29	鈴谷2 オホ1 スク1 フレ5 チップ6g	I-C B45Pit	第3層下位 獣骨ブロック下より	
第7図	11	略長円形	51×43	27	鈴谷3 オホ2 石錘2 フレ20	I-C Pit 1	第3層下位 獣骨ブロック下より	
第7図	12	長円形	26×22	24	鈴谷1	I-C Pit 2	第3層下位 包含層掘り下げ	
第8図	13	－	(34×－)	34		I-A Pit 4	第3層下位 セクションより	発掘区境
第8図	14	長円形	33×28	13	オホ1	I-A Pit 2	第3層下位 包含層掘り下げ	
第8図	15	長円形	32×28	17		I-A Pit 1	第3層下位 包含層掘り下げ	
第8図	16	略円形	48×46	33		I-A Pit 3	第3層下位 包含掘り下げ	
第8図	17	－	－	60		I-D配石遺構	第2層下位 セクションより	発掘区境
第8図	18	円形	148×143	16	フレ17	I-B配石遺構	第3層下位 包含層掘り下げ	

第5表　器種・層位別石器出土一覧表

器種	出土層位				総数
	遺構	第2層	第3層	撹乱部	
石鏃	3	10	43	9	65
タイプ1　有茎	1	1	12	2	(16)
タイプ2　無茎		1	3	1	(5)
タイプ3　無茎		2	11	2	(15)
タイプ4　無茎	1	2	7	1	(11)
タイプ5　無茎		2	8	3	(13)
未分類	1	2	2		(5)
有茎銛先		2	15	8	25
無茎銛先		1	9	2	12
錐		1	2		3
ナイフ	4	8	50	11	73
スクレーパー	1	3	9	4	17
使用痕有る剝片	4	3	16	9	32
石斧		2	12	6	20
敲石			2		2
砥石			4	2	6
有溝石錘			3		3
有孔砥石				2	2
合計	12	31	164	53	260

第6表　遺構出土石器計測一覧表

No.	挿図番号	出土地区	層位	器種	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量g	石質	現場記載	備考
1	25－1	Pit－1	遺構内	有茎石鏃	(19.0)	14.0	4.0	(0.5)	Obs	I-E Pit 1	タイプ1
2	25－2	Pit－1	遺構内	ナイフ	55.0	37.0	8.0	13.5	Sha	I-E Pit 1	
3	25－3	Pit－1	遺構内	ナイフ	82.0	42.0	10.0	37.0	Sha	I-E Pit 1	
4	25－4	Pit－1	遺構内	ナイフ	67.0	28.0	8.0	22.0	Sha	I-E Pit 1	
5	25－5	Pit－1	遺構内	ナイフ	(33.0)	57.0	9.0	20.0	Sha	I-E Pit 1	
6	25－6	Pit－1	遺構内	使用痕の有る剥片	54.0	39.0	9.0	23.5	Sha	I-E Pit 1	
7	25－7	Pit－1	遺構内	使用痕の有る剥片	46.0	41.0	6.0	13.0	Sha	I-E Pit 1	
8	25－8	Pit－1	遺構内	使用痕の有る剥片	(39.0)	(29.0)	8.0	(9.0)	Sha	I-E Pit 1	
9	25－9	Pit－1	遺構内	使用痕の有る剥片	(27.0)	21.0	3.0	(2.0)	Sha	I-D Pit 1	
10	25－10	Pit－10	遺構内	スクレーパー	95.0	36.0	9.0	42.0	Sha	I-C B45Pit	
11	25－11	Pit－11	遺構内	無茎石鏃	22.0	8.0	1.5	0.5	Sha	I-C Pit 1	タイプ4　○
12		Pit－11	遺構内	石鏃	(7.0)	(10.0)	3.0	(0.3)	Sha	I-C Pit 1	未分類（破片）

第7表　発掘区出土石器計測一覧表

No.	挿図番号	出土地区	層位	器種	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量g	石質	現場記載	備考
1	26－1	I－D	3	有茎石鏃	21.0	11.0	4.5	1.0	Sha.	S-19	タイプ1
2	26－2	I－D	3	有茎石鏃	24.0	7.0	2.0	0.5	Sha.	S-26	タイプ1　○
3	26－3	I－C	3	有茎石鏃	29.0	10.0	3.0	1.0	Sha.	S-13	タイプ1　○
4	26－4	I－C	2	無茎石鏃	24.0	11.0	3.0	1.0	Sha.	S－2	タイプ3　○
5	26－5	I－C	2	有茎石鏃	30.0	10.5	4.0	1.0	Sha.	S－4	タイプ1
6		I－B	3	有茎石鏃	19.5	9.5	2.5	0.5	Aga.	S－4	タイプ1
7		I－B	3	有茎石鏃	17.5	11.5	2.5	0.5	Obs.		タイプ1
8		I－C	3	有茎銛先	41.0	14.5	6.0	3.0	Sha.	S-17	△
9		I－C	表	有茎石鏃	(27.0)	13.0	3.0	(1.0)	Sha.		タイプ1　○
10		I－C	3	有茎石鏃	(33.0)	13.5	4.0	(1.3)	Obs.		タイプ1　熱を受けている　○
11		I－C	3	有茎石鏃	(23.0)	11.5	4.4	(1.0)	Sha.	S－6	タイプ1　タール付着
12		I－E	3	有茎石鏃	(14.0)	8.0	2.0	－	Sha.		タイプ1　○
13		I－E	3	有茎石鏃	(16.0)	(13.7)	2.5	－	Sha.		タイプ1　○
14	26－6	I－E	3	無茎石鏃	24.0	8.5	1.9	0.3	Sha.	No 43	タイプ4　○
15	26－7	I－D	3	無茎石鏃	25.0	9.0	2.5	0.5	Sha.	S-16	タイプ4　○
16		I－C	3	無茎石鏃	15.5	6.0	2.2	0.2	Obs.	S-14	タイプ4　○
17		I－E	3	無茎石鏃	31.7	10.0	3.0	1.0	Obs.	No 30	タイプ4　熱を受けている　○
18		I－D	3	無茎石鏃	39.0	15.2	4.7	2.3	Sha.	S-12	
19		I－C	2	無茎石鏃	(25.0)	10.5	2.0	(0.5)	Obs.		タイプ4　○
20		I－E	表	無茎石鏃	(17.2)	9.4	2.3	(0.3)	Obs.		タイプ4　熱を受けている　○
21		I－D	3	無茎石鏃	(16.0)	(15.5)	2.4	－	Obs.		タイプ4　○
22	26－8	I－B	3	無茎石鏃	26.0	12.0	2.8	0.7	Sha.	S－5	タイプ3　○
23	26－9	I－C	2	無茎石鏃	29.4	13.5	4.0	1.5	Sha.	S－1	タイプ3　○
24	26－10	I－E	3	無茎石鏃	30.5	11.7	3.0	1.0	Sha.		タイプ3　○
25	26－11	I－D	3	無茎石鏃	37.0	12.4	3.5	1.3	Sha.		タイプ2　○
26	26－12	I－D	3	無茎石鏃	40.0	14.3	4.3	1.8	Ba-.and	S-25	タイプ2　○
27	26－13	I－D	3	無茎石鏃	42.0	13.7	3.9	1.7	Sha.	S-10	タイプ2　○
28	26－14	I－D	2	無茎石鏃	41.1	12.0	4.4	2.0	Sha.		タイプ2

No.	挿図番号	出土地区	層位	器種	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量 g	石質	現場記載	備考	
29		I－C	3	有茎石鏃	18.5	8.0	3.0	0.3	Obs.	S－12	タイプ1	
30		I－D	3	有茎石鏃	24.0	7.7	3.0	0.5	Obs.	S－11	タイプ1	
31		I－B	3	無茎石鏃	19.5	10.7	2.9	0.7	Aga.	S－1	タイプ3	○
32		I－D	3	無茎石鏃	16.6	8.6	2.4	0.2	Sha.		タイプ3	○
33		I－D	3	無茎石鏃	19.9	10.6	3.0	0.5	Sha.	S－29	タイプ3	○
34		I－C	3	無茎石鏃	21.9	11.6	4.0	0.8	Sha.	S－7	タイプ3	○
35		I－C	表	無茎石鏃	22.9	12.4	3.0	0.5	Sha.		タイプ3	○
36		I－D	3	無茎石鏃	20.0	12.9	3.0	1.0	Aga.		タイプ3	○
37		I－D	3	無茎石鏃	23.4	14.1	2.6	0.5	Sha.		タイプ3	○
38		I－C	3	無茎石鏃	24.2	11.0	3.2	0.5	Aga.	S－20	タイプ3	○
39		I－C	3	有茎石鏃	31.9	11.4	4.0	1.0	Sha.		タイプ1	○
40		I－E	3	無茎石鏃	(19.2)	8.2	3.0	(0.3)	Sha.		タイプ3	○
41		I－D	3	無茎石鏃	(23.8)	10.7	3.3	(0.5)	Sha.		タイプ3 基部欠損	○
42		I－D	表	無茎石鏃	(27.0)	12.8	5.0	(1.3)	Sha.		タイプ3	
43		I－B	撹乱	無茎石鏃	(40.0)	12.6	4.0	(1.8)	Sha.		タイプ2	
44	26－15	I－C	3	無茎石鏃	30.5	13.5	2.8	1.0	Aga.	S－18	タイプ5	○
45	26－16	I－D	3	無茎石鏃	30.3	11.5	3.8	1.3	Aga.	S－1	タイプ5	○
46	26－17	I－A	2	無茎石鏃	37.2	13.8	4.2	1.8	Aga.	S－3	タイプ5	○
47	26－18	I－C	3	無茎石鏃	26.4	14.3	4.7	1.3	Sha.		タイプ5	○
48	26－19	I－D	3	無茎石鏃	23.8	10.5	3.2	0.7	Aga.		タイプ5	○
49		I－E	3	無茎石鏃	21.2	7.9	1.9	0.2	Sha.		タイプ5	○
50		I－C	表	無茎石鏃	23.0	10.3	10.4	3.7	Aga.		タイプ5 熱を受けている	○
51		I－C	表	有茎石鏃	24.5	12.4	3.4	0.5	Sha.		タイプ1	○
52		I－C	表	無茎石鏃	26.3	11.0	3.4	1.0	Aga.		タイプ5	○
53		I－E	3	無茎石鏃	31.8	16.7	3.7	1.2	Aga.	No 29	タイプ5	○
54		I－D	3	無茎石鏃	38.9	10.6	3.8	1.0	Sha.	S－28	タイプ5	○
55		I－C	2	無茎石鏃	(21.3)	12.4	3.5	(0.9)	Ba－and		タイプ5	○
56		I－E	表	無茎石鏃	(19.8)	11.5	2.9	(0.8)	Aga.		タイプ5	○
57		I－B	3	石鏃	(29.0)	(17.0)	4.0	－	Sha.		調部片	
58		I－A	2	石鏃	(15.0)	10.4	2.9	－	Aga.		調部片	
59		I－A	2	石鏃	(14.0)	12.6	3.9	－	Sha.		調部片	
60		I－D	3	無茎石鏃	(14.0)	11.2	3.0	－	Obs.		タイプ4 尖部	○
61		I－E	3	無茎石鏃	(11.0)	11.4	2.2	－	Obs.		タイプ4 基部	○
62		I－C	2	無茎石鏃	(16.0)	13.6	3.9	－	Obs.		タイプ4 基部	○
63		I－E	3	石鏃	(9.0)	(13.5)	3.4	－	Obs.		調部片	
64	26－20	I－B	3	無茎鏃先	28.4	20.0	3.6	3.6	Sha.	S－2		
65	26－21	I－D	3	無茎鏃先	29.6	18.0	3.8	1.5	Obs.		熱を受けている	
66	26－22	I－D	3	無茎鏃先	38.2	20.5	5.5	3.8	Sha.			
67	26－23	I－D	3	無茎鏃先	41.0	18.8	5.7	4.2	Sha.	S－5		
68		I－C	3	無茎鏃先	29.4	17.7	4.3	1.8	Sha.			
69		I－D	表	無茎鏃先	36.3	21.0	3.8	2.8	Ba－and			
70		I－D	3	無茎鏃先	44.8	26.4	5.0	5.3	Sha.			
71		I－D	3	無茎鏃先	(26.0)	20.0	3.2	(1.8)	Sha.			
72		I－C	表	無茎鏃先	35.2	(16.0)	4.1	(2.0)	Obs.		側縁部欠損 熱を受けている	
73	26－24	I－D	3	有茎鏃先	51.6	18.5	6.0	4.3	Ba－and	S－14		△

No.	挿図番号	出土地区	層位	器種	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量 g	石質	現場記載	備考
74	26－25	I－D	3	有茎鏃先	(52.3)	21.2	6.6	(6.0)	Sha.	S－26	△
75	26－26	I－C	3	有茎鏃先	88.6	27.5	7.2	13.7	Sha.		炭化物付着 △
76	26－27	I－D	3	有茎鏃先	(79.9)	33.4	8.4	(18.4)	Sha.	S－13	△
77	26－28	I－D	2	有茎鏃先	63.0	26.0	8.3	10.3	Sha.	S－6	
78	26－29	I－C	3	有茎鏃先	(65.5)	23.1	6.9	(7.3)	Sha.	S－19	△
79		I－E	表	有茎鏃先	(36.2)	16.6	5.2	(3.0)	Sha.		△
80		I－B	撹乱	有茎鏃先	(40.1)	22.8	8.4	(5.7)	Sha.		
81		I－D	3	有茎鏃先	47.5	15.6	5.0	2.8	Obs.		熱を受けている △
82		I－C	3	有茎鏃先	(45.4)	24.8	7.0	(8.7)	Sha.		
83		I－D	3	有茎鏃先	54.9	21.2	8.8	7.3	Obs.	S－9	△
84		I－C	3	有茎鏃先	55.2	23.5	8.0	6.8	Sha.	S－16	
85		I－D	3	有茎鏃先	60.8	31.7	10.2	15.0	Ba.-and	S－7	△
86		I－C	3	有茎鏃先	59.8	27.0	6.4	8.5	Sha.		△
87		I－D	2	有茎鏃先	61.0	24.2	6.0	7.8	Sha.	S－4	△
88		I－E	撹乱	有茎鏃先	62.0	31.2	8.6	12.7	Sha.		
89		I－C	3	有茎鏃先	(65.0)	33.0	7.8	－	Sha.		△
90		I－C	表	有茎鏃先	(43.0)	31.7	6.4	－	Sha.		△
91		I－E	表	有茎鏃先	(40.0)	(24.0)	(8.0)	－	Sha.		
92		I－D	3	有茎鏃先	(31.0)	17.7	4.2	－	Sha.		△
93		I－E	表	有茎鏃先	(34.0)	(18.0)	(4.8)	－	Obs.		
94		I－C	3	有茎鏃先	(23.0)	－	－	－	Sha.		
95		I－E	表	有茎鏃先	(15.0)	－	－	－	Aga.		
96		I－E	表	有茎鏃先	(15.0)	－	－	－	Aga.		
97	27－30	I－C	3	雛	23.0	26.3	7.0	3.3	Obs.		
98		I－C	2	雛	26.8	17.3	3.4	1.2	Aga.		
99		I－D	3	雛	(33.9)	17.4	11.6	7.2	Sha.		
100	27－31	I－D	3	ナイフ	54.7	18.8	9.4	10.2	Sha.	S－8	
101	27－32	I－B	3	ナイフ	60.5	23.0	7.9	9.7	Sha.	S－3	側縁部欠損
102	27－33	I－E	3	ナイフ	67.0	21.0	6.2	11.0	Sha.		
103	27－34	I－C	3	ナイフ	61.5	15.6	4.6	5.2	Sha.	S－15	先端部欠損
104	27－35	I－D	3	ナイフ	64.0	38.6	8.8	18.0	Sha.	S－20	
105	27－36	I－D	3	ナイフ	65.4	33.8	9.0	19.0	Sha.	S－15	
106	27－37	I－D	3	ナイフ	55.2	24.0	6.8	8.7	Sha.	S－21	
107	27－38	I－D	3	ナイフ	73.7	26.8	8.3	16.8	Sha.		
108	27－39	I－E	3	ナイフ	79.3	29.3	10.0	22.0	Ba.-and	No 4	
109	27－40	I－E	3	ナイフ	77.7	40.2	11.7	32.0	Sha.	No 21	
110	27－41	I－C	3	ナイフ	108.6	30.9	8.5	27.5	Sha.	S－10	
111	27－42	I－C	2	ナイフ	93.5	40.5	10.0	38.0	Sha.	S－3	
112	27－43	I－A	3	ナイフ	92.8	30.4	7.9	28.0	Sha.	S－7	
113	28－44	I－D	3	ナイフ	64.0	57.8	11.1	48.0	Sha.		
114	28－45	I－A	2	ナイフ	77.4	38.0	10.0	20.0	Sha.		
115		I－E	表	ナイフ	29.0	14.0	4.2	1.8	Obs.		
116		I－B	撹乱	ナイフ	34.0	21.7	8.9	8.2	Aga.		
117		I－A	2	ナイフ	48.2	25.5	6.8	7.2	Sha.	S－1	
118		I－E	表	ナイフ	45.0	33.8	7.7	12.8	Aga.		

No.	図版番号	出土地区	層位	器種	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量 g	石質	現場記載	備考
119		I－E	3	ナイフ	57.3	31.7	5.3	8.5	Sha.	Na 13	
120		I－D	3	ナイフ	56.8	26.0	10.1	11.3	Sha.		
121		I－D	2	ナイフ	43.4	24.8	10.0	9.0	Obs.		熱を受けている
122		I－E	3	ナイフ	46.8	16.0	7.4	5.5	Aga.		
123		I－E	3	ナイフ	51.7	19.4	6.0	5.7	Obs.		熱を受けている
124		I－B	2	ナイフ	61.0	21.2	8.4	9.2	Aga.	S－6	熱を受けている
125		I－E	表	ナイフ	60.9	51.0	13.0	40.0	Sha.		
126		I－D	3	ナイフ	65.2	30.3	8.6	15.2	Sha.	S－27	
127		I－E	表	ナイフ	61.8	28.0	10.8	19.5	Aga.		
128		I－E	3	ナイフ	62.6	26.7	8.9	11.2	Sha.	Na 26	
129		I－C	表	ナイフ	77.8	25.3	8.5	19.0	Sha.		
130		I－D	3	ナイフ	63.0	25.0	7.0	12.3	Sha.		
131		I－E	3	ナイフ	94.8	33.7	8.8	29.3	Sha.	Na 30	
132		I－C	3	ナイフ	79.7	32.4	9.0	21.3	Sha.	S－9	
133		I－D	3	ナイフ	67.5	46.3	15.2	45.0	Sha.		
134		I－D	3	ナイフ	84.6	34.0	7.9	27.8	Sha.	S－22	
135		I－D	2	無基鏃先	(26.0)	16.0	5.0	－	Aga.		
136		I－E	3	無基鏃先	(24.0)	23.5	3.8	－	Sha.		
137		I－D	2	ナイフ	(38.0)	(34.2)	6.5	－	Sha.		胴部
138		I－C	3	ナイフ	30.0	(15.0)	4.7	1.8	Sha.		側縁部欠損
139		I－C	3	ナイフ	(36.0)	27.7	5.6	－	Sha.		胴部
140		I－C	3	ナイフ	(14.0)	－	－	－	Aga.	S－11	先端部
141		I－D	3	ナイフ	(12.0)	－	－	－	Obs.		先端部
142		I－D	3	ナイフ	(27.0)	－	－	－	Sha.		先端部
143		I－D	3	ナイフ	(37.0)	－	－	－	Sha.		先端部
144		I－D	3	ナイフ	(31.0)	－	－	－	Obs.		先端部　熱を受けている
145		I－E	3	ナイフ	(37.0)	－	－	－	Sha.		先端部
146		I－A	3	ナイフ	(43.0)	－	－	－	Sha.		先端部
147		I－A	2	ナイフ	(42.0)	27.9	9.5	－	Aga.	S－2	先端部
148		I－A	3	ナイフ	(48.0)	27.4	9.4	－	Ba.-and	S－5	先端部
149		I－C	3	ナイフ	(46.0)	(42.2)	11.3	－	Obs.		先端部
150		I－C	3	ナイフ	(53.4)	(36.6)	10.0	－	Sha.		先端部
151		I－C	3	ナイフ	(48.0)	30.0	8.8	－	Sha.		先端部
152		I－D	3	ナイフ	(68.0)	(44.0)	11.3	－	Sha.	S－23	先端部
153		I－D	3	ナイフ	(44.0)	(67.0)	－	－	Sha.		先端部
154		I－E	表	ナイフ	(57.0)	(55.0)	10.4	－	Sha.		先端部
155		I－C	3	ナイフ	(76.0)	－	－	－	Sha.		先端部
156		I－A	3	ナイフ	(42.0)	55.6	7.8	－	Sha.		先端部
157		I－B	撹乱	ナイフ	(31.0)	58.9	9.3	－	Sha.		先端部
158		I－D	3	ナイフ	(26.0)	－	－	－	Sha.		基部
159		I－C	3	ナイフ	(24.0)	－	－	－	Sha.		基部
160		I－C	2	ナイフ	(28.0)	－	－	－	Sha.		基部
161		I－B	撹乱	ナイフ	(24.0)	－	－	－	Sha.		基部
162		I－C	3	ナイフ	(26.0)	－	－	－	Aga.		基部
163		I－D	表	ナイフ	(26.0)	－	－	－	Aga.		基部

No.	挿図番号	出土地区	層位	器種	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量 g	石質	現場記載	備考
164		I－D	3	ナイフ	(36.0)	－	－	－	Sha.		基部
165		I－C	3	ナイフ	(42.0)	－	－	－	Sha.		基部
166		I－D	3	ナイフ	(38.0)	(19.0)	9.8	－	Sha.	S－17	基部
167		I－D	3	ナイフ	(55.0)	(19.0)	5.0	－	Sha.		基部
168		I－E	表	ナイフ	(57.0)	(31.0)	9.0	－	Sha.		側縁部欠損
169		I－D	3	ナイフ	68.2	(30.2)	8.6	(17.0)	Sha.		側縁部欠損
170		I－D	3	ナイフ	(61.0)	43.2	8.6	(22.5)	Sha.		先端部欠損
171	28－46	I－C	3	スクレーパー	41.4	25.0	6.6	8.0	Sha.		
172	28－47	I－B	3	スクレーパー	46.1	35.1	7.8	13.7	Sha.		
173	28－48	I－C	撹乱	スクレーパー	64.8	36.9	14.5	37.0	Sha.		
174	28－49	I－D	3	スクレーパー	88.0	31.8	17.3	43.9	Sha.	S－3	
175	28－50	I－C	3	スクレーパー	71.0	15.0	15.0	46.5	Sha.	S－8	
176		I－B	撹乱	スクレーパー	(23.0)	－	－	－	Sha.		先端部
177		I－C	3	スクレーパー	24.8	17.4	6.0	2.5	Obs.		
178		I－C	3	スクレーパー	31.5	21.4	6.8	6.2	Aga.		
179		I－C	2	スクレーパー	38.9	14.3	5.2	3.8	Obs.		
180		I－A	2	スクレーパー	38.6	23.0	10.0	9.7	Sha.		
181		I－E	表	スクレーパー	41.6	24.3	10.7	10.8	Sha.		
182		I－A	2	スクレーパー	42.0	32.7	5.8	8.2	Sha.		
183		I－D	3	スクレーパー	39.5	21.6	10.9	11.0	Sha.		
184		I－C	3	スクレーパー	48.2	25.7	10.0	13.0	Sha.		
185		I－C	3	スクレーパー	56.2	52.7	12.4	41.5	Sha.		
186		I－E	表	スクレーパー	73.3	52.6	21.6	78.0	Sha.		
187	28－51	I－E	表	使用痕の有る剝片	65.0	36.0	6.8	15.2	Sha.		
188		I－E	3	使用痕の有る剝片	43.5	13.6	3.0	1.8	Sha.		ツマミ有り
189		I－A	3	使用痕の有る剝片	44.0	16.5	4.5	3.2	Sha.		ツマミ有り
190		I－A	2	使用痕の有る剝片	(22.0)	－	－	－	Sha.		先端部
191		I－E	表	使用痕の有る剝片	(15.0)	－	－	－	Obs.		先端部
192		I－C	3	使用痕の有る剝片	(27.0)	－	－	－	Aga.		先端部
193		I－E	3	使用痕の有る剝片	26.6	37.8	6.4	4.3	Aga.		
194		I－C	3	使用痕の有る剝片	(33.0)	－	－	－	Sha.		基部
195		I－C	3	使用痕の有る剝片	40.1	25.0	3.5	4.0	Sha.		
196		I－C	3	使用痕の有る剝片	53.5	16.2	5.9	4.8	Sha.		
197		I－D	3	使用痕の有る剝片	51.7	33.6	4.7	6.8	Sha.		
198		I－E	表	使用痕の有る剝片	46.5	35.2	8.3	14.2	Sha.		
199		I－C	3	使用痕の有る剝片	60.5	36.8	9.3	15.8	Sha.		
200		I－D	3	使用痕の有る剝片	54.2	26.5	10.4	14.3	Sha.		
201		I－C	2	使用痕の有る剝片	49.0	37.8	9.4	18.0	Sha.		
202		I－C	3	使用痕の有る剝片	51.1	30.7	5.7	9.3	Sha.		
203		I－A	2	使用痕の有る剝片	55.8	33.8	11.3	19.5	Sha.		
204		I－E	表	使用痕の有る剝片	55.4	45.0	9.4	32.2	Sha.		
205		I－E	表	使用痕の有る剝片	61.1	41.8	7.1	21.3	Sha.		
206		I－D	表	使用痕の有る剝片	69.0	36.8	5.0	13.5	Sha.		
207		I－B	撹乱	使用痕の有る剝片	59.7	40.9	11.8	30.2	Aga.		
208		I－A	撹乱	使用痕の有る剝片	83.6	32.7	14.4	34.9	Sha.		

No.	発掘番号	出土地区	層位	器種	長 cm	幅 cm	厚 cm	重量 g	石質	現場記載	備考
209		I－B	撹乱	使用痕の有る剥片	96.8	35.9	8.1	23.1	Sha.		
210		I－D	3	使用痕の有る剥片	62.2	46.5	11.6	32.8	Sha.		
211		I－C	3	使用痕の有る剥片	66.2	40.5	11.4	30.0	Sha.		
212		I－D	3	使用痕の有る剥片	82.8	48.3	17.7	59.0	Sha.		
213		I－D	3	使用痕の有る剥片	75.0	49.5	10.6	38.3	Sha.		
214		I－D	3	使用痕の有る剥片	120.0	56.8	23.0	103.0	Sha.		
215	29－56	I－C	3	石斧	54.0	23.0	10.0	18.0			
216	29－57	I－E	3	石斧	56.0	34.0	11.0	25.0		No. 15	
217	29－58	I－E	表	石斧	75.0	39.0	18.0	58.0			
218	29－59	I－E	撹乱	石斧	77.0	43.0	14.0	62.0			
219	29－60	I－E	3	石斧	96.0	58.0	18.0	132.0		No. 40	
220	29－61	I－E	3	石斧	175.0	77.0	33.0	670.0		No. 32	
221	29－62	I－A	3	石斧	130.0	38.0	48.0	390.0		S－6	
222		I－E	表	石斧	65.5	33.0	9.5	39.0			
223		I－E	3	石斧	65.0	45.0	15.5	65.0			
224		I－B	2	石斧	63.0	47.0	10.0	56.0			
225		I－D	3	石斧	66.0	29.0	10.5	33.0			
226		I－D	3	石斧	104.5	59.0	21.0	195.0		S－2	打製石斧
227		I－A	2	石斧	160.0	63.5	34.5	550.0		S－4	
228		I－C	3	石斧	(46.0)	42.5	31.5	－			刃部
229		I－D	3	石斧	(48.0)	－	－	－			中間部
230		I－E	3	石斧	(80.0)	－	－	－		No. 5	中間部
231		I－D	3	石斧	(83.5)	－	－	－		S－24	中間部
232		I－C	表	石斧	(45.0)	－	－	－			刃部
233		I－E	表	石斧	(17.0)	－	－	－			刃部
234		I－C	表	石斧	(63.5)	－	－	－			頭部
235		I－C	3	敲石	190.0	64.5	56.0	1,030.0			
236		I－D	3	敲石	125.5	102.5	53.0	920.0			
237	29－66	I－D	3	砥石	(114.0)	(42.0)	19.0	－	Sa.		
238		I－E	表	砥石	(130.0)	(48.0)	－	－	Sa.		
239		I－A	撹乱	砥石	(95.0)	(80.5)	－	－	Sa.		
240		I－E	3	砥石	(83.0)	(81.0)	－	－	Sa.		
241		I－E	3	砥石	(68.5)	(55.0)	－	－			
242		I－D	3	砥石	(42.0)	(40.0)	－	－	Sa.		
243	29－63	I－E	3	有溝石錘	146.0	83.0	83.0	1,385.0	And.	No. 34	
244	29－64	I－E	3	有溝石錘	145.0	99.0	77.0	1,505.0	And.	No. 35	
245	29－65	I－C	3	有溝石錘	123.0	110.0	73.0	1,255.0	And.	S－21	
246	28－52	I－E	表	有孔砥石	(75.0)	19.0	9.5	25.0			
247	28－53	I－D	表	有孔砥石	71.5	26.5	7.5	29.5			
248	28－54	I－C	3	金属器	－	－	－	(2.0)		P－1	
249	28－55	I－D	3	玉	11.5	12.0	7.0	0.7	Amb.	焦骨サンプルA	
250		I－D	3	無茎石鏃	14.3	7.0	1.5	0.2	Obs	焦骨サンプルA	タイプ5

第8表　遺跡別石器組成

器種別 / 遺跡名	有茎石鏃	無茎石鏃	有茎銛先	無茎銛先	ナイフ	スクレーパー	有る剝片使用痕の	計	時期	備考
瀬棚南川遺跡	556	17	23	1	246	201	352	1,396	恵山	住居、アトリエ、グリット。後北C2・Dを除く。他の石器1,600、メノウ鏃14,000。調査面積7,486㎡
紅葉山33号遺跡	151	413		4	285	182	464	1,499	恵山	土壙44、グリット。他の石器239、石鏃269。調査面積4,388㎡
チブタシナイ遺跡	2	4			2	35	14	57	後北C2・D	土壙38、グリット。調査面積3,229㎡
幣屋沢遺跡	2	110	1		106	282		501	後北C2・D	土壙292、グリット。他の石器98。調査面積3,400㎡
ワッカオイ遺跡	1	12				21		−	後北C2・D	土壙31。北大を除く。調査面積1,740㎡
芦間川大曲遺跡	47	69	1	1	69	(800)	13	(1,000)	続縄文前半	集石53、土壙22、グリット。他の石器147。調査面積1,380㎡
オンコロマナイ遺跡	47	28	22	6	57	14	10	184	鈴谷 オホーツク	住居3、覆土。他の石器34。調査面積　175㎡
利尻富士町役場遺跡	16	44	25	12	73	17	32	219	鈴谷 オホーツク	廃棄場。他の石器41。調査面積　75㎡
宇津内遺跡		17	1		47	113	43	221	宇津内Ⅱ	住居10、グリット。調査面積(1,500)㎡
栄浦第1遺跡	4	44	2		34	105	50	−	宇津内Ⅱ 後北C2・D	4A号住、ピット16A、57C、4号表土、'4号埋土の計を掲示。

第9表　骨角器属性表

No.	器種	出土地区	層	材質	長さ(㎜)	残存部位	図番号	図版番号	備考
1	銛先	ID	3	クジラ骨	65.1	一部欠損	1	1	焼けている。
2	銛先	IE	3	クジラ骨	79.3	一部欠損	2	2	未製品。
3	銛先？	IC	2	鹿角	11.7	破片		17	銛先の先端に近い部分の破片か。
4	槍先	ID	3	クジラ骨	218.0	完存	20	28	取り上げ時No.はB42。
5	槍先	ID	3	クジラ骨	48.1	破片	7	7	焼けている。
6	釣針先	IE	3	アザラシ類犬歯	29.5	一部欠損	3	3	水洗抽出。
7	へら	ID	3	クジラ骨	153.5	一部欠損	19	27	保存状態悪い。
8	へら	IC	2	クジラ骨	26.3	破片	4	4	焼けている。
9	針入れ	ID	3	アホウドリ？上腕骨	69.5	破片	6	6	水洗抽出。
10	装飾品	Pit10	3	鳥類中足骨	14.0	完存	8	8	水洗抽出。
11	不明	IC	3	トド雄下顎右犬歯	57.5	完存	5	5	取り上げ時No.はB37。
12	不明	ID	3	クジラ骨	215.0	一部欠損	24	29	
13	不明	IC	表土	クジラ骨	13.0	破片	9	9	焼けている。断面は半円形。
14	不明	ID	3	海獣骨？	20.7	破片	10	10	焼けている。断面は半円形で中心がわずかにくぼむ。
15	不明	ID	3	陸獣骨	19.9	破片	11	11	水洗抽出。焼けている。
16	不明	IC	表土	海獣骨	24.8	破片	12	12	焼けている。断面は八角形。
17	不明	IC	表土	海獣肋骨	26.2	破片	13	13	焼けている。肋骨を半截して中の海綿体を取り除いている。
18	不明	ID	3	クジラ骨	17.1	破片	14	14	焼けている。
19	不明	ID	3	クジラ骨	31.8	破片	15	25	焼けている。
20	不明	ID	3	クジラ骨	30.7	破片	16	24	焼けている。No.21と同一の可能性大。
21	不明	ID	3	クジラ骨	40.0	破片	17	23	焼けている。No.20と同一の可能性大。
22	不明	IE	3	海獣骨	6.4	破片		19	水洗抽出。棒状の製品の一部。焼けている。
23	不明	ID	3	クジラ骨	14.8	破片		18	水洗抽出。土掘り具の破片か？焼けている。
24	不明	IE	3	陸獣骨？	41.0	破片		21	水洗抽出。保存状態悪い。擦痕あり。
25	原材	IC	3	アシカ雄右下顎骨	94.7	一部欠損	21	26	
26	原材	表採		海獣肋骨	98.5	一部欠損	22	15	
27	原材	Pit2	3	海獣骨	103.6	半欠？	23	16	
28	原材	ID	3	海獣肋骨	28.1	破片		20	海獣肋骨を切ったもの。

第10表　土製品属性表

No.	出土地区	層	長さ(㎜)	重さ(g)	残存部位	図番号	図版番号
1	IC	表土	20.4	0.8	半欠	18	22

〔引用参考文献〕

石川　貞治　1889「北海道ニ於テアイヌ人種研究ノ急務ト石器時代住民の分布」『東京人類学雑誌』第38号

石附喜三男　1976「鈴谷式土器の南下と江別式土器」『北海道考古学』第12輯

石橋　孝夫　1975『ワッカオイ』単

石橋　孝夫　1976『ワッカオイ２』単

石橋　孝夫　1977『ワッカオイ３』単

石橋　孝夫　1984『紅葉山33号遺跡』単

泉靖一・曽野寿彦編　1967『オンコロマナイ』東京大学出版会

伊東　信雄　1942「樺太先史土器編年試論」『喜田貞吉博士追悼記念国史論集』東京大東書館

大井　晴男　1976「第２章第３節　遺構及び包含層各論　資料の分類について」『香深井遺跡』上　東京大学出版会

大井　晴男　1982「土器群の型式論的変遷について(上)(下)－型式論再考」『考古学雑誌』第67巻第３号・第４号

大島　秀俊　1990『蘭島餅屋沢遺跡』単

大島　秀俊　1992『チプタシナイ遺跡』単

大場利夫・大井晴男編　1973『オンコロマナイ貝塚』東京大学出版会

岡田　淳子　1978『亦稚貝塚』単

岡田　宏明　1967「第七章　総括と考察」『オンコロマナイ』東京大学出版会

加藤　邦雄　1983『瀬棚南川』単

菊池　俊彦　1981「第３章　香深井Ｂ遺跡」『香深井遺跡』下　東京大学出版会

木村　英明　1975『続縄文時代の墓壙群の研究』単

小林　哲夫　1987「利尻火山の地質」『地質学雑誌』93

椙田光明他　1978「骨角器」『亦稚貝塚』利尻町教育委員会

高橋　和樹　1976『瀬棚南川遺跡』単

高橋荘四郎ほか　1797『松前地並東西蝦夷地明細記』

田草川伝次郎　1807『西蝦夷地日記』

種市幸生編　1985『礼文島船泊段丘の遺跡群　東上泊・上泊３・上泊４遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター

土肥　研晶　1993『声問川大曲遺跡』単

名取　武光　1933「利尻、礼文両島に於ける考古学的調査報告」『史前雑誌』第５巻第３号

新岡　武彦　1970「旧邦領樺太先史土器論考」『北海道考古学』第６輯

西本　豊弘　1981「骨角器・骨角製品について」『香深井遺跡』下　東京大学出版会

西本　豊弘　1984「オホーツク文化の生業」『北海道の研究』２所収

東利尻町教育委員会　1977『埋蔵文化財緊急調査報告書』

藤本　強編　1985『栄浦第１遺跡』単

前田　　潮　1974「オホーツク文化とそれ以降の回転式銛頭の形式とその変遷」『史学研究』96

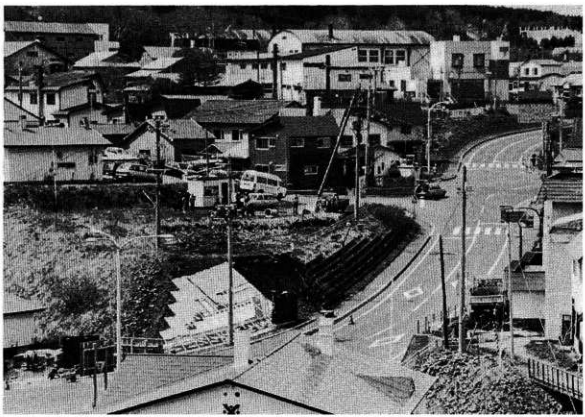
前田　　潮　1992『浜中２遺跡の発掘調査』単

松井　和典、一色直記ほか　1967『５万分の１地質図幅説明書「利尻島」』

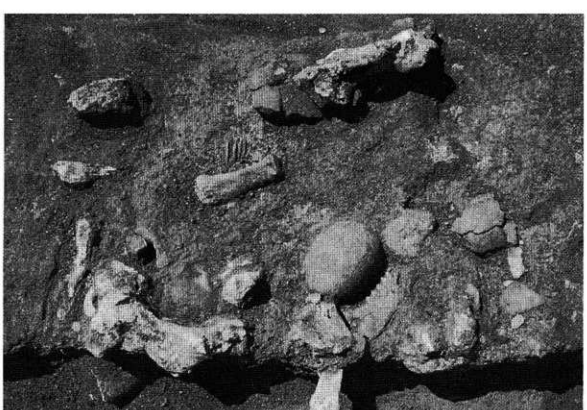
松浦武四郎　1851『再航蝦夷日誌』

山浦　　清　1985「樺太先史土器管見(Ⅰ)」『考古学雑誌』第71巻第１号

図版1



遺跡遠影



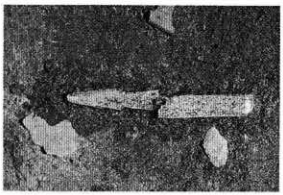
Dグリット獣骨

図版2

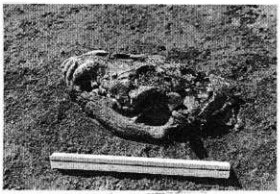
Cグリット獣骨

Cグリット第3層下面

図版3



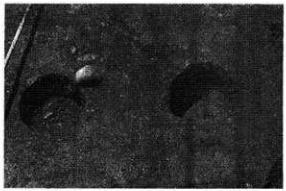
槍　先



イヌ頭骨

ピット5・4・3

ピット10



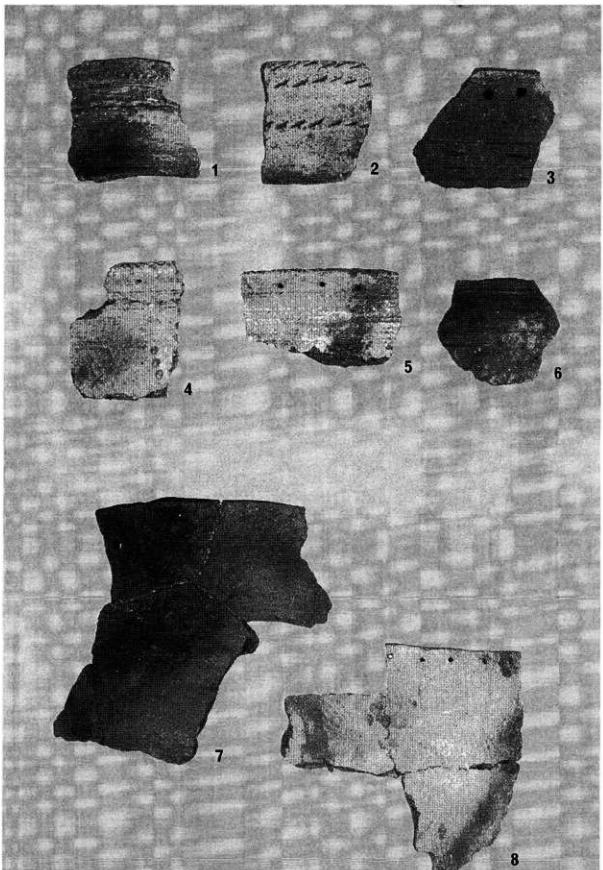
ピット10・11

図版4

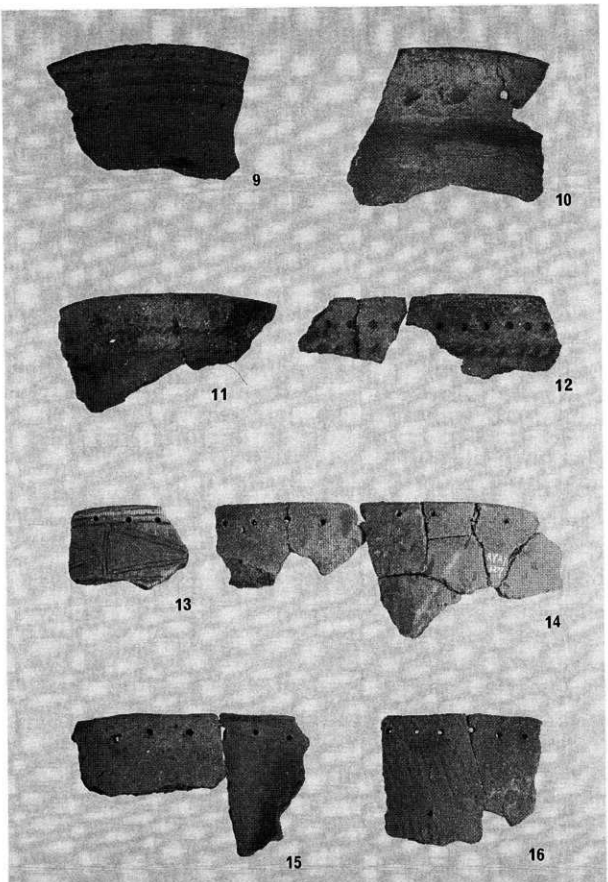
ピット8

ピット18（配石遺構）

図版5

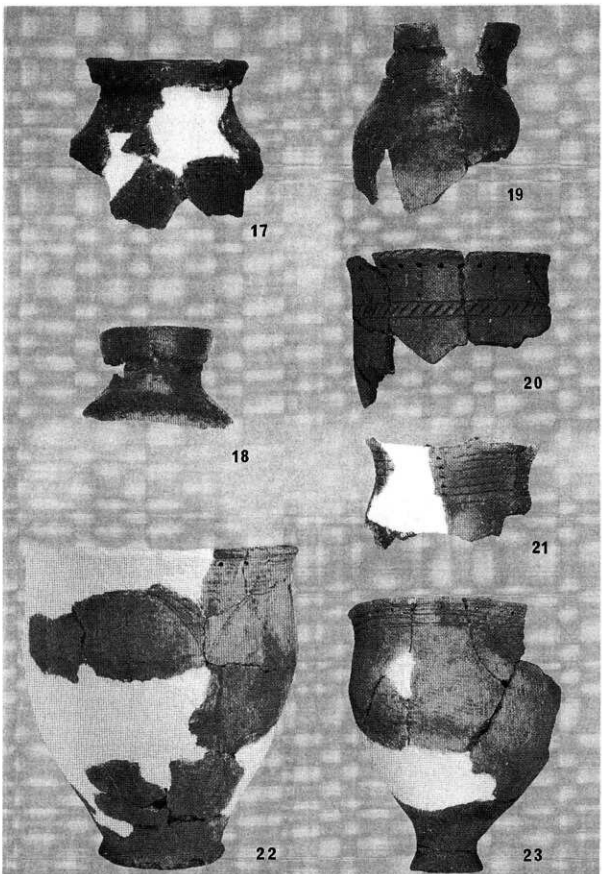


第1層 出 土 土 器（S＝½）



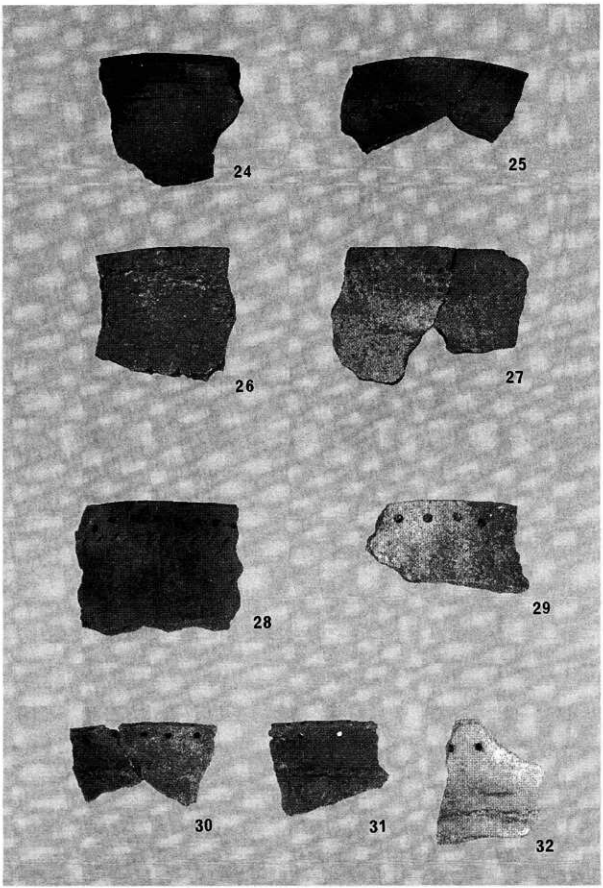
第2層 出 土 土 器（S＝½）

図版7



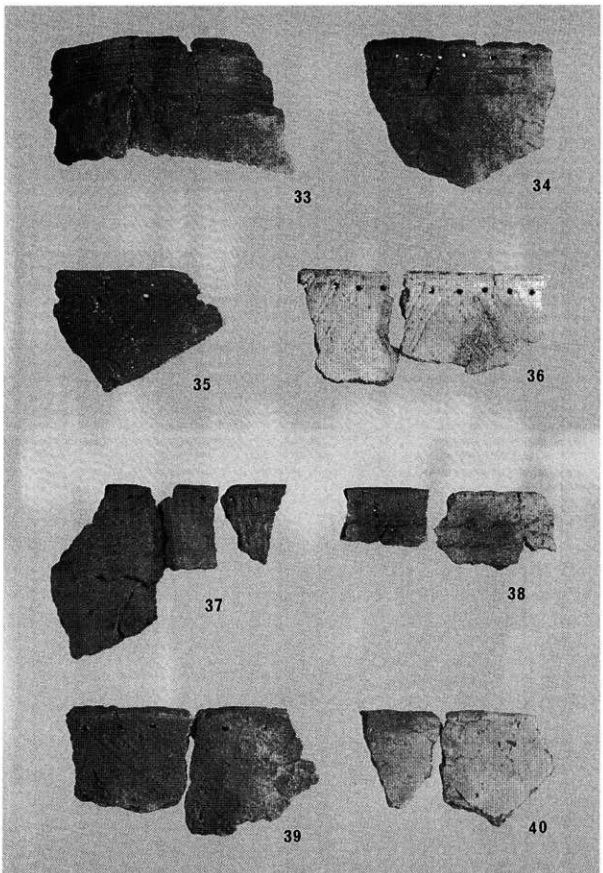
第3層 出 土 土 器（S＝⅓）

図版8



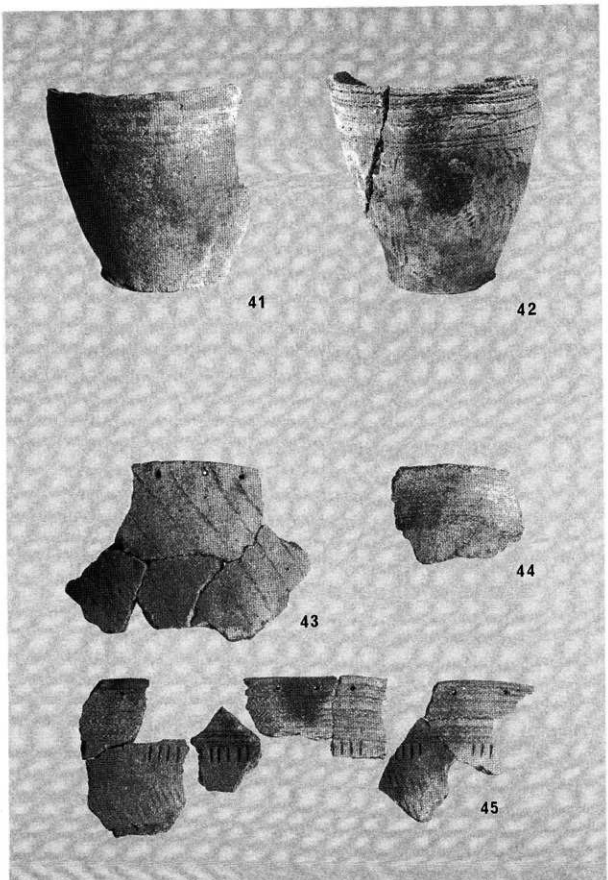
第3層 出 土 土 器（S＝½）

図版9



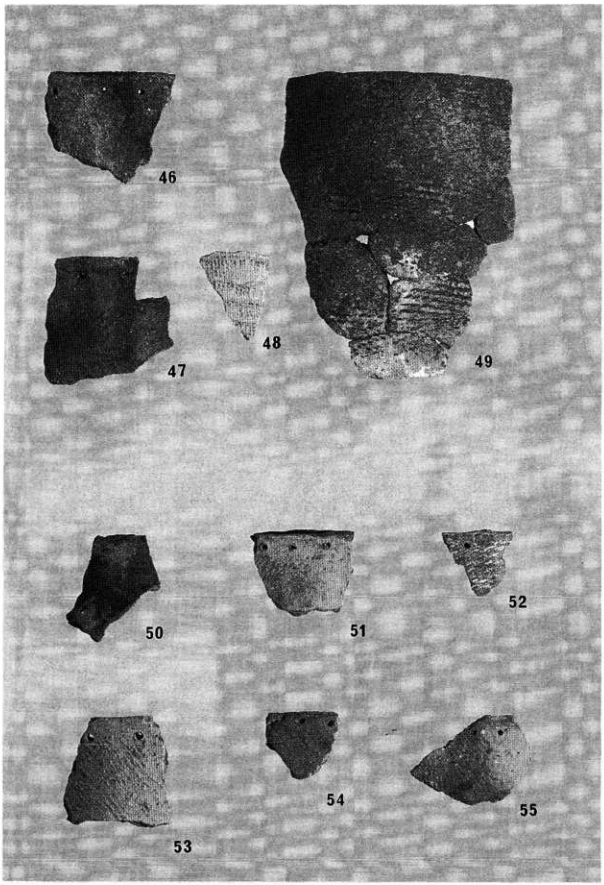
第3層 出 土 土 器（S＝½）

図版10



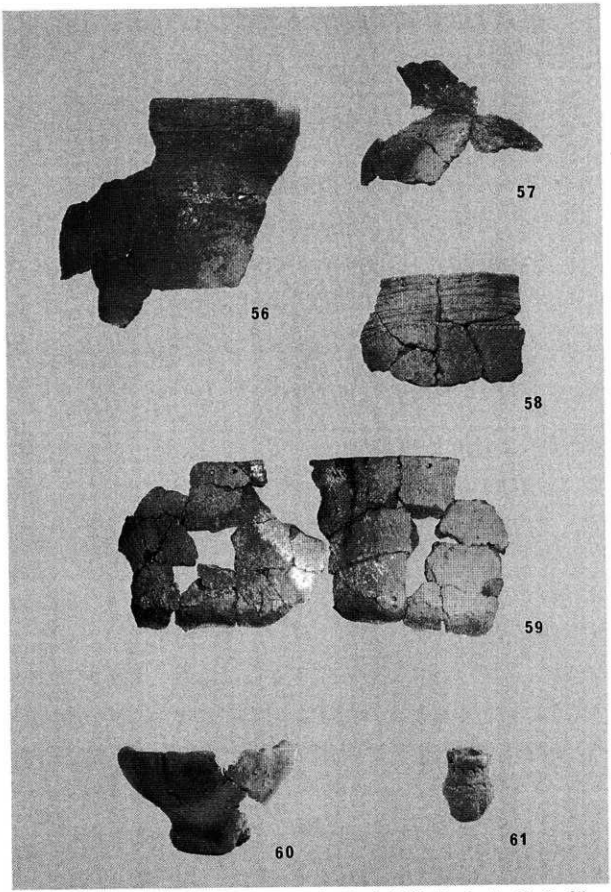
第3層　下層出土土器（S＝½）

図版11



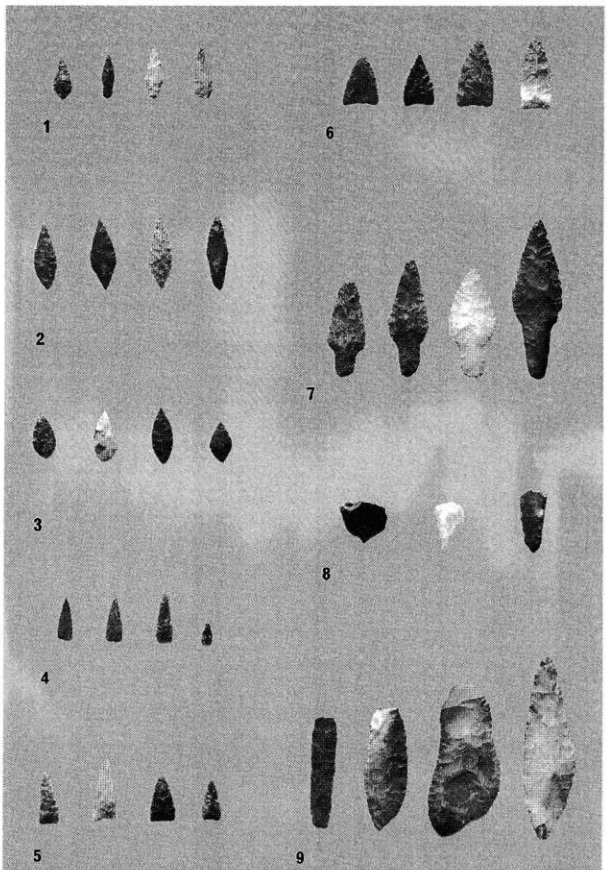
上：第3層　下層出土土器（S＝½）
下：遺　構　出　土　土　器（S＝½）

図版12



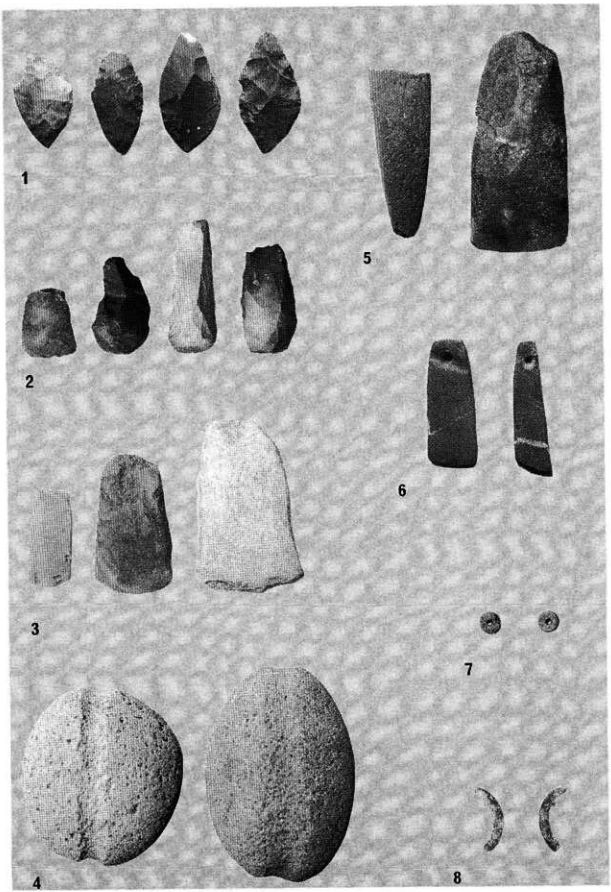
第1層　出土土器（56：S＝⅓）
第2層　出土土器（57：S＝⅓、60：S＝⅔）
第3層　出土土器（59：S＝⅓、61：S＝⅔）
第3層　下層出土土器（58：S＝⅓）

図版13



石　器　1

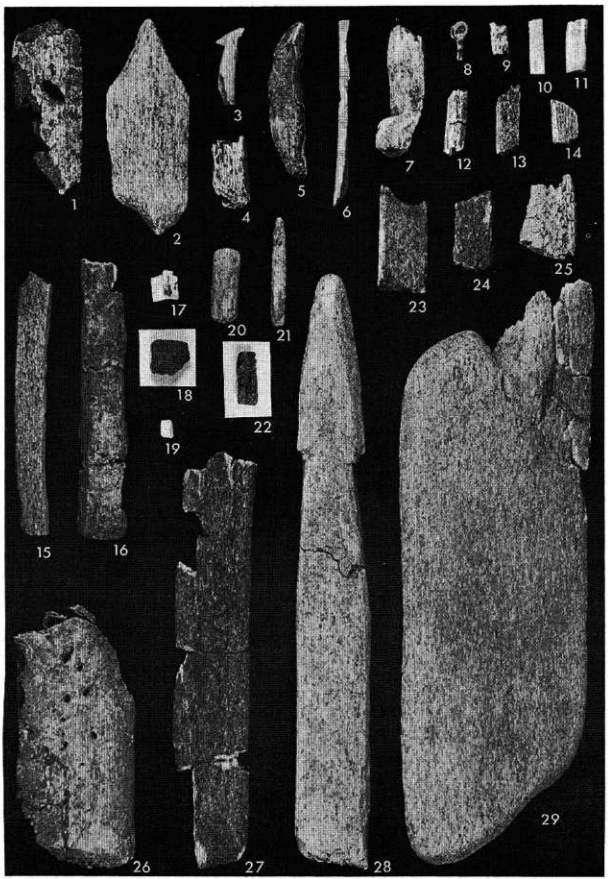
1.石鏃タイプ1、2.石鏃タイプ2、3.石鏃タイプ3、4.石鏃タイプ4、5.石鏃タイプ5、6.無茎鉇先、7.有茎鉇先、8.錐、9.ナイフ



石　器　2

1. ナイフ、2. スクレーパー、3. 石斧、4. 石錘、5. 石斧、6. 有孔磁石、7. 玉、8. 金属器

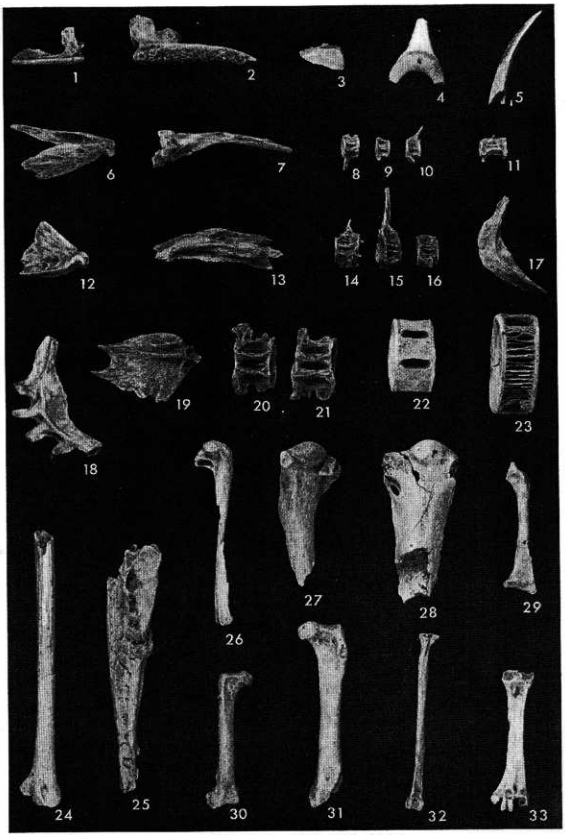
図版15



骨角器・土製品（約¾）

1～21・23～29　骨角器　　22　土製品

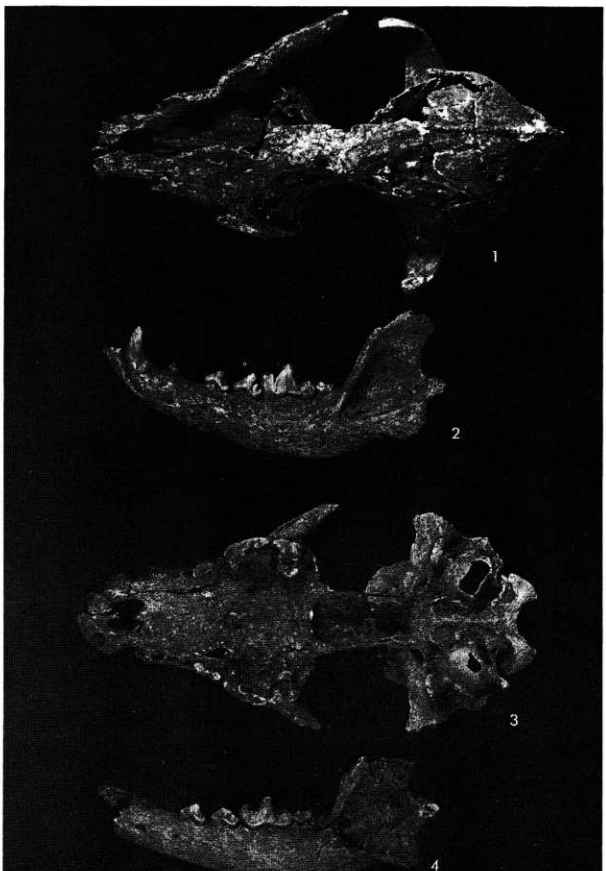
図版16



動物遺体1　魚類・鳥類（約¾）

1・6・12・18・19 カサゴ類（1.前上顎骨、6.歯骨、12.方骨、18.前鰓蓋骨、19.鰓蓋骨）
2・7・13・20・21 マダラ（2.前上顎骨、7.上顎骨、13.歯骨、20・21.椎骨）
3.フグ類歯板、4.ホホジロザメ歯、5.ツノザメ類歯、8～10.アイナメ類椎骨、11.サバ類椎骨、14～16.カレイ類椎骨
17.カレイ類前鰓蓋骨、22.アオザメ類椎骨、23.ネズミザメ類椎骨、24.アホウドリ尺骨、25.アビ類仙椎、26.ウミスズメ上腕骨
27.アビ類上腕骨、28.アホウドリ上腕骨、29.カラス鳥口骨、30.ヒメウ？大腿骨、31.アホウドリ大腿骨、32.ウミガラス脛骨
33.ヒメウ中足骨、2・13・19・24・27・31～33は左側、1・6・7・12・17・18・26・28～30は右側

図版17



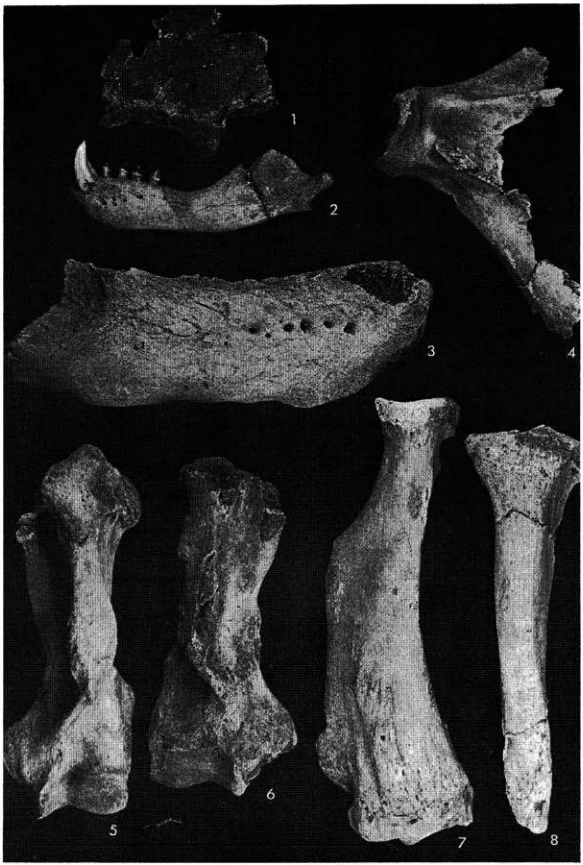
動物遺体2、イヌ(1)（約⅔）

1.頭蓋骨上面、2.下顎骨左側、3.頭蓋骨下面、4.下顎骨左側

図版18

動物遺体3、イヌ(2)（約⅔）

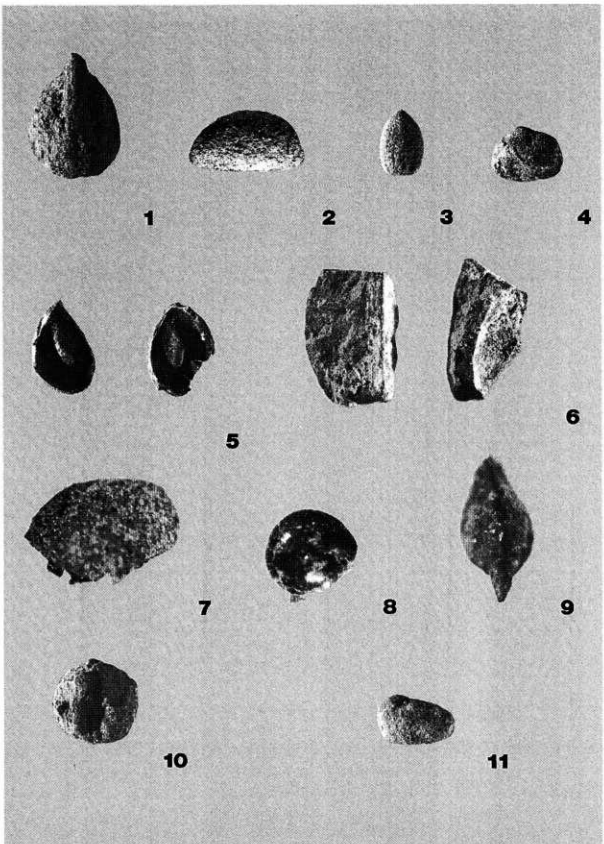
1.頭蓋骨側面、2・3.下顎骨、4.第一頸椎、5.第2頸椎、6・7.上腕骨、8.橈骨、9.尺骨、10.脛骨
7～10は左側、2・3・6は右側。3～9は同一個体。



動物遺体4、海獣類（約½）

1.アシカ♂頭蓋骨矢状縫部分、2.オットセイ♂下顎骨、3.トド♂下顎骨、4.アシカ♂肩甲骨、5.オットセイ♂上腕骨
6.アシカ♂上腕骨、7.アシカ♂橈骨、8.アシカ♂脛骨、2・4・5・7・8は左側、3・6は右側。

図版20



出土した植物遺体

1. ヤマブドウ種子（魚骨層A№1）、2. キハダ種子（魚骨層A№1）、3. エゾニワトコ種子（魚骨層A№1）
4. マメ科種子（魚骨層A№1）、5. ヤマブドウ種子片（魚骨層A№2）、6. オニグルミ核片（魚骨層A№2）
7. マタタビ属種子（魚骨層A№2）、8. アカザ科種子（魚骨層A№3）、9. タデ属そう果（魚骨層A№2）
10. ヤマブドウ種子（魚骨層A№3）、11. ウルシ属種子（魚骨層A№3）

報告書抄録

ふりがな	りしりふじちょうやくばいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	内山真澄・西谷栄治・新美倫子・熊木俊朗
編集機関	利尻富士町教育委員会
所在地	〒097－01 北海道利尻郡利尻富士町鴛泊字本町 TEL (01638) 2－1370
発行年月日	西暦 1995年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
りしりふじちょう 利尻富士町 やくばいせき 役場遺跡	はっかいどうりしりぐん 北海道利尻郡 りしりふじちょう 利尻富士町 おしどまりおがみなとまち 鴛泊字港町	015199	H－10－7	45度 14分 29秒	141度 13分 48秒	19940509～ 19940606	75	道路改修 工事に伴う 事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
利尻富士町 役場遺跡	散布地	続縄文 オホーツク	小ピット 16 配石遺構 2	土器 1,000 石器 260 骨角器 28 玉 3 金属器 1（片）	海獣解体後の獣骨廃棄場所(貝塚は伴わない)

利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書

印　　刷　平成７年３月25日
発　　行　平成７年３月30日
編集・発行　利尻富士町教育委員会
〒097－01
北海道利尻郡利尻富士町本町
ＴＥＬ（01638）２－１３７０
印　　刷　株式会社　国　　境